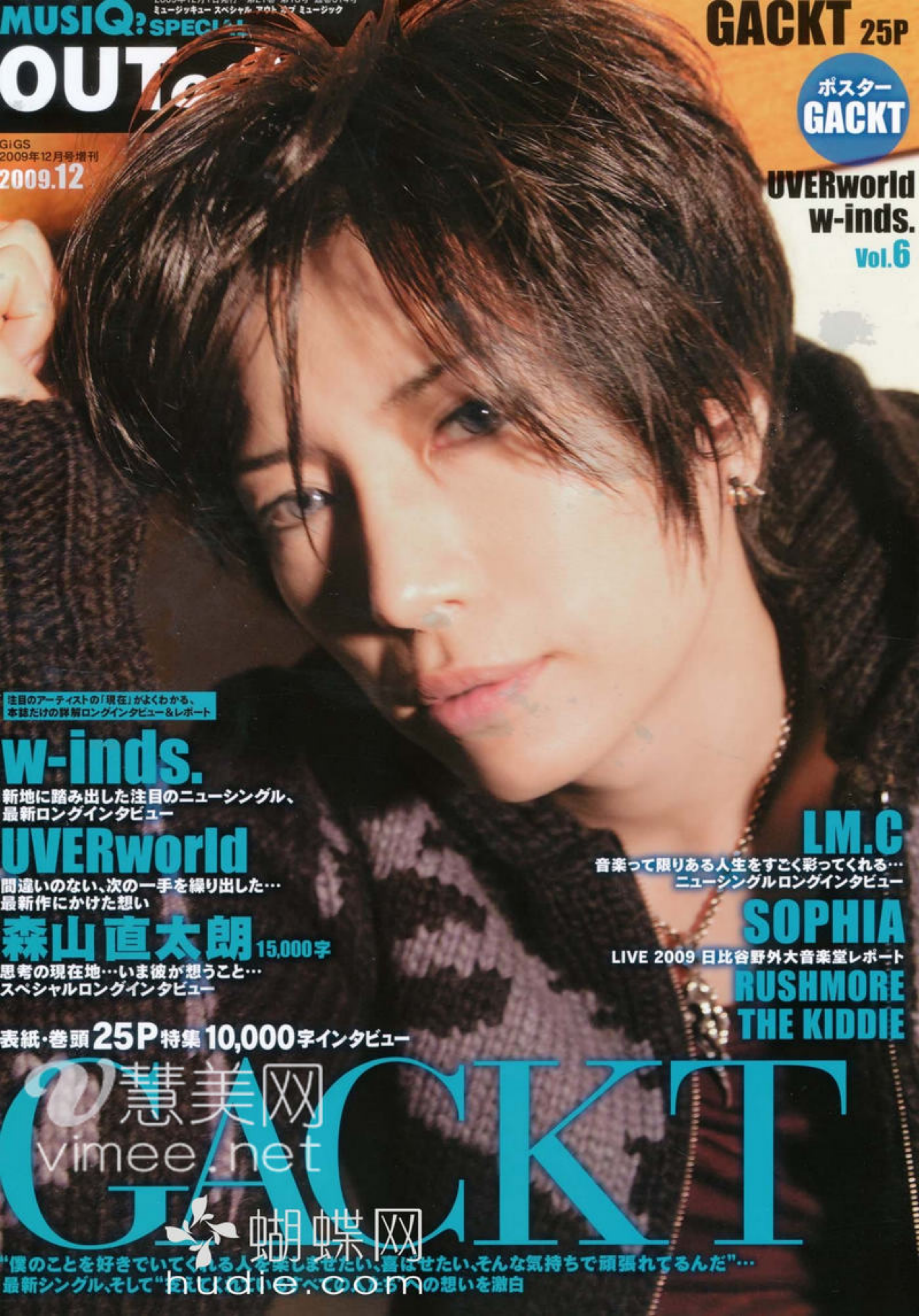
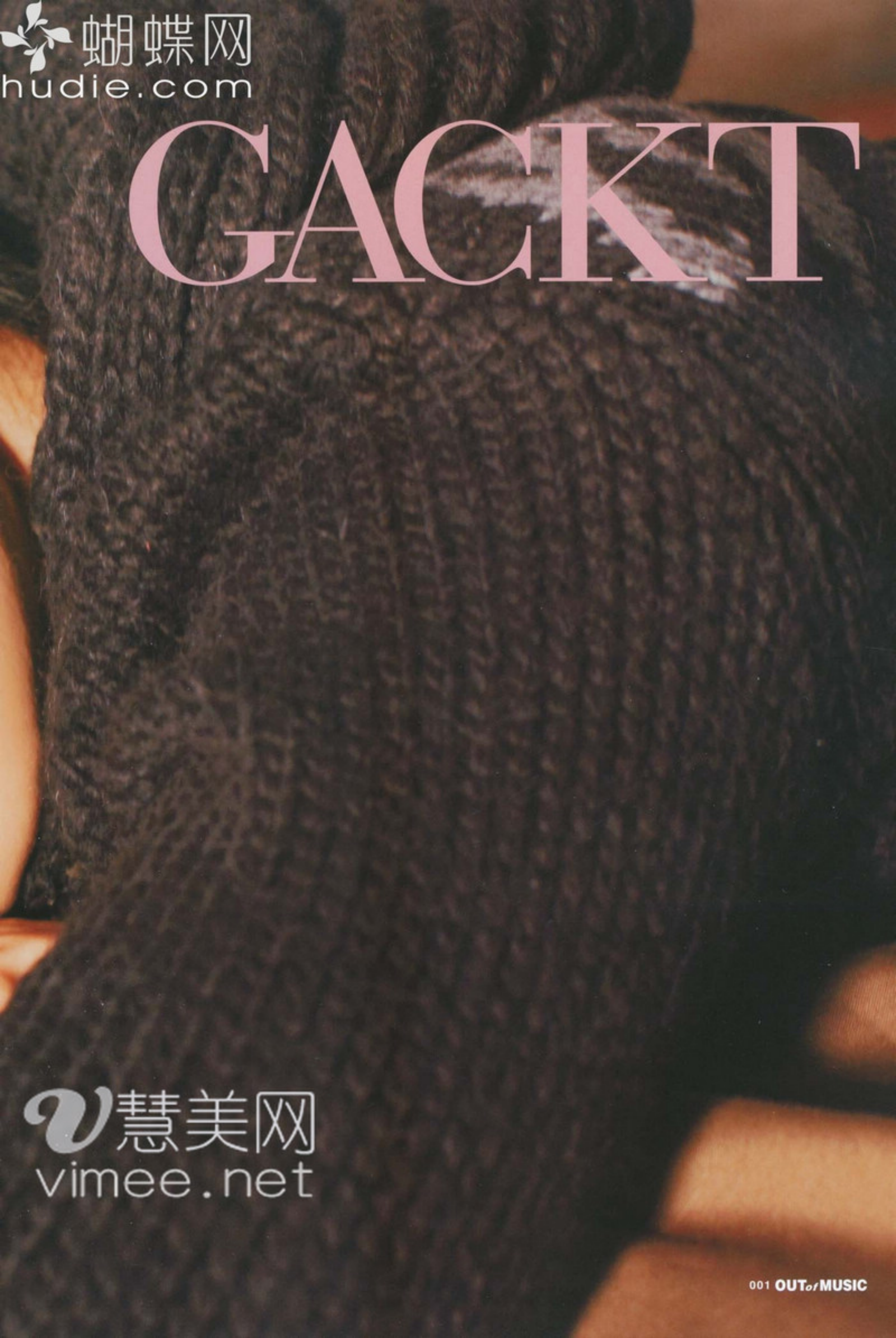

ミュージッキュー スペシャル アウト オブ ミュージック
MUSIQ? SPECIAL
OUT of
GiGS
2009年12月号増刊
2009.12
GACKT 25P
ポスター GACKT
UVERworld
w-inds.
Vol.6
注目のアーティストの「現在」がよくわかる、
本誌だけの詳解ロングインタビュー＆レポート
w-inds.
新地に踏み出した注目のニューシングル、
最新ロングインタビュー
UVERworld
間違いのない、次の一手を繰り出した…
最新作にかけた想い
森山直太朗 15,000字
思考の現在地…いま彼が想うこと…
スペシャルロングインタビュー
LM.C
音楽って限りある人生をすごく彩ってくれる…
ニューシングルロングインタビュー
SOPHIA
LIVE 2009 日比谷野外大音楽堂レポート
RUSHMORE
THE KIDDIE
表紙・巻頭25P特集 10,000字インタビュー
GACKT
“僕のことを好きでいてくれる人を楽しませたい、喜ばせたい、そんな気持ちで頑張れてるんだ”…
最新シングル、そして“ の想いを激白



GACKT







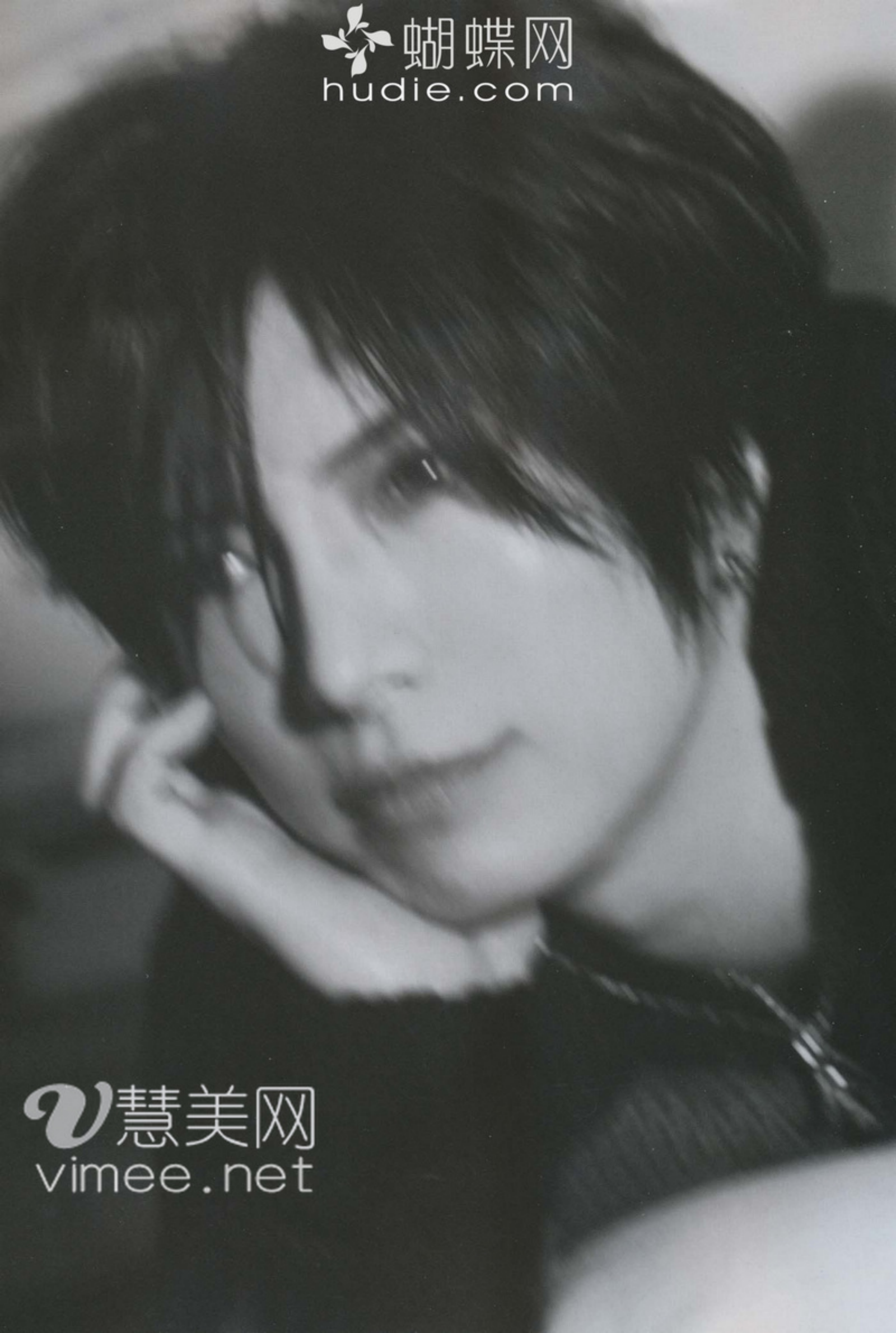
GACKT

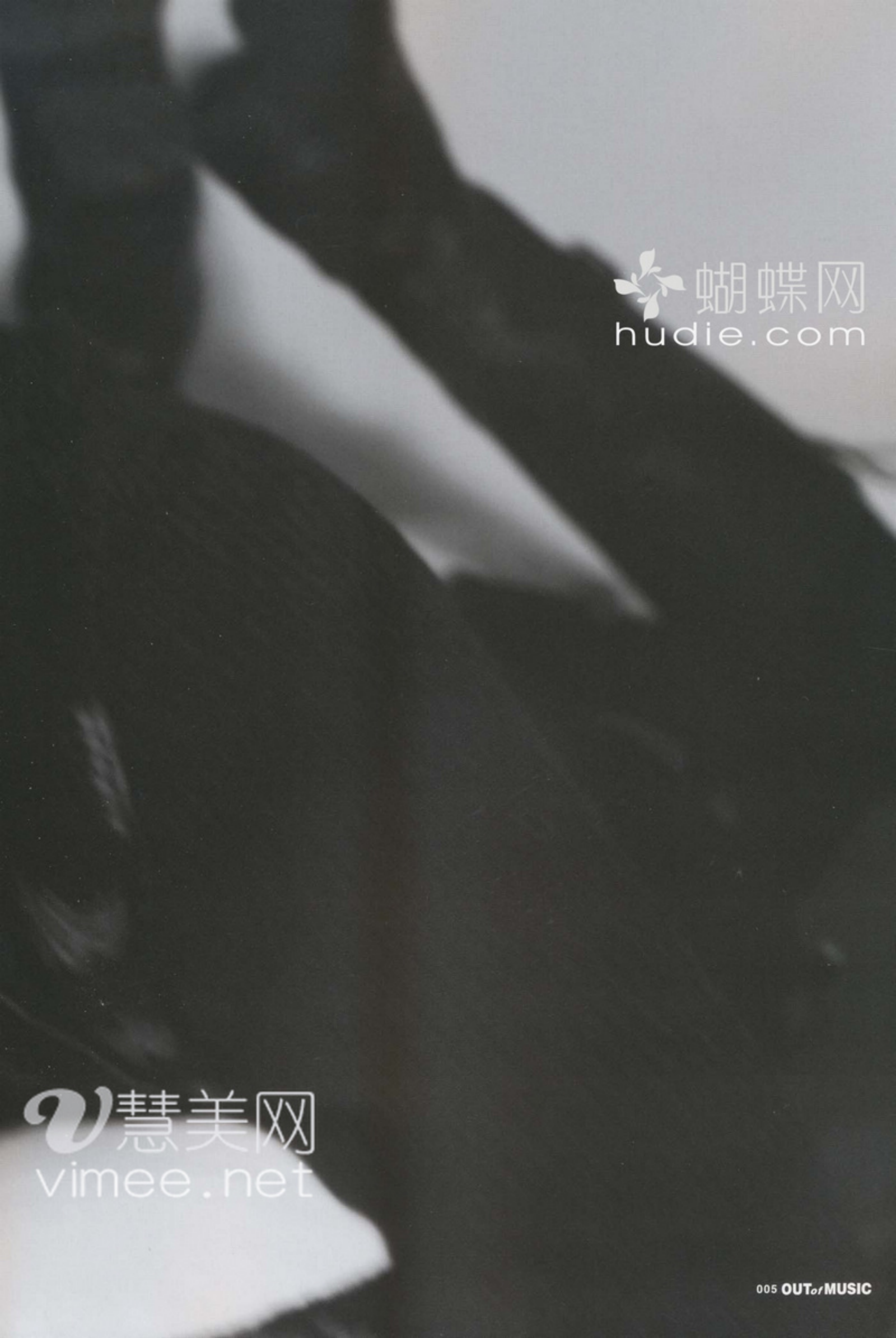
僕のことを好きでいてくれる人を楽しませたい、喜ばせたい、そんな気持ちで頑張れてるんだ

インタビュー＝武市尚子
写真＝田中和子(CAPS)
ヘア＆メイク＝小竹珠代(ビーグリー)
スタイリング＝石川大輝(イシカワヒロキ)

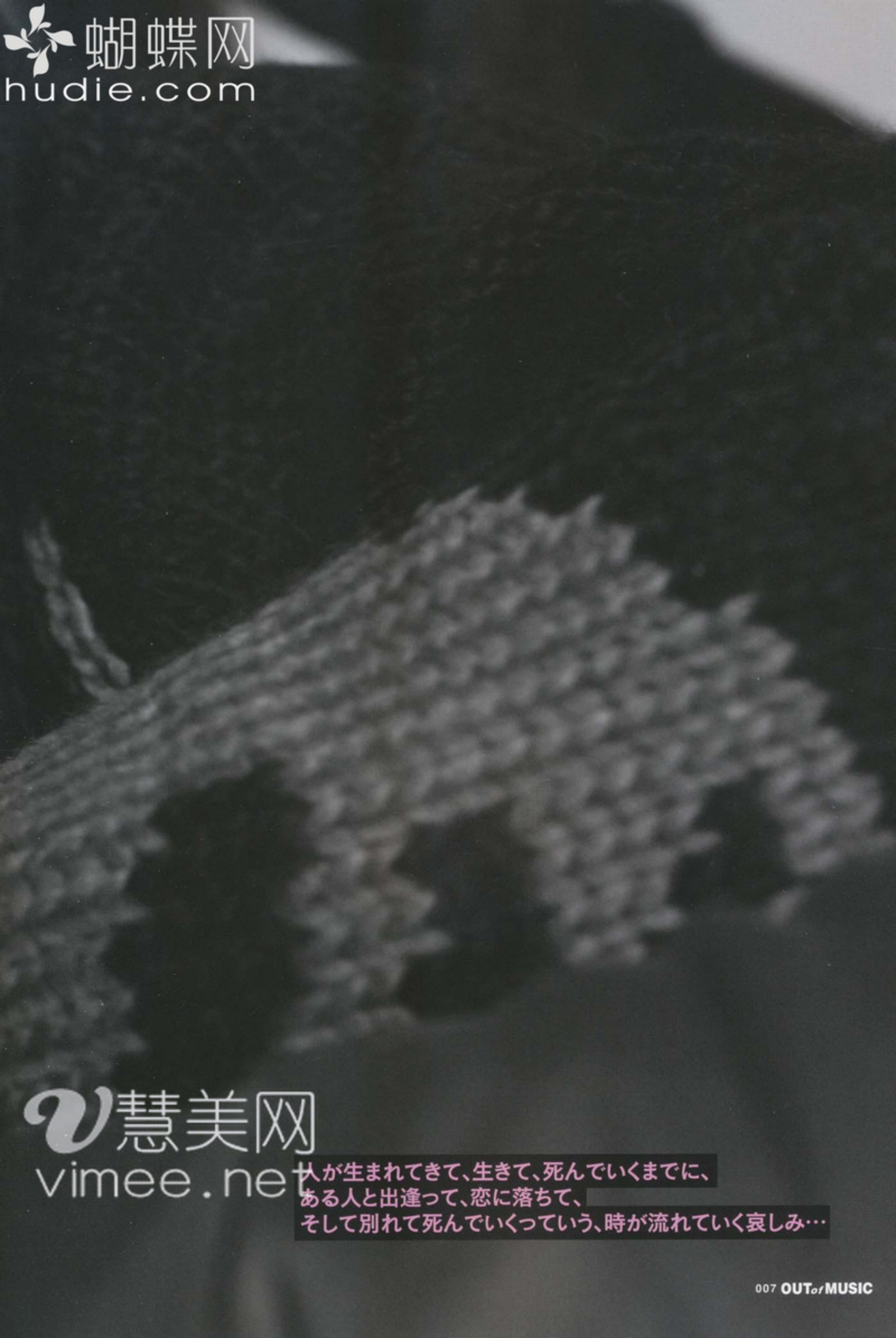
衣装協力＝「Harem Rounge」(ブラウンのレザーブルゾン／03-5414-8033／Draw design creations)、「RUPERT」(パープルカットソー、ブーツ／03-5469-6418・(株)P/X)、「A LITTLE VILLAGE.#1.」(パンツ、ベルト／03-3470-1936)、「AIZ」(ニットブルゾン／03-3449-3229)、「Dark side inhabitants」(アクセサリー一式／www.h-darts.com)

いつも思う…。GACKTと言う人は、何から出来ているのだろう？…と。
同じ人間とは思えないほどパワフルでストイック。
人間は、どうしたら、こうも200%の力で生き抜くことが出来るのだろう？ と、彼と会う度に思う。
もしかして、彼は未来と交信する特別な力を持っていて、彼だけに与えられたメ機械の体も的な、
超人的技能が備わっているんじゃないか？と、現実離れした妄想まで抱いてしまいそうになる。
しかし。実際に言葉を交わすと、とても熱く、誰よりもあたたかな血液が体の中をゆっくりと流れ、人を想う深い愛情が、
その体内に宿っていることを知る。今回は、12月9日にリリースされるニューシングル
「雪月花 –The end of silence–」と「斬～ZAN～」の2曲が出来上がっていった経緯と、そこに込めた想い、
そして、そこからの展開を中心に、彼の今（現在）の近況もふくめた、想いのすべてを語ってもらった…。









人が生まれてきて、生きて、死んでいくまでに、
ある人と出逢って、恋に落ちて、
そして別れて死んでいくっていう、時が流れていく哀しみ…





XGL



伝わるんだよね、人間、本当に一生懸命やればいつかは…僕はそう思ってる、
自分がそうやって生きていたら、
自然と周りにそういう人が集まってくるんだ







人は独りじゃ生きられない。
僕、GACK Tだってそうだよ。僕を支えてくれる人がいなければ、僕はここにいない。
みんながいてくれるからこそなんだ



運命的というか、つまりは、すべては繋がっているということ

――昨日ロス(Los Angels)から帰国されたばかりとか？

●うん。そう。向こうに居たのは3日かな。

――3日！？　ロスって3日とかで行くとこじゃないですよね。

●あははは。たしかに。僕だってそんなバタバタで行きたくはないよ(笑)。

――あ。ですよね(笑)。ロスへは何の目的で行かれてたんですか？

●まだ少し先の話なんだけど、いろいろと打ち合わせを兼ねてね。詳しいことはまだ話せないんだけど、そのうち話せると思うから待ってて(笑)。

――はい(笑)。そこに至るまでに、まだまだGACKTさんにはお聞きしたいことがたくさんあるので。

●いいよ、なんでも聞いて。

――まず、12月9日にリリースされるニューシングル「雪月花 ―The end of silence―」と「斬～ZAN～」の2曲について伺ってもいいですか？　この曲達は、『戦国無双3』(コーエーのWii用ゲームソフト)のTVCM及びゲーム内のエンディング曲にもなる訳ですが、これに基づいて書き下ろされた楽曲だったんですか？

●そう。でも、世界観は『戦国無双3』だけのものという訳ではないんだよね。GACKTとしての次のコンセプトが、もう僕の中では始まっているんだけど、その舞台が【日本】なんだ。そのコンセプト自体は、もう随分前から始まっていて。時期的には、NHKの大河ドラマ『風林火山』(2007年1月-12月放送)をやっていた頃から、動き出していたんだよ。それもあって、2008年のツアーを、【日本】をテーマにやろうと思っていたんだけど、ルーマニアでの映画の撮影があったりしたこともあって、そのコンセプト自体を一度止めて、『Requiem et Reminiscence Ⅱ～鎮魂と再生～』というツアーをやり始めたから、そこで、一度別のアルバムが挟み込まれているっていう感じになったんだ。もともと、僕はコンセプトを決めてコンサートをやるように決めているんだけど、ここ数年ずっと『MOON SAGA』っていう物語を中心に展開していたのを、2008年～2009年という流れで、『Requiem et Reminiscence Ⅱ～鎮魂と再生～』という物語を持ってきて、みんなが、こう来るんじゃないか！？と思っていたところとは違うモノをアプローチしたっていうことだったんだよね。だから、僕の中で【日本】をテーマにしたこのプロジェクトは、既に在ったモノであり、始まっていたモノだったんだ。それを、このタイミングでやることになったっていう。だから、今回のシングルの2曲だけではなく、そこに向けての曲を作り始めているっていうことなんだ。「雪月花 ―The end of silence―」と「斬～ZAN～」





も、そこでのメイン曲になっていくべき作品なんだよ。そこと、今回は『戦国無双3』の話が上手くハマったってこともあったんだ。

――なるほど。ゲームのプロデューサーの鯉沼久史さんも、『風林火山』の中で、上杉謙信を演じていたGACKTさんをご覧になられて感銘を受け、今回ぜひ一緒に、ということになったんですよね？　そう思うと、この曲達が、今、ここで世に出ることになった巡り逢わせにも、何か運命的なモノを感じますよね。

●そうだね。でも、むしろ、運命的というか、つまりは、すべては繋がっているということだよね。僕自身、大河をやったところからくみ上げて来てるものもあるし、プロデューサー的にもイメージが付きやすかったんだろうし。HIP HOPやR&Bをそこに当てはめるよりも、僕が作っている【ジパング・ロック】というモノの方がハマリがいいというか。僕の音楽スタイルって特殊で、普通のロックとは違って、日本っぽいモノからアジアっぽいモノが多い。ここ最近もずっとその方向でのアプローチをかけている中で依頼があった話（エンディング曲に起用したいという）でもあったから。お互いに求めていることと、やっていることが合致したっていう感じなんじゃないかな。

――そうですね。でも、【和】って、単純に和楽器の音が入れば、単純に和を感じさせることが出来るとは思うんですけど、そことロックとの融合って、簡単そうに見えて難しいところでもあるんじゃないですか？

●本当にそうなんだよ。みんな結構、和楽器を使えば【和】とロックが融合するって、安易に考え過ぎてるとこあるよね。ロックの上にそのまま和楽器のせてもまったく融合しない。むしろハマりがすごく悪いんだ。

――でも、GACKTさんの掲げる【ジパング・ロック】はすごくハマりがいい。「斬～ZAN～」の方はイントロの弦の強い音が、[illegible]音に聞こえてきて、ロックとの融合で素晴しい躍動感が生まれていたと感じたし、「雪月花―The end of silence―」の方は、肌で感じる哀愁が宿っていたし。

●うん。そのまま使っている訳じゃないからね。「斬～ZAN～」のイントロの弦の音は、三味線も使っているし、琴も使っている。あの弦の音は、爪で弦を思いっきりひっかいて音を出しているんだ。僕はね、ロックと和楽器を融合させるために、その二つの間に、もうひとつあるものを挟んでいるんだ。

――あるものを挟んでいる…？

●たとえば、サンドイッチでもそうでしょ。パンとハムだけじゃ挟まらないんだよ、滑っちゃって。ちゃんとそこに、もうひとつ、バターを塗る手間をかけてあげないとダメなんだ。僕の音楽の中にはそれが入っているんだよ。だから、ロックと和楽器が上手いバランスで融合するんだ。同じように和楽器を入れたからって、同じようにはならないんだよ。ギターの旋律を和楽器で弾いてみたところで、深みは出ない。外国人から見た日本みたいな、違和感のあるモノが出来てしまうと思う。本当に、真ん中に挟むモノが一番大切なんだ。楽器っていうのは、何を何と組み合わせて使っちゃいけないってルールはどこにもないんだ。だけど、和楽器なんか特にそうだけど、それぞれ楽器には歴史があるんだよね。だからこその音がそこにはある。その歴史が奏でる重みや、哀しみや深みってものがあるんだ。そこをちゃんと解って使ってやらないと、その深みは出て来ない。表現したい音を生み出すとき、そこには歴史や重みも加わっていくことだから。そこを安易にやってしまうと、逆にすごくカッコ悪いモノが出来上がってしまうんだよ。だから、そうならないために、多くの人はシンセサイザーを使うんだよね。シンセの音には歴史という重みは無いから。シンセの音は無色だからね、歴史がないから、どんな音にも染められるんだ。だから使いやすいんだよね。

――あぁ、たしかに、なるほど。すごく納得いく説明でした。じゃぁ、GACKTさんはまず、その楽器の歴史を学ぶところから始めるんです？

●うん。ただ僕は楽器が大好きだからね。わざわざ学ぶというよりは、好きで知ってしまうという感じかな。和楽器に限らずなんだけど。中国楽器やヨーロッパの方の古い楽器なんてそうだよね、そこの歴史が生み出す深みと哀しみの音がする。そこを無視して音楽を作ると、本当に心の無いモノになってしまうんだよね。「斬～ZAN～」には中国琵琶も入っているんだよ。でも、そこを琵琶には聞こえさせないようにいろんな楽器を重ねて使っているんだ。それに、僕はそこにボーダーはないと思っているからね。和だから、和楽器しか使わないっていう境界線を持っていないんだ。とにかく、こうした方がおもしろそうなんじゃないか？ってことは全部やってみたいんだよね。

――その上で、ものすごく細かく計算されているんですね。

●そうなんだよ。「斬～ZAN～」に関して言うとね、1番のAメロと2番のAメロは、同じように聞こえるけど、実は譜割りが全然違うんだよ。1番のAメロは7拍6拍、7拍8拍なんだけど、2番のAメロは、ずっと7拍で繰り返しているんだよ。もともと4分の4で作ってたんだけど、あまりにも単純だったりすると、そこから拍を削っていく作業をしていくんだ。それを7拍にしてみたり、7拍だけじゃ真単調に聞こえるっていうので、6拍を差し込んでみたり、8拍にしてみたりね、細かく細かく作り込んでいくんだよね。そこに歌詞をハメていって、さらに、そこからスピードを弄っていくっていう。和楽器を使った曲が、ずっと同じ拍で続いていくと、演歌とか民謡になってしまうんだよね。そこを上手くロックにしていくには、どうしたらいいかっていうことを考えていくんだ。

――なるほど。

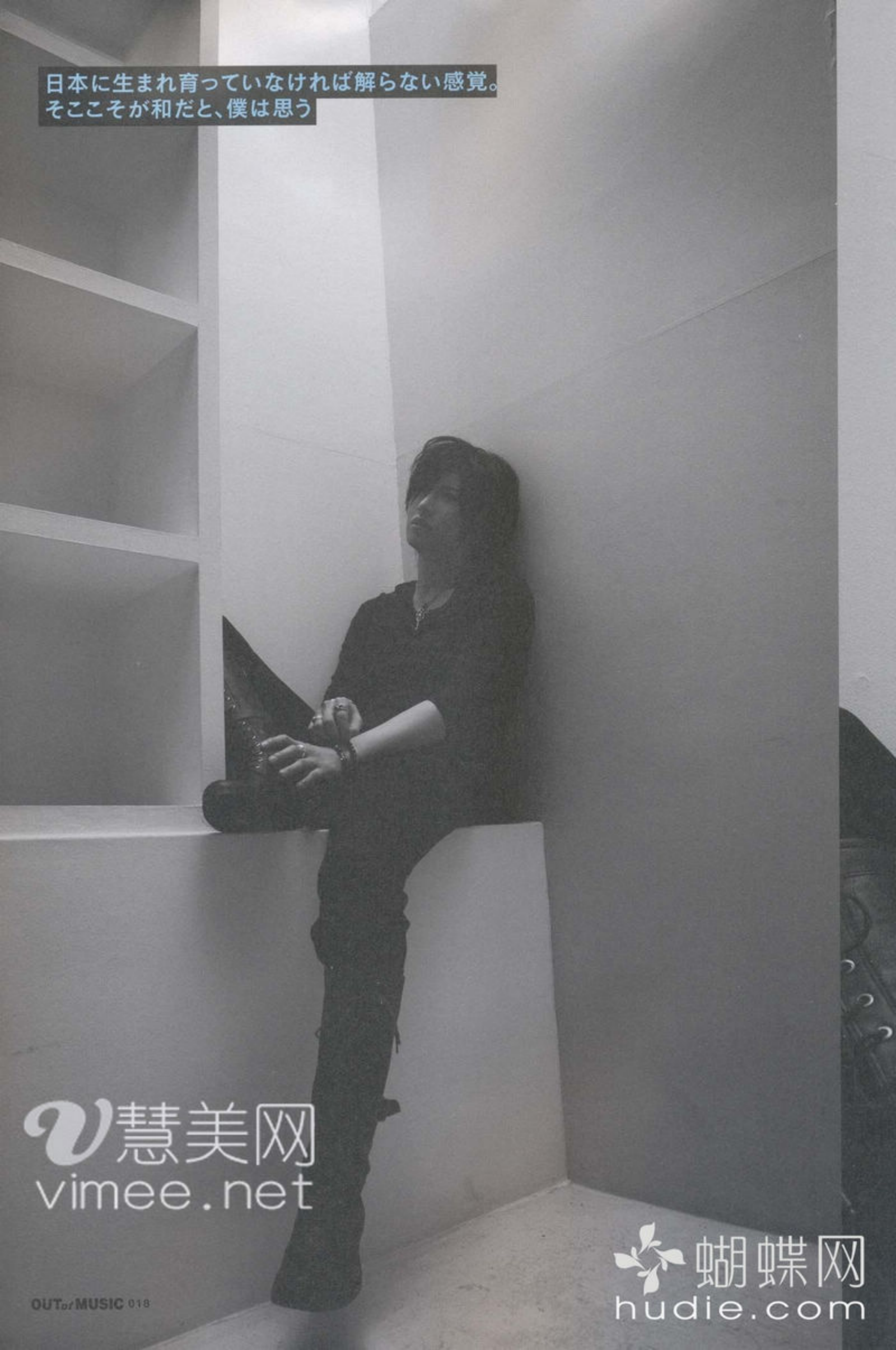
●ちょっとプログレッシブでもある。ちゃんと計算してハメていった拍の不安定さが、ロックとの融合になっていくんだよね。

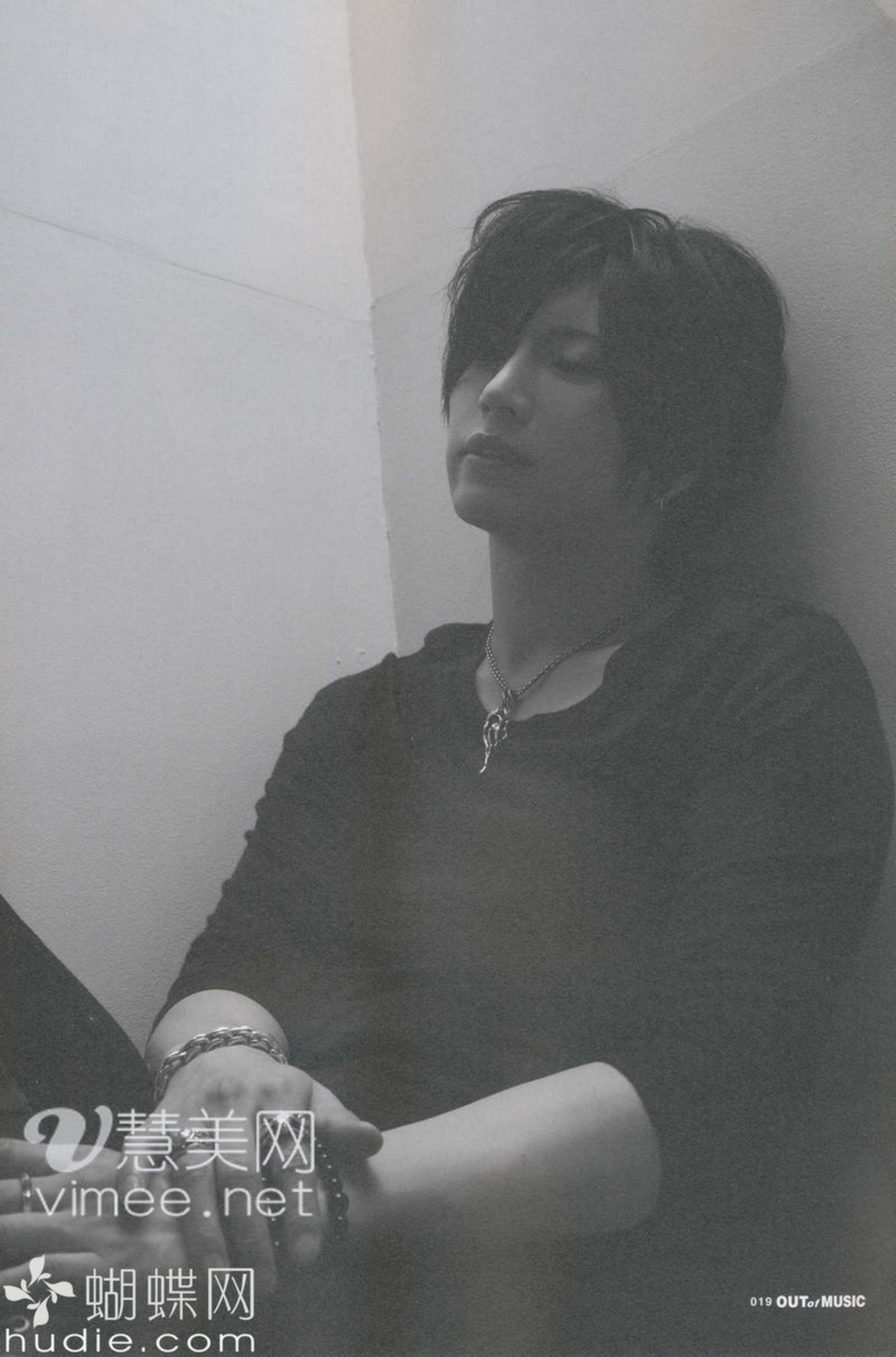
――音色だけではないと。

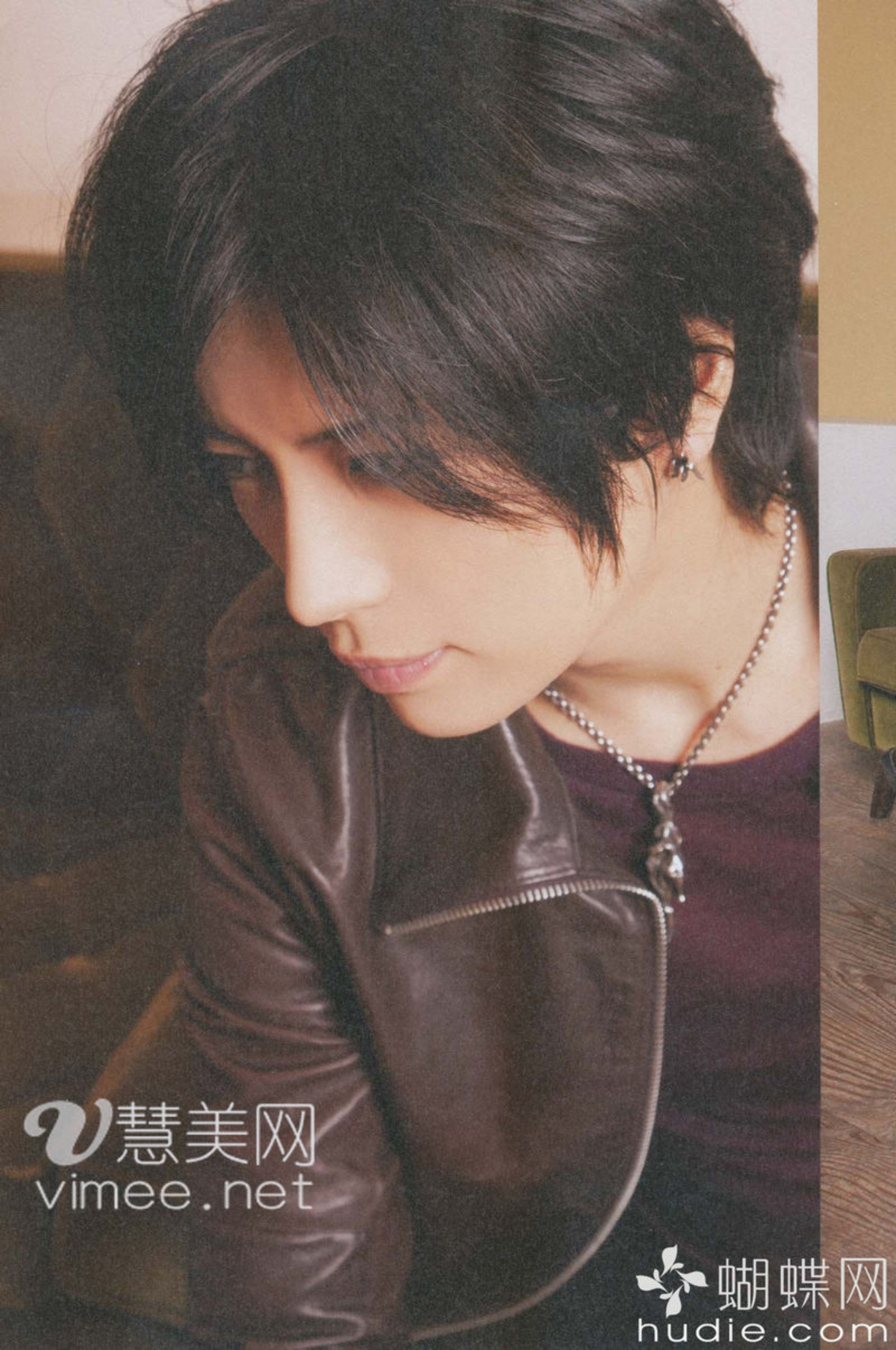
●うん、違う違う。音色だけじゃ表現しきれないところだからね。

（⇒P21へ続く）

日本に生まれ育っていなければ解らない感覚。
そここそが和だと、僕は思う







時の流れの切なさと儚さと、哀愁と優しさが混在している言葉なんだ

(⇒P17からの続き)

——「斬～ZAN～」と「雪月花ーThe end of silenceー」」は両曲ともに和を感じるけど、空気感がまったく違いますよね。「雪月花」は二胡の音がすごく印象的だと思いましたけど、まさか、二胡の音じゃなかったりします？

●もちろん、この曲には二胡も使ってるよ。でも、きっと印象的に感じてくれたのは、二胡じゃなく、ヴァイオリンの音だったと思うよ。

——え!? そうなんですか!? ヴァイオリンっていうと、すごく西洋のイメージが強いのに。不思議な音の厚みを生み出してますよね。

●うん、そうなんだよね。ヴァイオリンだけだと、今言ってもらったように、西洋の雰囲気が強過ぎるからね。二胡も同じ。単純な使い方じゃなく、混ぜて使う事でいろんな深みをそこに出せるんだ。でも、基本は和楽器を使っているんだよね、両曲とも。

——なるほど。

●「雪月花」って意味が複雑な言葉なんだけど、あえて言えば、風流っていう言葉にピッタリ当て



はまるかな。「雪月花」とは、人が生まれてきて、生きて、死んでいくまでに、ある人と出逢って、恋に落ちて、そして別れて死んでいくっていう、時が流れていく哀しみがあるんだよね。でも、そんな中で、美しいと感じる瞬間がたくさんあるんだよ。四季とかね。時の流れの切なさと儚さと、哀愁と優しさが混在している言葉なんだよ、「雪月花」って。雪が降った、積もった、そしてその雪が溶けた後に、そこに、まるで哀しみを癒すかのように桜が辺り一面を染めてくれる。白い哀しみをあたたかく柔らかな色が染めてくれる。それって、日本独特な美しさだと思う。それを音と歌で表現したかったんだ。この曲の時代背景というのは、鎌倉時代に入る前。その時代の物語が、まさに、僕が次にコンセプトとしようとしてる時代背景でもあるんだ。

――なるほど。「雪月花」って、英語でなんて言うんですかね？

●英語ではこの言葉のニュアンスまで伝えられる言葉は存在しないね。雪、月、花、をそれぞれ英語にしても意味はまったく通じないし。Three beautiful things、つまり、3つの美しいモノたちって言ったところで、何も伝わらないでしょ。さっきも言ったけど、日本には風流っていう言葉があって、その感覚こそが日本なんだってことだよね。秋のことをautumnともいうけど、fallとも言うでしょ。fallって、本当にすごく適してるというか、すごいと思うんだよね。同じアメリカでもfallって言う地域がある。何処の地域がこのfallって言葉を考えたんだろう？　って思うことがあるんだよね(笑)。ロスじゃないな、とかね(笑)。だから、アメリカにもきっとそういう【秋】を感じる地域があるんだろうね。ノースキャロライナとか、その地域はもっと季節を感じるというか、四季に近いモノがあるんだろうしね。その地方の人が、autumnをfallに変えたのかもしれないな、とかね。そんなことを考えてると楽しくなるんだ。

――たしかに。本当にそうかもしれないですね。季節ごとに似合う曲があって、聴きたい曲が変化するように、音や、そこに乗るために生み出される言葉って、ありますもんね。それって、それ以上は説明が出来ない、【感覚】だったりするんですよね。

●本当に音って不思議だと思うんだ。潜在意識の中に在るんじゃないか？　って思うほど、音を聞いて、想像する景色があったりするでしょ。その音を聞くとすごく緑が広がった草原を思ったり。そこにある背景色を呼び起こす力があるんだよね。もちろん、育ってくる段階で、テレビや実際の景色から受けて備わったモノもあるだろうしね。だからこそ、日本人にしか理解出来ない深みや哀しみっていうのもあるからね。そこが和っていうモノなんだと思うんだ。日本に生まれ育っていなければ解らない感覚。そここそが和だと、僕は思うんだよね。そここそが風流っていうんだと思う。

――たしかに、知らないことは感じることが出来ませんからね。ある沖縄のアーティストが、上京してきて、初めて秋という感覚を知ったって言ってて。沖縄には秋がないから、いつもこの時期に切なくなるこの感覚は何なんだろう？って、ずっと考えていて、それが1年経って、2回目に秋がやってきたときに、あ、これが秋っていう感覚なんだって知ったって言っていて、私びっくりしました。

●たしかに、そうだろうね(笑)。でも、本当にそうなんだよ。本土の秋はなんでこんなに切ないんだろう？　って思うほど切ない。沖縄にも秋はあるんだけど、こんなに切ない感覚じゃないんだよ。もっとあっさりしてる(笑)。短いしね。本土の秋は哀しみをおびてるんだけど、沖縄の秋は時間の経過が早いんだ。数週間しかないんだよ。気がついたら秋が終わってる。本土の秋って、徐々に秋になっていくでしょ。気がついたら切なくなってて、秋が始まってて、切なさを感じてると、そこから冬がやってきて、さらに切なくなっていくっていう(笑)。

――切なくなりっぱなしじゃないですか(笑)。

●そうなんだよ(笑)。秋から冬にかけては切なさが長いね(笑)。冬に向かって行くまでが長いんだよね。そこがすごく良かったりする。

――「雪月花ーThe end of silenceー」は、本当にGACKTさんの感性を感じた唄でした。曲も唄も。そして、声も。さっき、撮影中にアカペラで歌ってらっしゃいましたけど、圧倒されたんですよ、その声力に。この曲はもう、声自体に切なさがおびてますもんね。深い哀愁があるというか。「斬～ZAN～」はまた、楽曲同様にすごい力強さがあるというか、勇ましいですからね。でも、間奏の後にラップがくるじゃないですか。そこから一気に高くなって柔らかで美しい世界が広がる部分がありますよね。そこがまた実に素晴しい流れなんですけど、そこのラブの先にある歌声、私、確実に女性だと思いましたからね！

●あ、あれは僕のファルセットだよ(笑)。あそこもね、構成を考えていく上で、ギターソロ弾いた後、どうしようかな、って考えていて、後から構成を足していったんだ。音や拍を後から付け加えたり、引いたりして変えていくのと同じくね。そうしてるときに、ふと、あ、ここにラップみたいな語り部が入ったら面白いなと思って加えたんだ。それで、『万葉集』を読み返して、風流に合う部分っていうのをピックアップして歌詞を作ったの。その後に、あ、この先にファルセットみたいな唄が入ったら、すごく綺麗だろうなと思ってね、入れてみたんだよ。

――すごく綺麗でした。

●でしょ。でも、たしかに、あの声は僕だとは思わないかもね(笑)。ああいうファルセットって昔っからやってんだけどね、どうも、みんな僕が歌ってるとは思ってないみたいで(笑)。だから実際にひとりでこの曲を唄おうと思うと、2オクターブくらいの音域が必要なんだよね(笑)。

――普通の人じゃ唄えませんから……。でも、さっき、撮影中に「雪月花ーThe end of silenceー」を唄ってらしたとき、近くに居た編集長に、これ、唄える？って、意地悪言ってましたよね(笑)。唄える訳がない。しかも本人目の前に。

●あはははは。いやいや、でもね、「雪月花ーThe end of silenceー」の方が唄いやすいんだよ。「斬～ZAN～」はね、ないな(笑)。カラオケで挑戦してみてほしいけど、難しいと思うよ、本当に。リズムは難しい、音域は広い、アップダウンは激しい、ってとにかく難しいと思う(笑)。でも、ぜひ挑戦してほしいね。

――本当にさっきして頂いた拍の話もそうですけど、間奏の途中で一瞬クリーンなギターが差し込まれるところのとか、あの一瞬がなんとも言えず活きていて、本当にカッコイイなって思ったんですよね。本当に一瞬の隙間も与えないっていう。

●うん。なんか、もう作り方がロックの作り方じゃないんだよね。オーケストラの作り方なんだよ。だから、譜割りを考えて作っていくんだけど、ロックだとベーシストはベースのフレーズだけを見て作るけど、オーケストラはそうじゃない。例えば、ファルセットの部分とか、ベースが高音で副音をなぞっているんだよ。主音をボーカルが唄って、ベースが副音を弾いているんだ。チェロがいきなり主旋に絡んでくるみたいなね。

――はいはい！　ファルセットのDメロ部分は本当に綺麗でしたからね。お話聴いたら、もういっかい後で聞き直してみようって思いました。緻密な計算がなされていますね。

●(笑)。

――早くライヴで聴いてみたいです。圧倒されるんだろうなぁ。

(⇒P49へ続く)

ライヴを見てない人には、“参加したかった！”って悔しがってほしいし、
ライヴを観に来てくれた人にも、
“もういっかい参加したい！”って悔しがってほしいんだ。



OUT of MUSIC

CONTENTS

特別付録GACKTポスター

P01 P49 **GACKT**
僕のことを好きでいてくれる人を楽しませたい、
喜ばせたい、そんな気持ちで頑張れてるんだ

P25 P52 **UVERworld**
間違いのない、次の一手を繰り出した…

P32 P54 **森山直太朗**
嘘をつくんだったら、歌うっていうことを手放さなきゃいけない
舞台の上に立ったときに、それが出てしまうから…

P37 P57 **LM.C**
限りある人生を彩ってくれるBGMになったり、
ことばにできないモヤモヤを代弁してくれたりしますよね

P42 P60 **RUSHMORE**
80年代の音楽的なエッセンスを詰め込みたいと思っていた
とても覚えやすいメロディを機軸に据え…
歌詞に関しては、わかりやすさを心がけています

P46 P63 **THE KIDDIE**
ファンの存在って偉大だなと…
聴いてくれる人たちがいるからこそ、
自分たちのやりたいこと、そしてやるべきことも
明確になってくる

P81 **SOPHIA**
LIVE 2009 0919 日比谷野外大音楽堂

P91 **w-inds.**
ダンスナンバーを軸に楽曲選びをしてきたのですが、
ようやくそれが実を結びつつある実感があります

P66 Impression & Review
P68 田中純弥の「あのコラム」
P70 エネルギーカウンセラーの佐藤界飛の「[illegible]ーダ音を求めて」
P72 作詩家・葉山愛次 連載詩篇
P74 連載:松下萌子
P75 連載:和希沙也「ちかごろ音ごころ」
P76 バックナンバーのお知らせ
P80 読者のみなさんからのお便り

発行日 平成21年12月1日発行

編集長 吉田 直樹

アートディレクター 藤井陽一郎(Bakery37.1)
デザイン 吉川真希(Bakery37.1)
池内仁美(Bakery37.1)

印 刷 新家義晴(大日本印刷株式会社)
谷口尚代(大日本印刷株式会社)

発 売 株式会社 シンコーミュージック・エンタテイメント
東京都千代田区神田小川町2-1
TEL:03-3295-4191

発 行 株式会 アウト・オブ・ミュージック
東京都港区芝大門 2-3-7 Do芝大門ビル3F

協 力 株式会社 プロスパーネット
株式会社 プロフェッショナルズ
有限会社 フラッシュワン

税込価格 880円

ホームページ http://www.musiq.jp
Eメール info@musiq.jp

OUT of MUSIC

PRESENT

プレゼント

01 ×2名様 Gackt
「サイン入り誌面使用カット サービスサイズプリント」





02 ×5名様 w-inds.
「オリジナルグッズ」



03 ×3名様 LM.C
「サイン入りポスター」

プレゼントの応募方法

以上のプレゼントをご希望の方は、
●80ページ「読者ハガキ」コーナーにある応募券を切り取ってハガキ貼って、
●以下項目について御記入のうえ
(1) 希望プレゼントNo.
(2) 住所・氏名・年令・職業・メールアドレス・ブログURL
(3) 本誌の感想
(4) 今号でよかった写真、よかった記事
(5) よく見るテレビ番組
(6) よく買う雑誌

〒105-0012
東京都港区芝大門2-3-7 Do芝大門ビル302
株式会社アウト・オブ・ミュージック
「プレゼント」係

今月号に付いている応募券(読者ハガキページ)のみ有効となりますのでご注意ください。応募〆切は2010年2月28日当日消印有効です。当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。(当選品について、ネットオークションなどへの出典が発覚した場合には、責任をもって買い戻していただきますので、ご留意ください。)

UVERworld

間違いのない、次の一手を繰り出した…

インタビュー＝長澤智典

通算14枚目となるUVERworldのシングル『哀しみはきっと』。
この楽曲は、TBS系ドラマ「小公女セイラ」の主題歌として起用中。
2曲目には、メンバー全員のコーラスを味わえる『撃破』。
3曲目には、4thアルバム『AwakEVE』へ収めていた『美影意志-single ver.-』を収録。
今回は、初回生産盤へ封入したDVDにも強い意志を詰め込んでいる。
そんな新作についての想いを、メンバー5人に聞いた。



——ドラマ「小公女セイラ」の主題歌でもある最新シングル『哀しみはきっと』が完成しました。

TAKUYA∞●この曲はですね、ドラマの制作陣のほうから、「この物語のために楽曲を書き下ろしてもらえないかか？」とオファーをいただきました。まずはドラマの台本をいただき、僕や彰、克哉が6曲ほどドラマの世界観をイメージし、デモ音源を制作して、その中から結果的に「一番、物語のイメージに重なり合う」との想いから、『哀しみはきっと』を選びました。

——ドラマとのリンクは、深く考えていかれたそうですね。

TAKUYA∞●もちろん僕たちは、ドラマの放送が終わって以降も10年20年と楽曲を唄い続けていくつもりですし、普遍性を持った"自分たちらしい色"を、毎回楽曲へ注入していくわけですけど。でも同時に、「小公女セイラ」を観ている人たちが、ドラマを通して僕らの楽曲が流れてきたときに、その歌が輝きを増して胸に響いてきたら…それは、とても嬉しいことじゃないですか。だからこそ、自分たちが根底に持っている想いや音楽性をぶれない軸として据えて、そのうえで番組との相乗効果として、パワーや広がりを持つ楽曲を制作しました。事実、今回もドラマの世界観からインスパイアを受け、新しい表現の扉を開けた面もありましたし。タイアップに関しては、バンドへプラスの刺激を与えていくものとして僕らは何時も捉え、制作へ望んでいます。

彰●制作サイドからも「UVERworldの音楽自体が僕らは好きなので、いつものUVERworldらし

UVERworld

さで制作してください」と言われてたこともあったし、その辺でも精神面では楽だったね。

――「小公女セイラ」の主人公は、14歳の女の子。年齢面でリアルに感情を重ねるのは、難しくなかったですか？

TAKUYA∞●「主人公の女の子の目線」へ寄り添えるなら、それが一番理想的なことだとは思います。事実、僕自身「彼女の想いとの共通性や共感する意識」を見い出そうと思いながら、いただいた台本を読んでいました。この物語は、すごく裕福な生活をしていた女の子が、ある事件をきっかけに、金品など目に見えるものはもちろん。父親さえも亡くし、"幸せな生活"一切を奪われてしまうんです。それでも彼女の心の中からは、「幸せだった頃の想い出」や「どん底の中からでさえも、明日の幸せに向かってがんばろう」と思う前向きな気持ちだけは奪えなかった。僕は、彼女の「逆境を乗り越えようとする姿勢」にすごく共感できたし、その生き方へ素晴らしさを感じていた。そこをきっかけに、『哀しみはきっと』の歌詞が生まれました。

――この歌へ登場する主人公は、逆境の中に居てさえも絶対に希望は失わない。むしろ、絶望の淵に追い込まれながら、あえてどん底な状況の前へと立ち、そのマイナス面すべてを受け止めたうえで、そっくりそのまま未来へ進む糧にしていく。その強さに、心打たれました。

TAKUYA∞●たとえばの例ですが。30人の生徒がいるクラスがあったら、当然椅子だって30席あるわけじゃないですか。もし、その席を自由に選べるとした場合、普通はみんな先生が目の前にいる、一番前の真ん中の席って避けたがりますよね。でも、絶対に誰かがその席へ座らなき



TAKUYA∞ (Vocal、Programing)



克哉(Guitar)





誰かがその運命を背負わなきゃいけないのなら、その運命から逃げたり避けるような生き方だけはしたくない



ゃいけない。ドラマの主人公も、そして僕自身も、「誰かがその運命を背負わなきゃいけないのなら、その運命から逃げたり避けるような生き方だけはしたくない。誰かに押しつけるくらいなら、自分でそれを背負いながら、その中へ楽しみを見い出していきたい」と思う性格なんです。物語に出てくる女の子は、「今、目の前に降りかかった哀しみ。それだって、自分がこういう目に合わなかったら、他の誰かが同じような目にあっていたかも知れない。その哀しみが自分の前にあるのなら、わたしはけっして逃げるような生き方はしない。むしろ、それを進んで引き受け、立ち向かってゆく」という姿を見せていくんです。僕も彼女も、「自分で選択した生き方に対し、つねに前向きに生きる努力をしていく」よう、その共通した想いから、『哀しみはきっと』の詞を綴っていきました。

――そこまで深く、物語と自分の感情を重ね合わせているからこそ、あの心揺さぶる想いが生まれたんですね。

TAKUYA∞●そんな、ただただ台本の言葉へメロディーを載せるだけなら、俺らが演る必要性なんて、まったく無いわけで…。やはり、「俺らの意識はどうなんだ?!」という気持ちが大切なことですから。

――曲調面では、歌心を活かした。シンプルな歌の世界が、やがて大きな広がりを持っていく。そんな、ドラマチックな展開施してゆく楽曲になりました。

克哉●結果、TAKUYA∞の楽曲が選ばれたとはいえ、僕も彰も、みんな「この歌は"激しい曲調"ではないな」と、台本を読み実感していたし。それぞれがミドル、バラード系の楽曲を作っていったよう、想いの共有は、最初から自然と出来ていました。

信人●この『哀しみはきっと』は、徐々に徐々に盛り上がりを描きながら、大きくドラマが広がってゆく曲調です。「次第に大きなドラマを描いてく」というのは、UVERworldとしても好んでるスタイルです。とはいえ、「シンプルかつ芯を持ったメロディを、いかに活かすか」を考えながら曲制作しました。またUVERworldの中の振り幅を一つ広げる作品になったと重います。

真太郎●楽曲制作を行っている頃から、「これは雄大な楽曲になるだろうな」という手応えを







彰 (Guitar)



信人 (Bass)





感じながら録っていたんですけど。完成した楽曲は、想像以上に、シンプルさを抱きながらもスケール感を持った楽曲として出来上がりましたからね。

——『哀しみはきっと』は、絶望の中に居てさえも、主人公はつねに光を見据えてるわけですが。そのテーマ性って、TAKUYA∞さんにとっても大きいものですよね。

TAKUYA∞●つねにそれを意識してるか？と言われたら、どう答えて良いのかは難しいんですけど。僕らが「音楽を通し何を伝えたいのか？」と訊かれたら、それが悲しい物語だったとしても、「最後は光を与えていきたい」というその意識を、つねに根底へ持っているのは確かです。もしかしたら今後、悲しいまま終わってしまう歌だって作るかも知れない。でも今は、「夢や希望をいつも胸に抱いてたいな」と思っています。

——完成した『哀しみはきっと』に対し、今はどんな手応えを覚えていますか？

TAKUYA∞●確実に振り幅を広げた作品になりました。『哀しみはきっと』がUVERworldのデビュー曲になっていたら、「この想いを提示して良いのか」、僕らは不安になっていたと思うんですよ。でも僕らは、過去に積み重ねてきた作品たちを通し、しっかり自分たちのスタイルを提示し続けてこれた。だからこそ、「今の自分たちはここまで手を伸ばせるんだ」という、"らしさ"も踏まえつつ"次の一手"を打つことが出来たんです。この『哀しみはきっと』を通し、初めてUVERworldに触れる人にとっては、もちろん、過去の作品をすべて聴いてる人たちにとっても、「新しい感覚」を抱ける。俺たちにとって、"間違いのない次の一手を繰り出した"楽曲になりました。

(⇒P52へ続く)



真太郎(Drum)



森山直太朗

嘘をつくんだったら、歌うっていうことを手放さなきゃいけない 舞台の上に立ったときに、それが出てしまうから…

インタビュー＝桂泉晴名

2009年10月21日にニューシングル『涙』をリリースした森山直太朗。
『涙』はすでに今年の全国ツアーでお披露目されていて、ライヴの中で日々成長し続けている。
心が震えるような歌声はますます豊かさを増しているのが分かる一方で、このシングルを聴き込めば聴き込むほど、
自分が意識をしていなかった心の深部まで彼の声が入り込んで、曲と溶け合うような不思議な感覚に陥る。
今、森山直太朗がどのような思いで音楽と向き合っているのか。現在の心境を語ってもらった。

写真は10月16日NHKホールでのライヴで撮影された写真です

――全国ツアーがありましたが、季節の変わり目でもあるし、体調管理などはいかがですか？

●気が抜けて風邪をひいちゃったりしないよう気をつけています。

――今回は、全部で52公演ですよね。

●そうです。結果的にですけど、全都道府県を回るのが、このツアーの一つのテーマになっていて。

――こういう機会がないと、なかなか日本全国を回ることは……。

●ないですよね。基本的に出不精で(笑)。家でぼんやりしているタイプの人間だから。

――(笑)。

●だからこういうことでもないと、本当に全国回っていなかっただろうな、って。たまに感じながら旅しています。(ちらっと手元を見る)

――どうしました？

●(左手の人差し指の第二関節あたりを触る)。

――え？　蚊に刺されちゃいましたか？

●さっき、外に出たときに、刺されちゃいました(笑)…ここは絶対刺しちゃだめでしょ。ここは絶対にダメなんですよ、刺しちゃ。他のところならまだ許せるんですけど…。

――最も痒くなるところですよね。

●そうなんですよね。だからすみません。気持ちがそっちにいっちゃって。

――さされやすいタイプなんですか？

●どうですかね～？…でも、今、マネージャーが半そでで、何もさされてなかったんです。僕、長袖着ていて2箇所さされたんで(笑)。

――血液型とか、関係あるんでしょうかね？

●いや、結構ちっちゃいこと気にする人間がさされるんじゃないかな(笑)。ちっちゃい言葉っかり気にしていると、蚊にさされちゃう、って俺は思っています(笑)。(かゆみ止めが渡される)うわー、すみませんねえ……。これで集中できるわ。トークに。

――よかったです(笑)。それではかゆみも止まったところで、インタビューの方に入らせていただきますね。新曲『涙』がリリースされますが、この曲はいつごろできた曲でしょうか？

●おぼろげなデッサンみたいな形では作ってはいたんですけど。このツアーのリハが4月の初旬から始まって、できたのはそのころですね。通常は、アルバムのリリースをしてツアーっていうのがセオリーですけど、今回はできるだけ、新しい曲をライヴで育てていきたかったんです。昔、音楽を始めたころは、ライヴハウスで歌ったり、公園で弾き語りをしたりする中で理解を深めて、曲の可能性を客観的に自分で感じていった。でも、その過程がいつからか、リリースがあってそれを届けていくっていう、逆のサイクルになってしまって。今回は外の空気にちゃんと触れて、お客さんとも曲の認識を深め合ってからリリースする方が、きっと曲にとってもよいだろうし、自分のスタンスに合っているな、と思ったんです。それと同時に、今までの曲も、もっとその曲の風景や曲の中にある宇宙を、どこまで表現で高められるか、というのをやりたかった。表現っていうのは、完成は絶対ないですからね。だから"歌いたい曲を歌う"っていう、ライヴとして当たり前の形に基づいてやれているのが、今回のツアーの特徴です。

――去年の『諸君！？』はアルバムという「核」があってのツアーでしたけど、今年のツアーはどういった形で臨んでいるのかと思っていました。

●今までの曲で、表現しきれていないものもたくさんあるし。テーマと自分の中のイメージとの差っていうのは、常にあるものなので。やっぱりライヴって、そのときの自分の状態が現れるし、嘘がつけない場所だから。今回も物理的に回数を重ねることで、旧曲も新しい曲も含めて、より曲の核心に迫るという、本質をたぐり寄せていくようなことができると思うんです。

――実は、ツアータイトルの『どこまで細部になれるだろう』という言葉が印象に残ったのですが、今の思いとリンクしてツアータイトルになったのでしょうか？

●そうといえばそうだし、まったく関係ないといえば関係ないんですけど。逆に、どう感じます？

――"細部にこだわる"というのはよく言いますけど、"なれる"、っていうのは自発的な言葉ですよね。だから、すごく意図的なものを感じたのが正直なところです。

●もともと、今回演出している御徒町凧の『縦書きの詩』の断片がタイトルなんです。言葉のすわりと響きが自分の中で一番ピンときたのがこれだったとしか言えないんですけど。あとは、いかようにでも取れる言葉だし、なんとかなるかな、って。でも、おもしろいことに、そのときそのとき一所懸命やっていれば、なぜその言葉だったのかっていう答えが出てくるんですよ。だから、自分たちもやりながら、その意味を探ったり発見をしたりしながら、今もツアーを続けています。

――なるほど。

●これは余談なんですけど、よく御徒町くんと"細部にこそ、魂が宿る"という話をするんです。断片だけでものは語れないけど、でもその断片にこそ実はすべてが現れているっていう。だからこそ、ひとつひとつ、毎日の歌うことのモチベーションとか緊張感っていうのが、積み重ねになると思う。たとえば、こうやってお話することとかね。……やっぱり、インタビューでお話することは、難しいんです。でも、お話するんだから、やっぱり楽しくありたいというか、本質的でありたいと思うじゃないですか。でも、それって急にやれ、って言われてできることではないし。だから、結果っていうものはすごく大事だけれど、そのプロセスだったり、今、この言葉と言葉の間にあるものだったりに、すべてが宿るっていう。そういう認識でこの"細部にこそ、魂が宿る"という言葉を捉えたりしてもいるんです。

――実は、私もなぜこの言葉にひっかかったかというと、"細部にこそ真実がある"という言葉を、仕事で悩んでいるときに先輩に言われたことがあって。今、森山さんが"細部にこそ、魂がある"というお話をされたときに、すごくリンクしているような気がしたんです。今って、全体を捉えようという風潮がありますよね。もちろん全体を捉えることは大事だと思うし、こういう世の中だからこそ俯瞰的に見なくては、と思うんですけど。逆にすべてがそうなっていると、ひとつひとつ存在しているものに対して、同じ体温で関わっていく、熱さがなくなっている感じもしていて。森山さんがそこに重きを置かれているというのは、何かつながっているようで驚きました。

●そうなんですよ。たぶんいろいろ失敗をしてきたから、そういうふうに思うのかもしれない。それは人間関係でも、恋愛でも、仕事もそうだし。たとえば、ワーって笑ったんだけれども、その後に、ふと相手が寂しい表情をしている、とか。笑っているんだけど、心の底から笑っていない、みたいな。そういう些細な、小さな瞬間に、実は本質がある。みんな根底にある無意識っていうものに本当は気づいているのに、そこを素通りしていく都合のいい部分ってあると思うんですよ。でもそういうしわよせって、必ず自分だったり未来だったりに、間違いなく寄せて返してくる。だから"全体も真(まこと)"なんだけれども、"また細部も真なり"だと。結局すべてつながっているから。だから『どこまで細部になれるだろう』って、"いつもアンテナを立てて、思考し続けながら生きていこう"ということの裏返しだと思うんです。別に"細かいことを考えよう"ということではなくて、"自分らしくあろう"ということだと。

――確かにしわよせが来そうだなとは、思います。毎日のひとつひとつないがしろにしていると、全部自分にかえってくるな、という危機感はありますね。

●でも、別にかえってくることが決して悪いことじゃないと思う。大切なのは、返ってきたことを気づけるかということで。だって無理ですもん。人とのいろいろな関係の中で、100パーセント自分を貫いたりすることは。

――それはどうやっても無理ですね。

●でも、ものづくりや表現は、今、嘘をついたら、



もう終わりなんですよ。嘘をつ[illegible]んだったら[illegible]うっていうことを手放さなきゃいけない、なぜかというと、舞台の上に立ったときに、それが出てしまうからなんです。とはいっても、知らない間に自分で自分をかくまってしまったり、取り繕ってしまったりすることは、これは人の習慣なのか、どこかであったりする。でも、今から先の時間は、できるだけそういうものを軽減していきたい。なくすことはできないかもしれないけど、できるだけ軽減していって。"正直である"っていうことよりも、できるだけ嘘を排除していきたいんです。それはきっと誰かを裏切らないっていう、それだけのことなんですけれども。

――『涙』という曲についても、そういう気持ちで…。

●『どこまで細部になれるだろう』という言葉とか『涙』っていう曲の持っている本質は、すごく感覚的なものではあります。人と人との出会いのように"あ、自分にとって必要なのかもしれない"っていうような気づきで、曲とか言葉選びはしています。

――曲をつくるときは、そんなにつめてつめて考えているわけではないのでしょうか?

●なぜその曲を自分が選んだのか、とか、その言葉になったんだろう、とかは、いつも後から考えます。それで"どうやらそういうことらしい"って感じる。人との出会いっていうのも、その意味について出会ったときは考えないですよね。お互いの言動とコミュニケーションを繰り返すうちに、"あれ?"とひっかかったりして。"たぶん自分にないものを持っているからだな"とか、"似たもの同士だからかな"とか、"あ、前世で会っているのかな"とか(笑)。後からわかることがたくさんありますよね。それは曲作りも出会いも同じだと思います。

――人との出会いは計算できないですよね。

●できないですね。でも"類は友を呼ぶ"じゃないけれど、望んだものは必ずやってくるのだとしたら、生きている周期の中で、よい「引き」もあれば、同じだけ悪い「引き」もある。だから、いい時期にしても悪い時期にしても、できるだけ謙虚にいることは賢明なことなのかな、と思ったりします。

――森山さんは、ちゃんと自身の核があって独自のスタイルがあるからこそ、自分の無意識で人を引き寄せる、自分と全然違うジャンルでも引き寄せるもの持っているのかな、と思ったのですが。

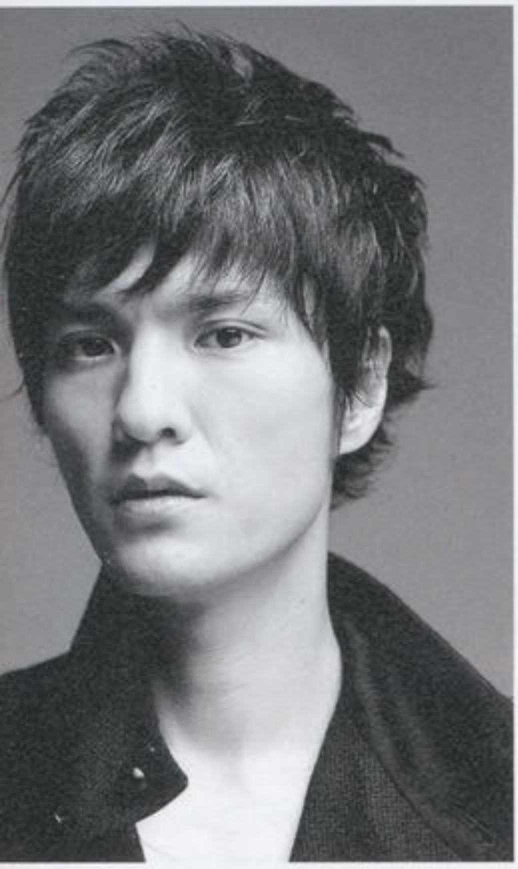
●引きが強いか弱いかっていうのは、こればっかりは、自分じゃわからないですけど。ただ、引きがあるかないかっていえば、ある方のような気がするんです。だからこそ、関係を大事にしたいというか。やっぱり、ある程度人に影響を与える立場だし。リリースをしたりライヴをしたりすることは、スタッフが関わってくるし、バンドが関わってくる。そうなってきたときに、いい引き寄せなのかどうかっていうのは、常時自分の胸に手を当てて考えるようにはしています。

――なるほど。

●でもたぶん、多かれ少なかれ、みんな絶対あると思うんですよ。ひょんな出会いとか、巡り合わせとか。そういうときって、ときめくじゃないですか。でも、僕も過去の経験で出会ったことに興奮してしまって、一緒になにかをする意味だったり、本質だったりから少しずつ遠ざかってしまった、みたいな失敗があるから。そういうものを踏まえて、本当に今、しなきゃいけないことなのか。自分の目標に対してつながっていくことなのか、またそ



たとえば、ワーって笑ったんだけれども、その後に、ふと相手が寂しい表情をしている、とか… そういう些細な、小さな瞬間に、実は本質がある



の目標を上回るぐらいのそれが出会いなのかっていうのを、常に考えます。僕個人だけの問題だったらいいけれども、人が関わってくることだから。でも、最初から疑心暗鬼になってもしょうがないので、人の目を見てその場の空気を感じながら、"あ、これは絶対価値ある出会いだな"というものを、まず感覚として捉えられたときに、たぶんつながっていく感じですね。

――今年1月にリリースされたMiss Mondayさんのシングル『The Light』(Miss Monday、Kj from Dragon Ash、森山直太朗、PES from RIP SLYMEのコラボレーション作品)では、Dragon AshのKjさんなどジャンルの違うアーティストさんとやっていらっしゃいましたね。

●Kjくんとは、今でもたまに連絡を取り合っていますね。全然畑は違うし、かたやミクスチャーロックで、"なんだ？　ミクスチャーって？"みたいな(笑)、そういう話からしていますが。彼は、自分では絶対真似のできないようなことをやっている人だけど、ああいう感じで振り切っていると、共有できるものがすごく多かったりするんですよ。まあ、同世代っていうのもあるし。この間も、彼のスタジオの前を通りかかったので電話をしたら、ちょうどいて、遊びに行ったんです。で、居心地がよくてベラベラしゃべっていたら、"もう、そろそろ帰ってくれ"って(爆笑)。

――現場の空気を読めなかった(笑)。Kjさんのスタジオで「KY(空気読めない)」になってしまったという…。

●そうですね(笑)、ちょうど5日くらい前のことなんですけど。

――全然ジャンルが違っても、通じ合えるものがあるんですね。

●ジャンルも違うし、価値観も違うと思うんですけど。でも、気質が似ているのかな……？

――確かに人って、一つの道を究めていくと、別の道を究めている人と、あるところで通じ合えるといった話を聞いたことがあります。例えば音楽家、絵を描いている人、政治家の人……。おのおのの道を究めていけば、全然ジャンルが違っても、そこでしか通じ合えないものがある、といった話を聞いたことがあります。

●あるでしょうね。僕は非常に狭いネットワークでやっているので、あまり交友関係みたいなのは広くないんですけれども。そう意味の話では、僕は体育会系気質だから、この間やっていた世界陸上のボルトとか観ていると、世界一のアスリートでも、リンクするところがいっぱいあるんですよ。

――それは、どんなところに感じますか？

●彼はただ、ピュアに走ることが大好きで、ただ一等賞になりたいって思いで走っていると思うんです。今日、この試合の中で一等賞になりたいっていう、そのピュアネスが今も世界記録とか、あの舞台の上でもそこにまだつながっているから。一等賞になったときに、こうやって(天を指差すようなボルトの勝利のポーズを真似する)パフォーマンスをして。でも、世界新記録のボードの前にいる映像はよく流れていますけど、そのときはもう、あんまり興味がない感じに見えますよね。

――表情が違う？

●目が全然違うんですよ。そのときのレースで一等賞になった、ということの方が彼にとって大事で。そのピュアネスって、昔、運動会で最初に



テープを切ったっていう、その喜びがたぶんずーっと持続していて。それがある限り、きっと自分が走っていることの意味を感じていたり、まだ向上したい、まだいけるかもしれないって思っていたりするんじゃないか、と。アスリートは寿命が短いから、その分パフォーマンスしている姿が観ている側に、燃え尽きようとしている感じを与えて“そうだよな”と思わせるんでしょうね。いつか終わってしまう選手としての寿命。でも長い人生でも同じで、いつか体は消えてなくなってしまう。その間の中でどれだけ自分を追い詰めて、どこまで自分のポテンシャルを引き出せるだろうか、とか。それはもう、想像力以外の何ものでもないと思う。だから彼がこうやって天に指を指したりするのも、すごく合[illegible]がいくんですよ。ただのもてたいだけの人じゃない。“まだ俺はピュアだぞ。世界一ピュアだぞ。つながっているからね”みたいな。そのパッションは、すごい……。自分とは全然畑が違うし、国籍も体格も違うけれど、意外とそういうところに、胸を打たれていますね。“そうだ、そうだ！　だめだ。自分で決めちゃだめだ！　自分の可能性は、少なくとも自分で決めるものじゃない”って思ったりしました。

——それはやっぱり、森山さんも同じ立場でステージに向かっているからですよね。

●すべてを知っているわけではないから、わからないけど。でも、歌うっていうことが、やっぱり自分が楽曲や“歌う”ということを鏡にしながら、ライヴをしているんですよね。ましてや舞台の上なんて、光が射して、その中で何ができるんだろう、って考えると、ただ歌うしかないんだって。その“ただ歌う”ってことの難しさを、いつも感じています。さっき言ったように、ちっちゃいことが気になる人間なので(笑)。そういう自分の自意識が、損得勘定で言ったら邪魔でしょうがないんですよね。

——え？　自意識が、ですか？

●うん。だけど自立したメンタリティがないと、その舞台の上には絶対立てないっていうのはよく分かっているから。さっき言った細部の話につながるんだけれど、すっごい日常が大事なんですよ。日常がワーッって積み重なって舞台がある。その舞台の上で急にバーンってやったものが、雰囲気としてできている感じでも、やっぱり細かい部分で違うんですよ。思ってもないこと言っただろうとか、その一言が、どこか取り繕うように出ちゃったときに“なんのためにここに立っているんだ”と、意味がなくなってしまう。でも、愛想が悪いって思われたくない、とか(笑)。実はそんな小さなところで自分と向き合いながら、歌っていたりもするんです。だけど、そこを受け入れて。おもしろいもので、嫌なところ、都合の悪い自分を受け入れた先に、お客さんから返ってくるものがあるんですよ。

(⇒P54へ続く)



LM.C

限りある人生を彩ってくれるBGMになったり、ことばにできないモヤモヤを代弁してくれたりしますよね

インタビュー＝桂泉晴名

2006年10月にデビューし、今年3周年を迎えたLM.C。ポップなビジュアルにまず目が止まってしまうが、それ以上に聴き手をわくわくさせるような多彩な音楽が印象的だ。彼らの音楽は日本のみならず海外でも高い評価を受け、2009年はワールドツアーも成功。11月4日にはニューシングル『GHOST † HEART』をリリースし、その活動に注目が高まっている。国も年齢も超えることができる、LM.Cの音楽の魅力を探るべく、ボーカルmaya、ギターAijiにインタビューを行った。



LM.C

maya

自分たちは、わりと前向きだと思うんです。
だからそういった空気が出たらいいし、そうありたいな、と

——8月30日に開催された「LM.C Club Circuit'09 -CRAZY A GO GO 2-」の新木場STUDIO COASTのライヴを拝見したのですが、ステージセットがすごく凝っていますよね。

maya●おかげさまで。

——ステージの中央が高くなっていて、そこにドラムセットがあるというシチュエーションは、はじめてみました。

Aiji●自分たちも初めてやったんですけれど、ドラムが上にあるので、アイコンタクトがいっさいとれず、とにかくやりにくかった(笑)。この間のツアーで、初めて名古屋と大阪にも同じセットを持っていったんです。本当だったら全箇所持って行きたいんですけれど、組むとお客さんが入れなくなってしまう会場もあるので(笑)。なかなか持っていけないですね。

maya●セットリスト、ステージセット込みで、最近のライヴになればなるほど、自分たちがやりたい世界は表現できているかな、と思います。

——LM.Cの歌詞から届けられるメッセージは、毒もありつつもすごく前向きな力強さを感じました。

maya●自分たちに純粋に、素直にやると今みたいになるというか。自分たちは、わりと前向きだと思うんです。だからそういった空気が出たらいいし、そうありたいな、と。特に歌詞に反映されています。

——お客さんの年齢層も幅広いですね。

maya●極端な話、赤ちゃんとかにも評判いいらしくて。別に年齢層幅広く全部に、とは意識していないんですけど、自然にやったらそうなって。もちろん、すごくうれしいです。

——そういえば、私も知り合いの2歳の男の子がLM.CのPVに反応していた、という話を聞きました。

Aiji●きましたかー。子どもにしか反応できない周波数が出ているんです(笑)。

maya●子どもとイルカしか反応しないね(笑)。

——(笑)。不思議ですね。

maya●本当、最近増えてきたのは"うちの姪が、甥が"とか。

Aiji●多いですよ。だからあと10年頑張れば。

maya●10年後くらいには違うアーティストを好きになって巣立っていっちゃうとか。

Aiji●巣立っていっちゃうの!?

maya●そういう入り口にはなった、と。

——いやいや、次のジェネレーションにもLM.Cの音楽が続いていくということで(笑)。

maya●だと、いいんですけどね(笑)。

Aiji●無理せずそういうのを自分たちで選んでやっている、っていうのが[illegible]いん[illegible]ょう[illegible]ストレスは一切ないんですよ。普通[illegible]自分たちのイメージができ上がればでき上がるほど、ストレスを感じてしまったりするじゃないですか。自分たちの場合はそういうのがなく、すごくフラットです。

——あと、MCを聴いていると、Aijiさんとmayaさんの良い関係が伝わってきますね。

maya●知り合って12年くらいなんです。

Aiji●でも、生意気な感じで攻めてくるようになったのは、ここ1~2年ですけど(笑)。それまでは、とりあえず"はい。はい"みたいに、全部聞いていました(笑)。

——Aijiさんの言うことは絶対、みたいな?

maya●いまだにそうですよ~。とか一応言っておきます(笑)。

Aiji●当時は、完全に猫被っていましたね。最近はガンガン噛み付いてきます(笑)。

——それは心境の変化ですか?

maya●慣れですかねー。

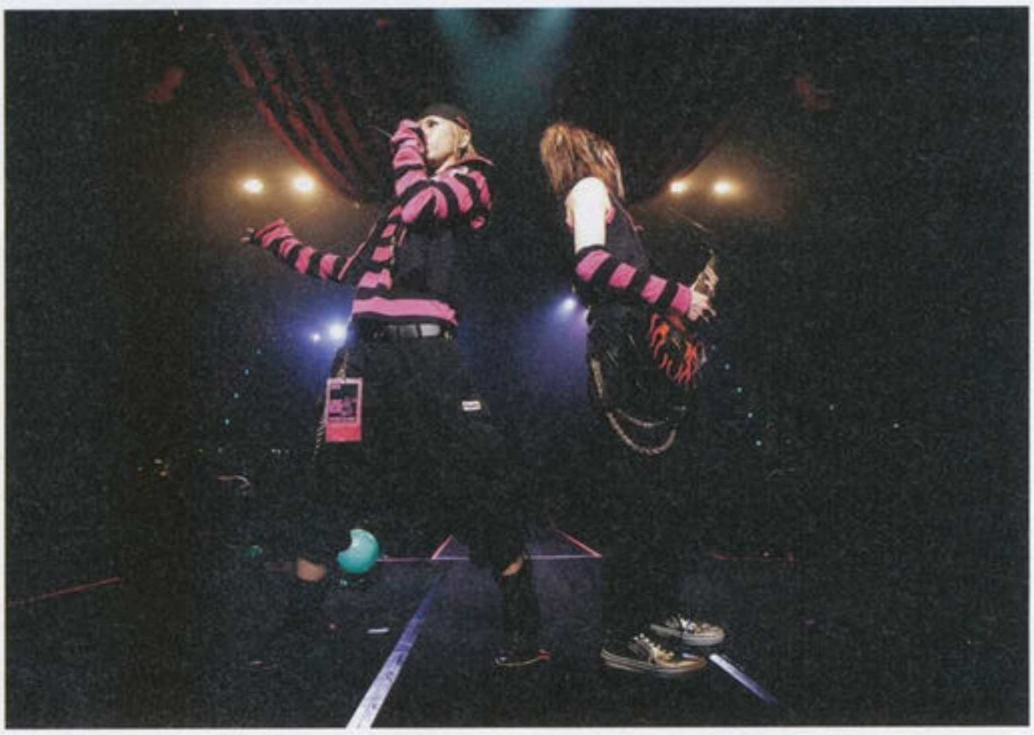
(一同笑)

Aiji●単純な慣れです、みたいな(笑)。まあ自分としても、ずっと体育会系ノリの先輩後輩じゃ困るんで。メンバーである以上、どこか対等でないと。そういう意味では、やっと普通になったんですかね(笑)。

——歌詞はmayaさんが書かれていますが、Aijiさんから注文することはありますか?

Aiji●基本的にはしないですよ。でも、俺が思うmayaらしさからずいぶん離れているときは、"違うんじゃないの？　本当に書きたいことを書けていない感じがする"って。迷いがある感じとか何となくわかるので、そういうときは言いますね。ただ、過去に2~3回しか言ったことないですけど。

maya●自分が"これしかない"と思えないと、や

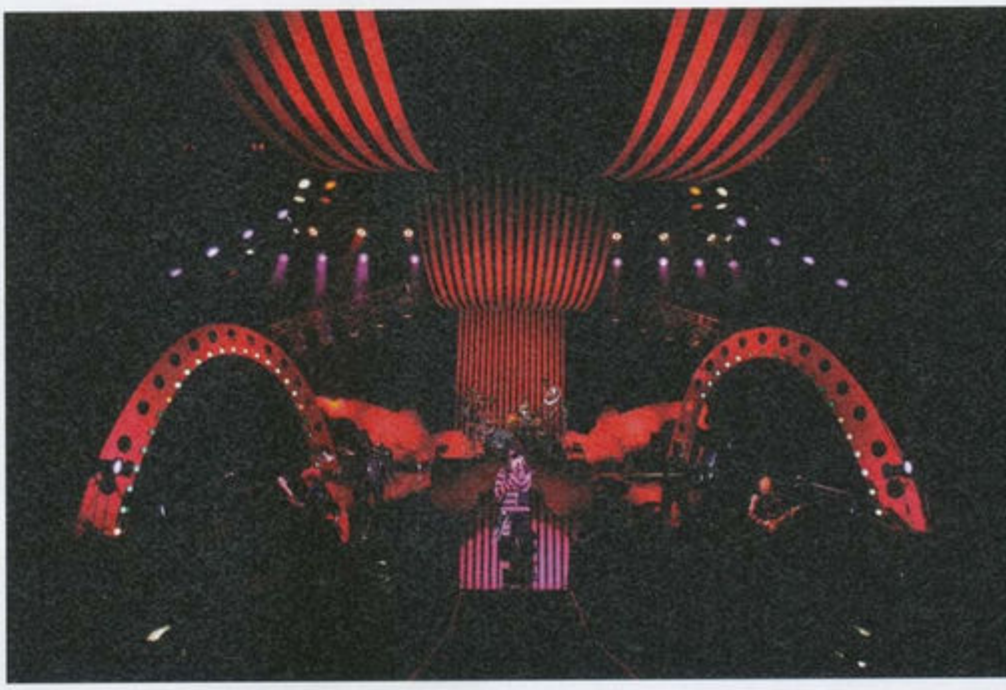












っぱり周りにも伝わるので。そういうのは確認できるからいいですよね。

――mayaさんの歌詞はいろいろな視点から書かれていますね。

maya●なんでしょうね。曲によばれてくるとか……。でも、増えてくると、表現は違っても、統一された何かがあるな、と思います。作詞も作曲もはLM.Cからやりだしたので、最初はわからなかったんですけど。曲が増えてくると"あ、こういうことを言いたかったんだ"とか、"こういう表現をしていきたいのかな"というのは最近なんとなく分かってきました。根本的に歌詞は自分の好きな語感とかを探りながらやっている感じはありますね。

――なるほど。そして11月4日にはニューシングル『GHOST†HEART』がリリースされますが、こちらはホーンテッドマンションなど西洋のお化け屋敷を連想させる、ミステリアスな雰囲気の曲ですね。

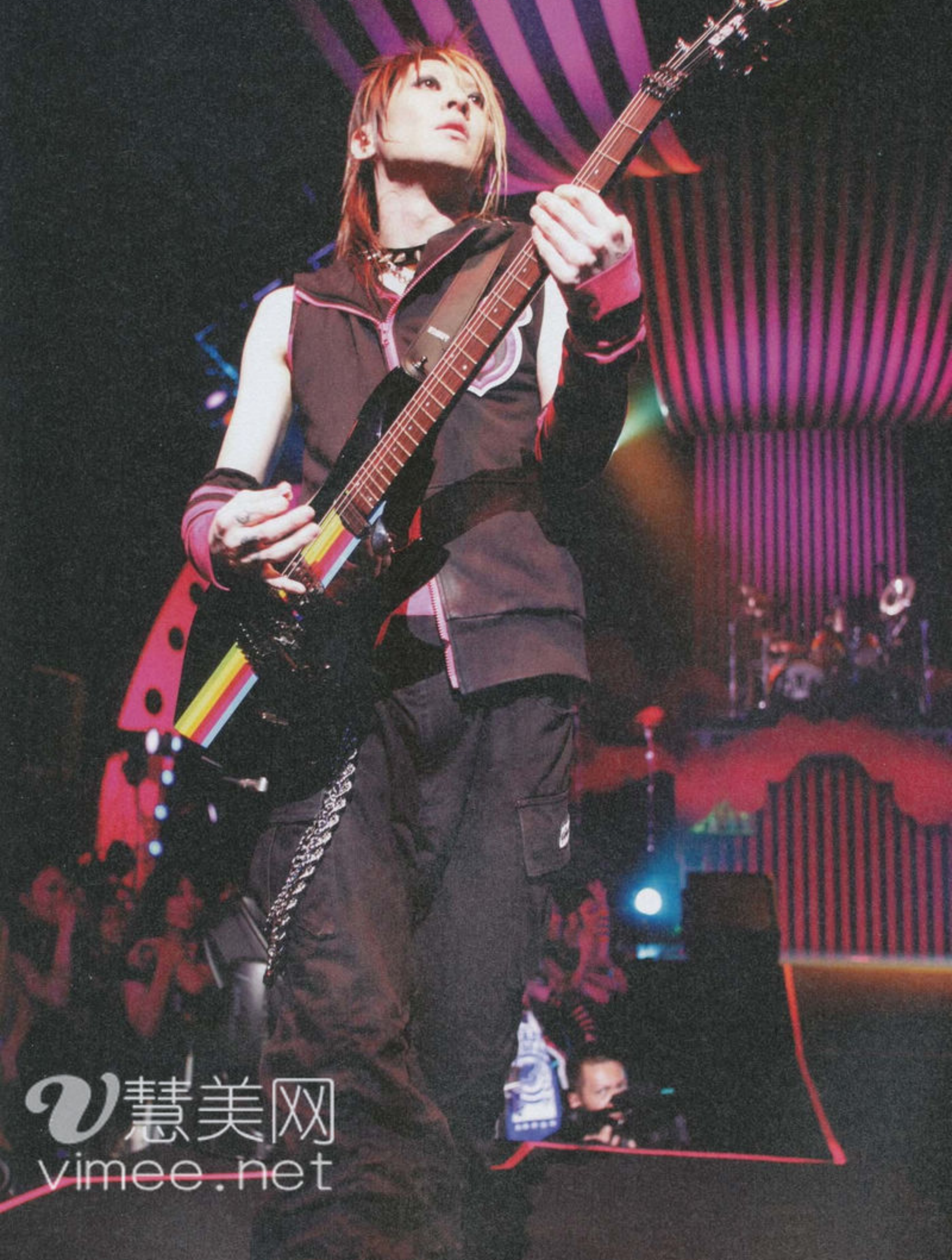
maya●曲自体はシングル用とかではなくて作った1曲で。もともと『GHOST』って仮タイトルにしておいて、それをテーマに曲を作っていったんです。歌詞はあとなんですけれども、時期もハロウィンに近かったので、よりLM.C的ハロウィン観っていうか、そういうのにしていけたらいいなと思って、やっていました。ホーンテッドマンションという感じに聴こえたら、ばっちりだと思います。まあ、どう聞いてもらってもいいんですけどね。もし、"大草原ですね"っていわれれば、あ、そう聴こえるか、って。

Aiji●それは、失敗です(笑)。

maya●こっち的に迷いがあると、"ああ、やっちゃったな"って思うかもしれないんですけれど。基本的に迷いがなければ、そう思われても大丈夫です。

(⇒P57へ続く)

Aiji
偏らないでアンテナ張っていた方がいいですよね、
音楽って人生を元気にするすばらしい手段だし

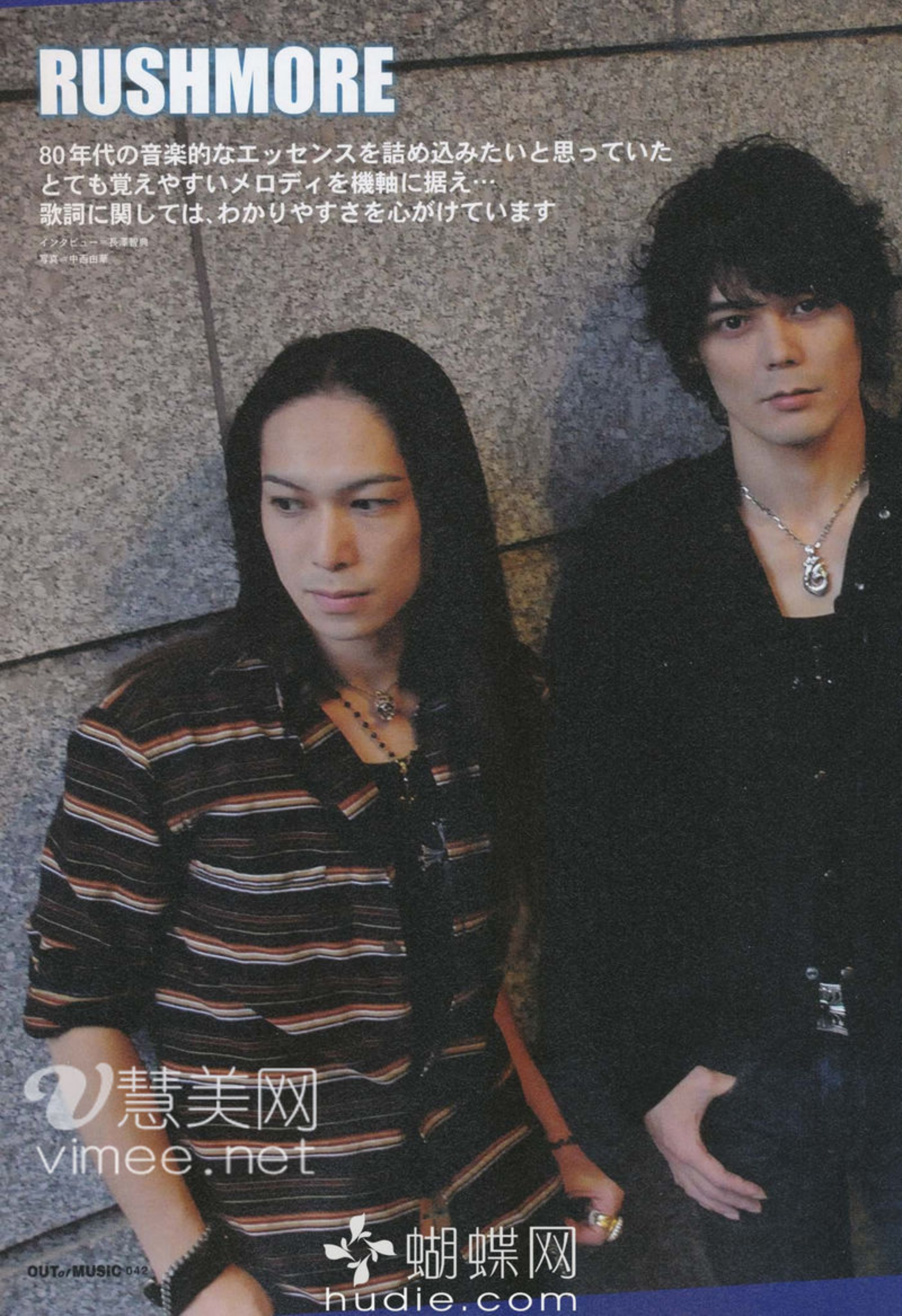


ライヴ写真はLM.C Club Circuit'09 -CRAZY A GO GO 2-(8月30日、新木場 STUDIO COAST)で撮影されたものです。

RUSHMORE

80年代の音楽的なエッセンスを詰め込みたいと思っていた
とても覚えやすいメロディを機軸に据え…
歌詞に関しては、わかりやすさを心がけています

インタビュー＝長澤智典
写真＝中西由華



元E.L.Tのキーボディストであり、サウンド・コンポーザーの五十嵐充。
彼がついに、新バンド"RUSHMORE"を結成。9月より、4ヶ月連続配信リリースを行っている。
すでに『ever yours』、そして、マイコーりょう主演のPVが話題の『特別なんていらない』を配信済み。
11月18日には『KAMITSU』を。そして12月9日には、クリスマスの時期に向けた楽曲も登場。
さらに待望のアルバムのリリースも決定している。これからどんな旋風を巻き起こしていくのか。





若井 望(Guitar)



西村 生津琉(Vocal)

――まずはRUSHMORE結成の経緯と、メンバーとの出会いから教えてください。

五十嵐●E.L.Tを離れてからの僕は、裏方として制作を行い続けてきました。でもday after tomorrowの制作を演っている頃から、「またファンの人の前に立ちたいな」という意識が芽生え始めてきたんです。もうそれが5年くらい前になるのかな。その頃から、徐々に「新しいバンドを結成しよう」ということで考えてました。それで、まずは、ヴォーカリスト探しを始めました。ボーカルが決まらないと、具体的な曲作りも始まらないので。そこで知人の紹介で出会ったのが西村生津琉(Vo)なんです。じつは若井望(Gt)も、西村の紹介を受けた時点で「ギターも必要だろうから、どう？」と、同時オファーも受けていたんです。だけどその当時は「バンド全体の構想を決めてないからギタリストはまだいい。それに、ギタリスト候補はたくさんいるので、あとでゆっくり考えるよ」と、一度断ったんですね(笑)。

若井●最初は、まだいらない、と言われてしまって…(笑)。

五十嵐●(笑)。でも、その後、RUSHMOREとしての方向性を含め、西村生津琉を正式にヴォーカリストへ決めた時点で、やはり望がベストと思って決めました(笑)。そして、もう一人のギタリスト坂本光久(Gt)ですが「RUSHMOREをヴォーカル+ツインギター+キーボードという編成で進めていこう」と決めた時点で、インターネットなどでデモ音源も提示しながらギタリストを募集しました。そこで坂本と出会って、直接会って話をしたときに、RUSHMOREの音楽性へ強く共鳴してくれたので、このメンバーが揃いました。それがもう2年くらい前になるのかな？ そうやってメンバーが出揃ったはいいけど、まだバンド内がまとまってない時期に、いきなり正式活動はしたくなかったんですね。だからこそ、メンバー内の音や感覚の潤滑も滑らかになるまで時間をかけて、ようやく今年9月、4ヶ月連続音源配信という形で、正式にRUSHMOREの活動をスタートしまた。まぁ動き始めたら、結果的に怒濤な展開にはなって来てるんですけど(笑)。

坂本●正式活動までに時間をかけたのは、大正解だったと思います。事実、最初の頃は、メンバーみんな"自分の居場所や役割"を楽曲の中へ探しながら、それを突き詰めていく作業に時間を使っていたし、寄せ集

RUSHMORE

RUSHMORE

め的なバンドにはなりたくないからこそ、その重要性や必然性を強く感じながら、バンドの音固めをすることへ時間を費やしてきました。とくにRUSHMOREはツインギターなので、僕も望ちゃんも、「僕はこういうプレイを得意としている」「こういうときはこうアプローチする」など、"お互いに手の内を明かし"ながら、それぞれに居場所を確立させて、それが見えたからこそ、満を持してという面があったのも事実です。

——バンドにドラムやベースなどのリズム隊は入れなかったんですね。

五十嵐●RUSHMOREを立ち上げ時から編成は「ヴォーカル+ツインギター+キーボード」か「ヴォーカル+ツインキーボード+ギター」かと思っていたんです。結果、前者を選んだわけですが。僕自身、80年代の音楽的なエッセンスをRUSHMOREには詰め込みたいと思っていたし、当時の音楽と同じように、とても覚えやすいメロディを機軸に据えつつ、生と打ち込みの融合、というところに主眼を置きたかった。それに僕自身、打ち込みでのリズム作りは十分経験もしてますから、最初から、リズム隊は打ち込みでやろう。必要性があれば、セッション・ミュージシャンを起用しよう、と決めていました。それに…リズム隊を入れると、かならず喧嘩し始めるから(笑)。

——(笑)。すでに配信されている『ever yours』、『特別なんていらない』を通して感じたのが、"歌謡曲風なメロディ+80年代音楽的なエッセンスの融合"という姿でした。

五十嵐●もう、僕の大好きな音楽性を思いきりやらせてもらってます(笑)。年齢的に離れてるとはいえ、若井も坂本も、80年代音楽には強く影響を受けてきた人たち。だから、僕がRUSHMOREを通して表現したいエッセンスの一つである"80年代ポップスの美味しい要素"のことをよく知っているんです。[illegible]人の場[illegible]ク[illegible]ーを聴いて[illegible]ただければわかる[illegible]"80年代ハードロック"の影響も、かなり持っていますが…(笑)。西村は80年代中盤生まれで、当時の音楽は完全後追い世代。むしろそれが、また新鮮な要素をRUSHMOREに与えてくれてるわけなんです。

西村●3人のマニアックな音楽の会話を聴きながら、日々勉強しています(笑)

(⇒P60へ続く)



五十嵐 充(Keyboard)



坂本光久(Guitar)

THE KIDDIE



**ファンの存在って偉大だなと…
聴いてくれる人たちがいるからこそ、
自分たちのやりたいこと、
そしてやるべきことも明確になってくる**

インタビュー＝八尋みくり

8月のワンマンライブ、9月から10月にかけてのツアーを経て、一皮剥けた感の漂うTHE KIDDIE。10月からはなんと3か月連続のシングルリリースがスタート。第1弾の「soar」に続いて、11月4日には「BLACK SIDE」、12月2日に「ポプラ」の発売が決定。さらに「ポプラ」の発売日に合わせて、赤坂BLITZでのワンマンライブも予定されるなど、まさに快進撃を続けている。「爽やか」で「元気」なイメージの中に、一本芯の通った力強さも見えてきた結成3年目のTHE KIDDIE。第3弾に収録する楽曲をレコーディング中のスタジオで、彼らの魅力を探ってみた。

衣装協力＝BLACK PEACE NOW

——シングル3枚を連続リリースということは、3か月間で9曲発表？アルバムにも匹敵する曲数ですが、あえてシングルにした理由は？

ユウダイ●7月にシングル（「elite STAR+」）をリリースしたときに、次はいよいよアルバムだ!と思ってたんですが、実は、音源化はされてないけど、ライブでは演奏してきた曲がたくさんあったんですね。それらをまとめてアルバムにするには、バラエティに富みすぎていて…。アルバムを作るならやはり一貫したコンセプトというか、軸のあるものにしたかったので、じゃあ3作に分けてシングルとして出そうということになったんです。

——第一弾として10月7日にリリースされた「soar」は、ポップで明るい曲調の、いい意味でTHE KIDDIEらしい楽曲ですが、次の「BLACK SIDE」では、ちょっと違った顔が見られますね。

揺紗●みんなの中のTHE KIDDIEのイメージって、爽やかで大人しくて、お利口さんって感じだと思うんだけど、決してそれがやりたいことのすべてじゃないわけで。爽やかっていうのは素の俺たちがにじみ出てるだけですから(笑)、実際はもっと片寄ってるし、違う一面もあるんだよって示したかったんですね。いつもとは逆の方向性を見せることで、バンドとしての振れ幅を広げつつ、本質を浮き彫りにしていけるんじゃないかって。



揺紗
(Vocal)



佑聖
(Guitar)

ユウダイ●やりたいことっていっても、上物の音楽的な世界観ということじゃなくて、メロディだったり精神だったりね。

揺紗●そう。そういう部分を聞いてほしい。3か月間バラバラな曲を発信することで、より型にとらわれないTHE KIDDIEが見えてくるんじゃないかな。

——「BLACK SIDE」には自傷とか血に飢えた悪魔とか、ちょっとショッキングなワードも出てきますね。

揺紗●これは悪い夢のことを歌ったんです。ふだんいいやつと思われている人が、何かで失敗して誰かを傷つけたとしたら、周りからの印象や評価が変わるだろうし、本人も罪悪感に苛まれると思うんです。そんな人がいたら、『これは全部悪い夢なんだよ、だから大丈夫!』と言ってあげたいし、俺も言われたい。そんな思いを込めた詩です。

——…何かいやなこと、あった？

揺紗●いやいや(笑)。そうじゃないけど、曲がパンク調だったので、メタルのように重いとか暗い、怖いというんじゃなくて、純粋に「悪さ」みたいのをイメージしたんです。

THE KIDDIE







――音からも「悪」な感じが伝わりますね。

淳●原曲をユウダイくんが持ってきたときから悪そうなイメージはあったので、素直にギターで味付けしていきました。バンドサウンドというか、、パンキッシュなの疾走感をツインギターのアレンジでうまく表現できたと思います。ガツガツした、決して明るくはない雰囲気のギターのリフも曲に合っていて、聞き所になったんじゃないかな。

佑聖●サウンド自体はパンクだけど、ソロにはメタルを入れてみたりね。俺の中のヴィジュアル系って、ツインギターでかっこいい!ってイメージなんだけど、この曲もツインギターを生かしたかっこいい音に仕上がったと思います。

そらお●俺は原曲でギターのリフがわかったてたし、ソロも聞いたので、ギターメインにしてベースが邪魔をしないように、ルートで支えに徹しました。

揺紗●他の楽曲に比べると異色かもしれないけど、精神的にはすごくTHE KIDDIEらしい1曲になったんじゃないかな。

(⇒[illegible]3へ続く)

GACKT

僕のことを好きでいてくれる人を楽しませたい、喜ばせたい、そんな気持ちで頑張れてるんだ

インタビュー＝武市尚子
写真＝田中和子(CAPS)
ヘア&メイク＝小竹珠代(ビーグリー)
スタイリング＝石川大輝(イシカワヒロキ)

衣装協力＝「Harem Rounge」(ブラウンのレザーブルゾン／03-5414-8033／Draw design creations)、「RUPERT」(パープルカットソー、ブーツ／03-5469-6418·(株)P/X)、「A LITTLE VILLAGE.#1.」(パンツ、ベルト／03-3470-1936)、「AIZ」(ニットブルゾン／03-3449-3229)、「Dark side inhabitants」(アクセサリー一式／www.h-darts.com)



(⇒P22からの続き)

――10月28日にライヴ写真集と12月2日には『Requiem et Reminiscence Ⅱ～鎮魂と再生～』のファイナルを収録したVISUALIVE DVDがリリースされるんですよね。写真集の写真、すごく良かったです。オフショットもあって。

●いいでしょ。この10年の集大成だね。ライブ以外の撮りおろしの写真はツアー先で撮ったんだよ。沖縄、函館、長崎。いろんな所で撮った。すごくいい写真だと思う。ライヴの方もね。写真集に関しては、60本のライヴの緊張感を届けたいっていうところを一番に考えて作ったんだ。スチールだから静止画なんだけど、躍動感があるっていうモノにしたかったからね。それを軸にチョイスしていったんだ。ライヴDVDは、ただの映像資料用のDVDにはなっていない凄さがあると思う。どうやったら"VISUALIVE　DVDになるかっていうところをすごく考えて作っていったから。映画のようなライヴ映像にしたかったんだ。これはね、見てくれたら解るよ、これはライヴDVDじゃないな!　映画だな!って思ってもらえると思う。だいぶ、いいよ(笑)。

――あははは。太鼓判ですね!

●そうそう(笑)。だいぶ良いから(笑)。これは、ライヴを見た人も見てない人も楽しめる。僕はね、ライヴを見てない人には、参加したかった!って悔しがってほしいし、ライヴを観に来てくれた人にも、もういっかい参加したい!って悔しがってほしいんだ。

――ですね(笑)。私も見て悔しがりたいと思います。

●うん(笑)。僕自身も楽しんで音楽を作っているから、みんなにもおもいっきり楽しんで参加してほしい。僕はただ、本当にそれがしたくて頑張っているんだから。僕のことを好きでいてくれる人を楽しませたい、喜ばせたい、そんな気持ちで頑張れてるんだ。僕の信頼する人であり、僕のこの10年を見守り、支えてくれた人のひとりであり、僕のファンでいてくれた東條さん(フールズメイトの元編集長)が最近亡くなられたんだけど、ああいう人が僕を支えてくれていたんだって思うと、本当にその気持ちに応えたいって思うんだよね。その想いがあってこそなんだよね。僕がここまでこだわってモノを作っていなかったら、彼も僕にそこまで真剣に向きあおうとしなかったと思うんだ。けど、この10年、東條さんと話して来て、ここまで向き合えたのは、僕の作り出す作品があったからこそだと思うんだ。僕のそこに対する妥協したくないという想いを、ちゃんと感じてくれていたからこそ、そこに成り立っていた関係性だったと思うんだ。それはファンの人、みんなに言えることだとも思ってる。今後、生きていく上で、たくさんの別れを経験しなくちゃいけないと思うんだ。だからこそ、ひとつひとつに精一杯の気持ちを込めて、届けたい。本当にそう思ってる。「斬～ZAN～」にしても「雪月花－The end of silence－」にしても、もう彼のインタビューを受けることは出来なかったけど………。でも、この2曲が出来たとき、彼にまず聴かせたんだ。どう思う?　ってね。そしたら、ドキドキします!　次のライヴのエンディングが見えます!って、すごくキラキラした笑顔で言ってくれたんだよね。それが嬉しくてね。早く見たいです!って、ワクワクしてくれてた。僕はね、万人にウケる音楽を作るために頑張ってるんじゃない。こうやって、ワクワクしながら、楽しみに待っててくれる人のために、頑張るんだ、って、そう思ったんだよね、改めて。そのときに。僕はそういう人たちのために頑張ってきて、今、万人にウケているという訳じゃなく、この10年で、僕が作る作品にワクワクしてくれる人が、ここまで増えてくれたってことなんだって、彼のその笑顔を見て思ったんだよね。あぁ、これが僕にとっての幸せなんだなって、本当に改めて感じたんだ…。そんなファンの人た

ちの想いに応えるのが僕の使命であり、義務なんだってね。

——ファンの人と同じ気持ちを持っていてくれたでしょうからね、東條さんは。本当に、編集者としてもちゃんと厳しい目を持ちつつ、東條さん自身もご自分に厳しく、モノを作る人間として、妥協は絶対に許さなかった人でしたからね。

●そうなんだよね。本当に、ちゃんと厳しい目も持ちつつ、子供の面を持った人だったよね……。僕の周りで今、一緒にモノを作ってくれてる人や、こうしてインタビューをしてくれている人は、本当にそういう人ばっかりだと思ってるよ。

——私はフリーのライターになる前、アイドル雑誌の編集者をしていたんです。読者が何を求めているのか？　とか、アイドル的な見え方の奥にある、この人達の本質の部分を探っていけるインタビューをしたいって思って。その中で、アイドルの子たちも、エンタテイメントな世界を作り上げるために、ここまで真剣に向き合っているんだっていうことに感動しましたし、なんとか、見た目だけじゃない部分をちゃんと誌面で伝えたいって思うようになったんです。そして、10年前に編集者を辞め、ゼロから音楽ライターとしてスタートしました。自分の原稿をファイリングして、ひとつひとつ音楽雑誌の編集部を訊ねて歩いたんです。でも、原稿は全部アイドルのモノ。そんななかで、東條さんには、ファイルを突き返されたんです。アイドルやってた人が、音楽出来ると思わないで下さい。音楽はそんなに甘くはないですって、ハッキリ言われて。

●あはははははは。彼らしいよね（笑）。

——はい。その時は、アイドルだって頑張ってるんだぞ！　読んでくれるくらい読んでくれたらいいのに!って思ったんです。それから10年、私も妥協せず真っ直ぐに向き合って原稿を書いてきました。ある日、ライヴの楽屋であるバンドのメンバーが武市さん、この前の書き原稿、感動しました。俺、あの原稿読んで泣いたんです。あの原稿、俺、今年ナンバーワンだと思ってます!って言ってくれたことがあって。ちょうどその場に東條さんもいて、武市さん、覚えてますか？　僕にファイル持ってきてくれた時のこと。僕、突



GACKT



き返しましたよね。アイドルやってて音楽やれると思うなって。ずっと気になっていて、クレジットで武市さんの名前を見る度に読んでいたんですよ。いい原稿、書きますね。僕が間違ってました。この場を借りて、謝らせて下さい。これからも、僕には書けない武市さんだけの原稿、書き続けて下さいねって。深々と頭を下げられたんです………。

●それも彼らしいね。すごく彼らしい。真剣に向き合っているからこそのことだからね。でも、それが伝わり合えたってことが素敵なことじゃない？本当にそう思うよ。伝わるんだよね、人間、本当に一生懸命やればいつかは。僕はそう思ってるよ。自分がそうやって生きていたら、自然と周りにそういう人が集まってくるんだ。本当に。

――本当にそう思います。東條さんは、GACKTさんと、同じモノを作る人間としても、真正面から向き合っていたと思うので。東條さんは、他社の編集部の方が、GACKTさんに関する資料を貸してほしいと言われて、GACKTさんとファンの人たちにとって、素晴しいモノが出来るならって、快く協力してくれていたと聞きました。亡くなった後、ちゃんとそれが一式準備して下さっていたのが解ったって…。

●…そうなんだ（少し黙る）。みんなが右と言えば、右を向かざるをえない、そうした方が生きやすい世の中で、頑張り続けるって本当に大変なことだよね。でも、そうやって生きてこそ、生きてる意味があると思うんだ。でも、人は独りじゃ生きられない。僕、GACKTだってそうだよ。僕を支えてくれる人がいなければ、僕はここに居ない。みんなが居てくれるからこそなんだ。そんな僕の想いや言葉を届けてくれるのは、こうやって雑誌を作ってくれている編集者、ライターあってのことだと僕は思ってる。その人たちの想いがあってこそ、読み手に伝わると思うんだ。だから、僕にとっては本当に大切な存在なんだ。ネットが普及したことによって、音楽雑誌の需要が低下している今、僕は雑誌の大切さってすごく感じているんだ。本当にね。12月2日に出るアルバムのインナースリーブを東條さんに書いてもらったんだけど、彼はその出来上がりを見ずに逝ってしまった。なんだかね、遺言になっちゃった。こんな遺言残されたら、もっともっと、今以上に頑張るしかない。そう思ってるよ。人間っていつかはみんな死ぬんだよね。だから、いつ死んでも悔いのないように、精一杯生きなくちゃいけないんだよね。本当に、いままで以上に真剣に生きたいと思うよ。だから、一緒にモノを作ってくれる人たちとも、真正面からぶつかっていきたいと思うし。こうやって、真剣に向き合ってくれるからこそ、読者に届く想いっていうのは絶対にあるからね。

――そうですね。私も心してこの先も頑張って原稿を書いていきたいと思います。12月2日にリリースされるアルバム『RE：BORN』も楽しみにしてますね。

●うん。絶対に期待は裏切らないモノになると思うから、楽しみにしててほしい。GACKTの今現在までの集大成とも言える作品になると思うから。

■プロフィール■

GACKT（ガクト）

Date of Birth：4th July。Blood Type：A型。1999年、バンドMALICE MIZERでボーカルとして活躍したのちソロプロジェクトGACKT JOBを始動。2009年12/2 VISUALIVE DVD「GACKT VISUALIVE ARENA TOUR 2009 REQUIEM ET REMINISCENCE「FINAL～鎮魂と再生～」、「GACKT PERFECT STORY BOOK『RE:BORN』」を発売予定。12/9 NEW SINGLEを発売予定(Wii用ソフト『戦国無双3』（コーエー）のテレビCM及びゲームのエンディング曲)。2007年、NHK大河ドラマ「風林火山」の上杉謙信役、2008年はハリウッド映画『BUNRAKU』(2010年公開予定)の準主役に抜擢。日本を始め世界各国にも熱狂的なファンを生み出しており、iTunes Storeでカタログ全曲世界一斉配信も日本人初としてスタートさせている。

GACKT Official web
http://gackt.com/
GACKT Official Mobile Site
http://gackt-underland.jp/

UVERworld

間違いのない、次の一手を繰り出した…

インタビュー＝長澤智典

やはり、「俺らの意識はどうなんだ?!」という気持ちが大切なことですから。

(⇒P31からの続き)

――2曲目には、UVERworldらしいロックの衝動を詰め込んだ、こちらも壮大な広がり描いてゆく『撃破』を収録。

TAKUYA∞●やっぱり楽曲というのは、末広がりで完結したほうが、聴いてても気持ちいいので、この曲もまた、メンバー全員で曲制作していく中、自然とドラマ描くよう世界観が広がっていった楽曲でした。

――やはり、「ドラマチックさ」は大切な要素なんですね。

TAKUYA∞●映画や本、音楽はもちろん、人生そのものにも共通していることって、"ドラマチックさ"なんですよ。それは、どんな物事にも存在していることであり。そこへ共感を覚えてゆくことも多いよう、僕らも自然とそこを求めていく面は強いです。

――『撃破』では、メンバー全員でコーラスを入れました。

TAKUYA∞●昔だったら、自分で何十人もの声を入れ、一人多重コーラスを演っていたんだけど。いい意味で余裕が出てきたというか、「もっと歌にリアルさが欲しい」と思えたんですね。克哉も彰もヴォーカル経験者なので、もともと歌えるし、事実、こうやって全員の歌声を重ねあわせたことによって、とてもリアルな表情を描けたと思ってます。

彰●あのコーラスの迫力は、ものすごいから。最初、個々に歌入れをしているときは、「一体どうなるんだろう?」という不安も正直あったけど。全員の声を重ね合わせたテイクを聴いたときには「ぜんぜんイケるじゃん!」と嬉しい手応えを感じましたね。安心した、と言うよりも「かなりイケる」と思いました(笑)

克哉●もともと『撃破』は、UVERworldの得意とするパワフルな音楽性を強く描いた楽曲ではあったんですけど。全員の歌声を入れたおかげで、さらにバンド感が増していったのは間違いないです。きっと、聴く人たちも新鮮に感じれるよな、"UVERworldらしさと新しいUVERworldの色"をミックスさせた楽曲になりました。

――ものすごく緩急があって、ドラマチックに楽曲が展開していきますからね。

克哉●疾走感を抱きながらも、繊細さだって持っている。『哀しみはきっと』とはまた違った緩急の表情を付けることの出来た、とても意味のある1曲に仕上がりました。

――コーラス入れに関しての感想も、ぜひ聞かせてください。

克哉●ボーカルブースでの歌入れは、正直、初めての経験でしたね。レコーディングのときには、ガラス張りのブースの向こう側で、メンバーみんな腕組みをしながら、僕の歌を聴いてるわけですよ。しかも、向こう側の声は聞こえないけど、笑ってる姿などを目にすると、「何で笑ってるんだろう?」と勝手に不安になったり(笑)。正直、恥ずかしかったというか、ちょっと緊張もした、いい経験になりました(笑)

信人●僕なんか、メンバーの中で一番最初にコーラス入れをやったからね。もぅ、「この恥ずかしさをすべて伏せなあかん」という気持ちに持っていきながら、がんばって歌入れしていきました。

彰●一生作品として残るものやから、メンバー内で照れててもしゃあないからね。その気持ちは、みんな振り切ってがんばったんじゃないかな。

真太郎●むしろコーラスを入れたことで、ヴォーカリストの気持ちが、少しはわかった感じでしたね。

彰●真太郎の声のキーが、意外に高いんだよな。それは、俺らも嬉しい発見でした。

真太郎●僕はライブでも一切唄うことがないからね。確かに自分でも、「あっ、意外に声が高い」とは実感してました(笑)

――楽曲自体も、すごくエネルギッシュさに満ちてますよね。

信人●贅沢なほど、ストレートで格好いい曲やからな。とくに全員のコーラスでガーッと盛り上がっていくところの迫力は、何回聴いても自然と高揚感覚えるんですよ。

真太郎●勢いも疾走感も、予想以上に迫力を増した形で完成。気がついたら、アッと言う間にこの曲のパワーに飲み込まれ、興奮覚えてたって感じでした。

彰●じつはこの曲、もともと2つあった楽曲を一つに組み合わせて作った作品なんですよ。

――えっ、そうなんですか?!

彰●最初はテンポも違っていたし。でも、それぞれの良い面を、一つにまとめあげたら「絶対に格好いい作品になる」とは感じてましたね。テンポの調整や展開、転調を施して、ドラマ性を作りあげることによって、心地好くも激しい流れを持って進んでいく楽曲として完成しました。あ この『撃破』、ライブを通してみんなと一つになってこそ、本当に完成する楽曲だとも思ってますよ。ライブで披露するのが今から楽しみなんです。

――3曲目には、4thアルバム『AwakEVE』へ収録していた『美影意志』の-single ver.-が登場!!

TAKUYA∞●この『哀しみはきっと』を通して、初めてUVERworldに触れる人たちがたくさんいると思うんです。だからこそ、過去の作品の中でもぜひ触れて欲しい曲で、中でも、シングル作品やアルバムの表題曲ではない楽曲の中から、その候補を探し出しました。そこで出てきた候補歌の中、『SORA』を、初回生産限定盤として付いてくるDVDの中へMusic Clip





という形で収録しました。ライブでも演るたびに大きな反響の声が返ってくる『美影意志』を、CD盤に選びました。

――『美影意志』は、アルバムへ収録した時点から、非常に熱狂的な支持を集めていた楽曲だったもんなぁ。

TAKUYA∞●事実、たくさんの反響や感想の声をいただいてます。と同時に、『AwakEVE』へ収録した姿自体が、すでに"音も歌も完璧"なよう、自分たちの中では演り切れた楽曲でもあったんです。でも、これまでズッと僕らのことを応援してくれてる人たちのためにも、やっぱり「新しい何かを提示したい」と思い、新たな息吹を加えていきました。

――それが『美影意志-single ver.-』になったわけですね。

TAKUYA∞●アルバム・バージョンを聴いてる方なら驚くと思いますが、頭にサビが増えてるんですよ。でも、それが、もともとこの『美影意志』のオリジナル・スタイルだったんです。

――アルバム収録時に、なぜ冒頭のサビ歌をカットしたんですか？

TAKUYA∞●それは単純に、前作に収録した楽曲の流れを考え、「Aメロから始まったほうが効果的」と判断してのことでした。だから今回の収録を決めたときに、もとの形へと戻して、さらにストリングスなどを加えながら、楽曲をスケールアップさせたわけなんです。

――歌詞には、「守り続けたい大切な人への想い」を熱い感情のままに綴れ織っています。

TAKUYA∞●これまでにもたくさん別れの曲は書いてきましたけど、こういう前向きなラブソングって書いてなかったんですね。だけどこの歌の作詞をしているとき、まるで決壊が壊れたようたくさんの(想い寄せる)言葉があふれ出し、歌詞を書きながら泣いてたし。書き終えたあとに、すごい満足感や充実度を覚えていた。それくらい、自分自身でも泣けるほどの感動を覚える歌になりました。

信人●よく、失くして初めて、その存在の大きさや大切さへ気づくことって多いじゃないですか。確かに「大切な存在だ」と心ではわかっていながらも、素直な気持ちを表に出せず、ぜんぜん違う態度を取ってみたり。わかっていながらそんな行動を繰り返し、同じ過ちを起こしてしまったり。だからこそ、この詞を通し、あらためて「大切な人を大事にすることの尊さ」を教えてもらえました。

克哉●恋愛って、人なら誰もが生きてくうえで経験してゆくもの。しかも、年齢や経験によって、想いのとらえ方も変わっていくじゃないですか。まさにこの『美影意志』は、その人の経験や心模様によって、いろんなとらえ方や見える景色、想いが変わっていく楽曲なんです。それこそ、10代の頃にはつかめなかった感情が、20代や30代になって理解できてゆく作品にもなっているよう、この歌には、UVERworldを代表するラブソングになっていく手応えを覚えています。

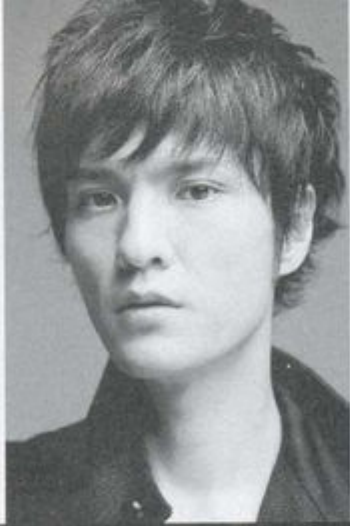
真太郎●歌もメロディも、すごくいいんですけど。中でも、言葉の選び方にグッとくるんですよ。たとえ自分がその経験をしていなくても、とてもリアルにその景色や心模様が見えてくる。それが、嬉しいんです。

彰●こういうミドルテンポの、UVERworldの顔となる楽曲が生まれたというのは、バンドにとっても、とても強い武器になったからね。

信人●前々から、「この曲をシングルにしたい」と言ってたよう、自分らの感覚としては、まさに「アルバムからのリカット・シングル作」という感覚だから。

■UVERworld(ウーバーワールド)■TAKUYA∞(Vocal、Programing)、克哉(Guitar)、彰(Guitar)、信人(Bass)、真太郎(Drum)の5人。

森山直太朗



嘘をつくんだったら、歌うっていうことを手放さなきゃいけない 舞台の上に立ったときに、それが出てしまうから…

インタビュー＝桂泉晴名

みんな根底にある無意識に本当は気づいているのに、そこを素通りしていく都合のいい部分ってあると思うし…でもそのしわよせって、自分だったり未来だったりに寄せて返してくる

(⇒P36からの続き)

――ステージに立つ、ということに対するストイックさ、繊細さ、真剣さに、改めて驚きました。

●そういえば、俺、舞台の上で泣くことはほとんどないんだけれども。この間ライヴをやりながら、自分がね、すごい情けなくなって。いや、すごくいいライヴができたという実感があって、アンコールでみんながウァーってなってくれて、でも、逆に感傷に浸っている自分がいたんです。それはうれしいとか達成感からではなくて、どうやら悔しい気持ちなんですよ。ここまで自分を追い込んだり、周りの人にいろいろなことを言ってもらえたりしないと、俺はまだ舞台に立てないのか、って、悔し涙があふれてきて。それは本当のことだったから、泣いてもよかったんだけど、でも、変に"感動しているー"って勘違いされるのも嫌だなと思って(苦笑)、ぐっとこらえて次に歌う曲を歌わなきゃ、と思ったんですけど……。って、ちょっと話がそれちゃったけど、それくらい生々しい世界なんですよね。

――いえいえ。まさに『涙』という曲に繋がっている話だと思います。……話は戻ってしまいますが、お客さんの反応を見つつ、曲が育っていく、まさに『涙』はそういう曲だ、ということなんですけれども、やはりそれは、久しぶりの感覚でしょうか?

●意識的にしたのは初めてなので、久しぶりというより新鮮でしたね。"ああ、そうか。こういう状態でいれば、同じ言葉でも、こんなに響くんだ"っていう。要するに"状態"がやっぱり常に問われる。作った御徒町くんと、よく話をしているんですけど、"この曲、なにも言ってねえな"って。"涙は何処から来るのでしょう""宇宙の始まるその時に　何かがあったと感じてる"……って、なにも言っていないぞ!と。

――確かにそうかもしれないですね。

●でも、それが真実じゃないかと。涙がどこからくるのかを俺たちは知らないし、その涙がどこへ行くのかも知らない。でも、それは僕たちが生まれてきたことと、まったく同じような感覚で。自分たちはどこからきて、どこへいくんだろう。"そんなこと考えなくていいじゃん"と言われたら、本当にそれまでなんだけど(苦笑)。でもそれを知らないで、どうして涙の良し悪しを決められるの?　涙を語れるの?って、俺は思う。それを考えてもいないのに、なぜ、泣けたからいいの?　なぜ、涙が出たから感動した、って思うの?って。細部の話じゃないけれど、もっとミクロ化したい、みたいな。特にそれは、御徒町くんの性癖でもあると思うんですけれど(笑)。

――(笑)。

●でも僕は表現として、要するに、なにも言っていないってことは、この歌の中に表現者としてのよりどころがないっていうことなんです。"君を好きだ"とか、"一生、一緒にいたい"とか、そういう感情移入できる部分がまったくない。だから、自分の自意識よりも、みんなが絶対に知っている、ある無意識の部分をどこにも寄りかからないで歌っているような感覚があるんです。それで歌っている、っていう状態も、歌っているということを意識しないような感覚で歌えたときに、この曲の本質に少し迫れるような感じがして。ライヴでやっていると、お客さんからそういうレスポンスがあったりもするんですよね。そこで、"あ、そうか"ってわかって。言葉の意味を知るってことよりも、自分の状態を削がないと伝わらないんだな、っていうことが、こういう曲を通して、少なからず学びがありました。だからこそ、ちょっと辛いんです。

――歌っていて辛い?

●辛いです、正直(苦笑)。でも、その辛いっていうのは……。さっき"歌うことを鏡にして"って、少し格好のいい言葉を言ったけれども、この曲と出会えたってことは、なにかしらの自分の成長になると思う。要するに成長したいんですよ。生き物だから。これはもう、どうやったって逆らうことができなくて。枝葉と同じように、いい空気でいい環境だったら、どこまででも伸びていく。いや、ビルの間といった悪い環境だって生きていくじゃないですか。それはもう自然の摂理というか、生き物の定めで。だから僕も成長したい。いろいろ今、偏屈なことをたくさん言うけれど、結局成長したいんだっていうことの裏返しだったりするんです。だからこういう曲と出会えるということは、まだ歌えることがあるということで。それはすごくラッキーなことなんですよね。だからこれからもっと、そういう自分でも追いつかないような、でも感覚的に自分にとって今、必要な栄養かもしれないと思えるようなものとの出会いを希望していますね。そういう意味では、『涙』っていうのはすごい良いハードルかな、って個人的には思います。

――逆に昨年8月にリリースされた『生きてることが辛いなら』は、聴いていて歌詞がすごく入ってくる曲だったと思うんですよね。今回、『涙』を初めて聴いたときに、対極にあるような気がして。頭で考えちゃうと、どう考えていいんだろう、と。でも、心の方が先に反応する曲なのかな、って思って。去年の曲からまた新しい挑戦をされているんだな、と感じました。

●『生きてることが辛いなら』っていう曲に出会えたのも、振り返ったときにすごく大きな分岐点になるんじゃないかな、と思ってはいるんですけれども。それを経て、『涙』ができたんです。なにか、最近できてくる曲はとくにシンプルなテーマが多くて、シンプルだからこそ、そこを根こそぎ細分化して、"本当の優しさってなんだろう?"って。みんなで今、認識しているものってなんだろう?と考えて。別にそこに対するアンチではないんですよ。ただ、"語り合おう"っていうことなんです。こうやって話すことで、絶対に自分たちの感性って深まって、想像力も高まっていくから。ただ、僕もそうなんだけれども、決め付けちゃっている感がありますよね。"優しい人が好き"って。……じゃあ、本当に優しさって何?って。自分にとって都合のいいものが、優しい?　じゃあ、"おいしいものを食べて幸せ"って、その幸せって、本質的な幸せなのか?って。今までそういう幸せだったけれども、本当の豊かさって、そういうところじゃないところにあるんじゃないかと……。僕にもよくわからないけれども、でもそれはどうやら歴史が証明しているよ、というような。やっぱりこれだけ混沌とした時代に生きているから、本当のことが知りたいんですよね。そのために歌を歌ったり、面倒くさいこ

とを考えたりとかしているんですけれど……。それはもう、欲求ですよね。

——特に今は、価値観が変わってきていますよね。これだけ世の中が不況だし、日本でも与党が変わったりしたし。そうすると、考えざるをえないというか。だからこそ、森山さんの“考えようよ”っていうメッセージが伝わります。

●結局、自分に向かっているものですからね。そこについて、まずもう一人の自分と語り合おうっていう。それ以上でもそれ以下でもない。ただ、自分がなんの因果か、こうやって人前で歌わせてもらって、人に届けるという作業をしているからには、やっぱりうまいとか下手とか、好きとか嫌いじゃなくて、そのときそのときの精一杯で歌わなければ、あまりやる意味がない気がするんです。まあ、お金儲けがしたいとか、違う理由がモチベーションとしてあればいいんだけれど、そういうこともないんで。音楽を通して人と深く交わりあいを持ちたいし、つながることを信じている。まあ、人見知りだからこわいという気持ちもありますけどね(笑)。

——今回『涙』が3曲目に入っていますが、これも当たり前に考えていたことだな、と気がつきました。さっきお話を伺っていて、小さなことだけど、そういわれてみれば、“なぜタイトル曲って一番最初が多いんだろう？”とか、考えたことがなかったです。

●もちろん『涙』がたぶんこのシングルのメインディッシュではあるんですけれども。さっき言ったように、この曲は何も言っていないから。“言っていることがよくわからない”と言われたらそれまでなので。それは僕の表現力のなさでもあるし、聴き手が受動的なだけの聴き方になってしまったのは、僕たちの責任というか、都合のいい音楽だけをやってきてしまっている、音楽をやる人の責任なんだけど。もっと能動的にものごとにアンテナを向けて、よりよいものに触れようとすれば、人生なんてコロっと変わるんじゃないかな。それは音楽だけじゃなく、すべての芸術において、触れようとする意識を持てば、ですけど。

——そうですね。

●だから、そんななかでこの曲はすごいお互いが試されているような感じはあるかもしれないです。今は、枚数とか数字に表されるものは、本質的ではないんで。どっちかっていうと、どれだけ人、一人の人に深く強く響くか、って行くことの方に僕は興味があって、それがきっと輪が輪を呼んでいくと思う。この曲に対して先入観を持ってほしくない、ということで3曲目にして。一つの物語を、便宜的にシングルという少ない尺の中で作らせてもらった、という感じですね。

——確かに『涙』にたどりつくまでの2曲があるからこそ、すごく生きる配置ですね。たとえば『涙』が最初にきたら、どういうふうな印象を受けたかな、とは思います。

●“シングルだな”って感じだったでしょうね。これが昨今のポップスにおいてのシングルの作り方で作っていたら別にそれでもいいと思うけれども、そういう手順では作っていないから。ライヴでも、実はこの曲自体の良し悪しとかあり方って、前の曲と前後のつながりがすごく大事だったりするんですよ。それは、ライヴによってこの曲が育っていった、っていうことの大きな理由でもあるし。今回3曲目が『涙』だというのは、その影響が結構大きかったかもしれない。できるだけみんなの心の状態をフラットにしてから聴いてもらおうということで。

——これはあくまでも受け手の感想なんですけれども、ライヴの曲のつなぎが上手な方って、それだけでいいライヴを観たなあ、と感じます

●なにか一つのものを聴いた感じになりますよね。

——そうなんですよね。

●きっと曲を作るときに、曲に対する向き合い方がブレていないか、ということが関係していると思うんですけれど。恋愛の曲だったり、家族の曲だったり、頑張れソングだったり、いろいろなタイプの曲はあるんだけれども、1公演みたときに1曲の曲を聴いたような、そんな感覚を得られる、得てもらえるのは理想ですよね。

——まるで一度しか観られない映画を見ているような感覚に陥るような。

●うんうん。絶対その日にしかないものになる。よくこの話をするんですけれども、セットリストっていうのは、実はライヴをするなかで、一番大事な意思表示なんです。もちろん照明とか、そういう舞台美術も大事だけれど、やっぱりそれは付加価値であって。セットリストさえ決まっていれば、演出なんて実はなくていい、とさえ思っている。ただ客観的にもっとこうした方がいいんじゃないか、ああした方がいいんじゃないかというときに必要なもので。なにかごまかそうとしたり、なにかを美化したりしようとする演出は、僕は演出じゃないと思います。

——シングルにセットリストの概念を持ってきた、ということですね。

●うーん、でもまだ試行錯誤の中で、限界があるだろうし。もしかしたら“ややこしいよ”っていうことかもしれないけれど。今回はそういうアグレッシブな案が出てきたので、“いいね”っていう話になって。自分たちのライヴの流れも含めて、きっとこういう形になったんだと思います。だからちょっとひねてやってやろう、という感じではなく。この方が曲にとって一番いいんじゃないかっていう結果ですね。常に僕はスタッフに、“曲にとっていちばんいい状況と環境を常に思考してほしい”ということは言っているんです。だからわからなかったらどんどん聞いて欲しいし、俺もわからなかったら正直に“俺もわからない”って答えるし。でも僕が作ったとか僕が歌ったとか関係なく、この曲はこの曲然として、一つの形として生まれてきたっていう。それはもう、まぎれもない事実だから、その曲にピントを合わせて。自分の至らない部分はたくさんあるけれども、その曲をまず基準として、みんな足りない部分があったら補い合う。やらなきゃいけないことがあったら、手間暇かけて、時間をかけてでもやる。個人としても、チームとしても、そういう意識が少しずつ芽生えていて、その一つの現れがこの曲順なんじゃないかな、と思います。

——ここまで、とくに『涙』を中心に伺っていたんですけれども、1曲目の『ベランダで虹を見た』と2曲目の『ひとりごと』も、これまた一筋縄でいかない曲だと思いました。実は『ベランダで虹を見た』も、観たものと自分の思いがリンクしているようで、どうやって捉えればいいんだろう？と悩んだんです。

●たぶんどういう風にでも捉えられるんでしょうね。要するに曲を聴いたときに、自分の状態がすごくわかるという。昔からよく知っているライターさんが、今回これを聴いて、“ちょっと自分の想像力が鈍ってきているのかな？と感じた”と言われていて。でも、そういう違和感がある、というのは、きっとその方にしかない独自の感覚で、そういったことを人それぞれ感じるんだと思うんです。だからきっと“一筋縄ではいかないな”って思っているのは、もしかしたらこの楽曲に対してではなくて、自分の内面に向かっているものなのではないかな、と思いますよ。

——今までの森山さんの曲は“あ、そうそう。これが言いたかったの”とか、“こういうふうに言えば、伝わるんだな”とか、そういう気づきが多かったんですけれども、今回はそれこそ“問いかけられている”気がします。

●投げっぱなしですもんね(笑)。そうかもしれない。

——だから『涙』までたどり着くと、“もう、心で聴くしかない！”と思いますね(笑)。

●ああ(笑)。ある種においての、いさぎよさが。

——そうですね。聞き方に甘えていたというか。それこそアーティストの人に寄りかかっていたんじゃないかな、っていうのは今回の3曲で気がつきました。

●うん。でも、一人でもそういうふうに聴いてもらえた人がいるっていうのは、僕はこれでばかりだ、って思いますよ。

——いえいえ(笑)。

●本当に。それで一人でも多くの人にね、伝われば。まだ感性を探る旅、をしていこうって、思って。今回この旅を、ツアーを経て、自分が"表現ってなんだろう?"って、"音楽ってどういうことなんだろう?"ということを紐といていったときに、たぶんこの浮遊感にたどりついたのかもしれないです。だから、よくいう1枚の絵を見るような感覚ですね。それぞれ表情の見え方が違うし、感情の流れ方も違うから、それはもう、"今のてめえのことなんだよ"っていうような。ただ、その絵から感じるノスタルジーだったり、普遍性だったりというのは、たぶんその作り手のそのときの悲しみだったり、憧れから生まれてきているもの。だから作っているときに、みんなのことを試してやれ、なんて絶対に思っていないし、ただ、自分の葛藤の中で、ポンッと生まれたものなんです。作っている、っていう感覚もないまま生まれてきたものだから。ということは、みんなも聴いたときに、出会ったときに、同じ気持ちになるんじゃないかな。

——それは今、ライヴでお客さんに直接渡しているときにも感じますか?

●うん。僕はあまりアンケートを見ないけれど。お手紙を頂戴して読んだりしても、"好き嫌いというような感情ではなくて、もっと奥の奥のほうに語りかけられているような、不思議な曲ですね"というようなことを言われるのを見聞きしたりすると、"あ、間違いじゃないかもしれない"と思うんですよね。ライヴが終わったときに、この曲が好き嫌いで語られていないっていうのは大きいです。

——好き嫌いについては、音楽のジャンルでも"これ、好き。これ嫌い"ってスパンスパンとわけちゃって、なんとも便利に使っている気が、私自身します。

●僕もある。それは商業音楽の定め、性(さが)だと思うんだけれども。でも、それはそれとして。もっと新しい関係づくりをしたいから。もっと人と人を生かし合うような音楽をやりたいって。最近は、そんな話ばっかりしているんですよね。

——このツアーはあと一カ月で終了して、その後『涙』が発売されるんですよね?

●そうですね。ツアーが終わってリリースです。

——パッケージ化されたものが届くと、ライヴを観た人は、また全然違ったものとして感じるかもしれないですね。

●"ライヴのよさを、消さないで欲しいです"といったご要望をいただきますね。たまにあるじゃないですか。シングルになると、ガラっと変わっちゃうっていうのが。でも、このシングルは、ライヴのよさを残しつつ、うまみをちゃんと凝縮しながら、音源としてのメリハリをつけられたんじゃないかな、というふうに思っています。

——ちなみにさきほど『涙』のPVを拝見したんですけれども。モノトーンの世界の中で、裸の森山さんが歌っているという、印象的な映像でした。

●曲を聴いて、この曲が一番伝えられる世界にしてください、と監督さんにはお願いしました。自分たちにはこだわりはなかったので。そうしたら、全裸で歌ってください、といわれて。で、"はい"って言って(笑)。歌いました。

——さっきボルトの話をされていましたけど、PVの森山さんが、アスリートっていう雰囲気にも見えました。

●ライヴは連続的な運動だから、そういう意味では体力勝負ですよね。

——52公演ってすごいですよね。

●それを言ったら、さだまさしさんなんて、年間100公演以上やっていますからね。僕なんて少ない方だと思うんですよ。そのうえで、さださんは休みの間にちゃんとゴルフの予定を入れて。

——えー! すごい体力!!

●ここでライヴを終わったあとは、ここで必ず飲む、っていうのが、何十年、そのサイクルが決まっていますからね。すごいな、と思いますよ。

——去年、森山さんが出演された『情熱大陸SPECIAL LIVE SUMMER TIME BONANZA'08』(葉加瀬太郎プロデュースの野外フェス。2009年は8回目を迎えた)を拝見させていただいたんですけど。小田和正さんも出演されていらっしゃって、そのパフォーマンスと美しい歌声に圧倒されました。

●本当、ステージを走り回っていらして。今年の情熱大陸では、小田さんと一緒にジョイントさせていただいたんですけれども、ちょっと自分のちっぽけさが大いに分かりました(笑)。

——ええ!? どういうことでしょうか?

●"あ! ここか。今、俺が見つめなきゃいけないところは"って。逆にそれを知れて良かったんですけど。自分のライヴって生では観られないじゃないですか。それで、演出している御徒町くんとかから、結構キツいダメ出しをされても、"何を言っているのか、よくわからない。俺は、歌うことで精一杯だ"って思っていて。だけど、小田さんとやって、何をダメ出しされているのかが、すごい、よく分かった。フワフワフワ〜、って自分がこう幽体離脱して、自分で自分の舞台に立っている姿を見られた感覚だったんだけれど。

——うわあ。とても不思議な感覚ですね。

●それはたぶん小田さんが持っている呼吸とか、オーラというのか。すごいとかすごくない、とかじゃなくて、ただそこにあるものとして、小田さんはそこにいるんですよ。だからそういう人と同じステージに対峙したときに、自分が何を守っているのか、とか、なにを気にしながらやっているんだ、っていうのが、すごくよくわかって。今まで言われてきたダメ出しされていることが、それこそ手に取るようにわかった。この夏に小田さんとやれたのは、すごく大きかったです。でも、小田さんとご一緒するのは怖いかも…。

——そうなんですか?

●だって、自分を知ることって怖いから。でも、死ぬ前にもう一度やりたい、とも思う。やっぱりものすごいキャリアと実力を持ってやってきた人だから、舞台の立ち方から違う。あれは勉強になったし、自分のちっぽけさがよくわかった。でも、たぶんそれは1万5千人くらいのイベントで、そういう大きなステージだったっていうのも、もしかしたら大きかったかもしれないですね。大きければ大きいほど、それがよく分かったっていう。



——(笑)。

●なんかもう"僧侶に会った"みたいな感じです。

——大きな経験だったんですね。

●そうですね。本当に……。この経験は先に生かさないと……って思います。

森山直太朗(もりやまなおたろう)
1976年生まれ。東京都出身。2002年メジャーデビュー。

LM.C

限りある人生を彩ってくれるBGMになったり、ことばにできないモヤモヤを代弁してくれたりしますよね

インタビュー＝桂泉晴名

聴いてもらったら、1ミリでも音楽の楽しさというものを感じてもらえるだろうユニットなので

(⇒P41からの続き)

——毎回ビジュアルも自分たちのアイデアで、"こういうイメージでいこう"と決める形でしょうか？

Aiji●そうですね。大体しょうもない話からはじまったり、スタイリストさんを入れて雑談の中で膨らませたりとか、そういうのが多いですけど。結局、全部に自分たちの意思が入っていないと、納得できないですよね。もちろん、人とやるよさもあるからそこはうまく見つつですが。

——コンセプトがはっきりしているから、子どもとかでも理解できるんでしょうね。

Aiji●あと、難解な表現していないから。見た目も、音楽にしても分かりやすいことをしたいので。だから、子どもでも、わかりやすいのかもしれませんね。



——前作『PUNKY ♥ HEART』は明るいロックで、今回はそれと対極なロックですね。

maya●対極なんだけれど、2009年の2枚のシングルとしてはつながっています。

Aiji●マインドが一緒というか、装飾は違うんだけれど、流れている血が一緒というか。そういう気分で作っています。結局、自分たちの芯の部分は変わらないので。

maya●その振り幅が、ぱっと聴いた感じでも出たからよかったと思います。結果『PUNKY ♥ HEART』の、延長線上にある感じになりましたね。タイトルもそんな感じにしちゃったし。

——単語のつなぎが、前作はハートで、今回はクロスになっているんですね。

maya●そうです。そこは単純にひらめきなんですけれど。

——そして、カップリング曲『A Blueberry Night』はホーンが入っているなどして、『GHOST † HEART』とはまたガラリと違いますが。

Aiji●真逆ですね。

——ライヴで、みんなが踊りたくなるような曲調というか。

Aiji●　じゃあ、踊らせていきましょうか(笑)。そうですね。ホーンやストリングスが入っていたり、ビートがはねていたりするので、そういう意味では、楽しい気分になってもらえるような楽曲だとは思います。

——でも、歌詞は失恋の内容で、楽しい感じではないんですよね。

maya●いやいや〜。

Aiji●ある意味、楽しいかもしれないですよ。

maya●人ごとだと楽しいというか(笑)。

Aiji●自分の経験だとしたら、切ないって感じでしょうね。

maya●最初デモ曲を聴いたときに、映画っぽいイメージだったんですよ。それがやっていくうちに、ドラマというか、もうちょっと身近な感じにになってきましたね。

——"Blueberry"には、どんな意味を込めているのでしょうか？

maya●これは、この歌詞を書いているときに観ていた映画がいくつかあって、その一つから影響を受けました。あとBlueberryの甘酸っぱさというか、語感とかがいいなと思って使ったんです。映画の内容はあまり関係なく、色の感じとか雰囲気が好きで。



——曲調は楽しげですけれど、歌っていていかがですか？

maya●個人的には、切なさパーセントをもっと出したかったんですけれど、共同プロデューサーから"もうちょっと普通にやっていいんじゃない？"とアドバイスがあったので、今の形に落ち着いていますね。家で仮歌を録っていたときとかは、もうちょっと切なさ20%増しというか。あまり元気な感じではなかったんですけど。

——確かに曲だけ聴くと、切なさはわからないかもしれないです。歌詞を読んで、初めて切な

LM.C



今年ワールドツアーをやらせていただいて、自分たちもいろいろ変わってきている

いんだとわかりました。

maya●ああ、そのくらいがいいんでしょうね。

Aiji●そのくらいじゃないと、たぶん自分たちが聴いてつらくなっちゃうよね（笑）。歌詞をみなくても悲しい曲で、よくよく歌詞をみたらどん底じゃないか、っていうのだと（笑）。あまりLM.C的にはそういうところを目指していないんで（笑）。

maya●そこは第三者の印象にしましたね。正直、歌の表現として“切なさ”というのは、そんなにやったことがないし、『GHOST†HEART』の対ということで、やってみたいなと思ったんですけれど、曲単体とかぱっと聴いたときの印象はそっちの方がいいという意見があるなら、そうしよう、と思いました。

——そして、今年は、アジア・ヨーロッパ・南米の海外ツアーがありましたけど、いかがでしたか？

maya●外枠は違うんですけれど、結局中心は一緒だな、というのがツアーでまわると分かりますね。たぶん単発でブラジルとか行ったら、ノリもすごいし声も大きいし、日本人とは違うんだな、って思っちゃうかもしれないんですけど。ライヴのあと握手会があって、近くで会うと何も変わらない。LM.Cを応援してくれて、音楽が好きだっていう意味では、本当一緒なんだなと感じましたね。

Aiji●LM.Cは音を楽しむためのロックユニットというか、そういう感じなので伝わりやすいのかもしれません。唯一違うとしたら、日本人というのは、わびさびみたいなものがDNA的にある。だからバラードならちゃんと聴くんですけど、向こうの人はずっと同じテンションですから（笑）。どんなバラードでもノって一緒に歌っちゃう。そこが大きく違うなと思いました。

——自分たちに求められているものは、日本とは違うと思いますか？

maya●最初、ヨーロッパとか海外ツアーとかはまったく想像していなかったんです。自分たちの本当にやりたいことを普通にやっていたら、それが響いたというだけなんで。だから、何を求められているとかは、あまり思いません。それが好きで来てくれているから、今のままで良いんだろうなと。

——チリとかブラジルって、日本からだと地球の裏側ですよね。

Aiji●そう考えると不思議なんですけどね。ライヴをしちゃうと、日本とはなにも変わらないと思いますよ。ただ、元気はもらえる気がします。地球の裏側でこんなに待っている人がいるんだったら、また来ないといけない、と思うというか。そのためにもっとがんばらなきゃいけない気がします。

——それほどインターネットの影響は大きいんですね。

Aiji●ネットによって世界へすべてリアルタイムで情報を発信できるようになったし。もちろん失うものも大きかったけど。ネットがなかったら情報もリアルタイムで伝えられなくて、こうやってライヴを実現できなかったでしょうし、いい効果をもたらしているところもあるな、と感じたりして。いろいろなことが分かった気がします。世界の音楽マーケットの状況とか、実感したし。

——それは、今回実際に行ってみて分かったことでしょうか？

maya●行く前は皆さんと一緒ですよ。もちろん、うちのスタッフとかも、想像外というか。でも行っちゃって、ライヴをはじめてみると、なるほど、と。

Aiji●知らないことだらけだな、って思いますよね。

maya●視野は無条件に相当広がります。

Aiji●そういう意味では今年ワールドツアーをやらせていただいて、自分たちもいろいろ変わってきている気がします。



——ネットといえば、ブログもやっていらっしゃいますよね。

Aiji●ブログに関していうと、昔は雑誌を買わないとミュージシャンの生態なんてわからなかったじゃないですか。スケジュールも、今、何をしているのかもわからない。だから自分の中では、活動の一部を見せるためにやっているだけなんですけれども。“この日にレコーディングしてた曲が、この曲だったんだ”とかわかっ

ライヴ写真はLM.C Club Circuit'09 -CRAZY A GO GO 2-（8月30日、新木場 STUDIO COAST）で撮影されたものです。

人ごとだと楽しいというか（笑）。

たら、聞き手の感動も違うじゃないですか。そういうのがやっぱりいいな、と思うので。自分が書くのは、スケジュールをただ教えているだけなんです。でも、mayaはあまり書かないのでね。あまり生態はうかがい知れないかもしれない（笑）。

maya●興味がないと、できない性格でして（笑）。

Aiji●俺も、LM.Cの活動を少しでも伝えたいと思うから書けるだけであって、そうじゃなかったら、面倒くさいだけですよ（笑）。人って、毎日そんなには変わらないから。そうすると、たいして面白い文章は書けないですよね。やっぱり自分なりの目的がないと。プラスアルファ、今の時代ならではのリアルタイム性を楽しんでもらえたらいいかな、という感じです。

——日本でも、いろいろなフェスに出ていらっしゃいます。

Aiji●マジメに音楽と向き合ってやっていたら、



人ってそれ相応の評価を下してくれるな、と感じました。雑誌とか見ると、"なんか化粧して"みたいなところはあるんでしょうけれど、実際同じ土俵でみせちゃえば、"この人たち本気だな"とか、やっぱりわかってもらえる。だから最近、そういうジャンルレスなイベントに出させてもらうチャンスがあって、より感じるところがありますね。たぶん真面目にやっている人って、どんなジャンルでも同じだと思います。

——今回本誌初登場ということなので、これからLM.Cの音楽を聴こうとしている方にもメッセージをお願いします。

Aiji●ライヴを観てもらうのが一番いいんですけれど、言葉であえていうなら、"すげえいい音楽を胸張ってやっています。"かな。聴いてもらったら、1ミリでも音楽の楽しさというものを感じてもらえるだろうユニットなので、"最近、音楽が楽しくないな"と思っている人にこそ聴いてもらいたい。そんなLM.Cでございます。

——Aijiさん自身が"音楽は楽しまなくては"という思いがあるのでしょうか？

Aiji●そうですね。音楽にまつわることは、伝わる段階では、すべて楽しくなきゃいけない気はしています。制作している段階では苦しいことだらけなんですけれど。ユーザーの手に渡る段階とか、こういう雑誌とか読んでいる世界では、とにかく楽しくないといけない、とは思っていますね。いけないっていうか、自分はそうあるべきというか。今は、そういうふうに音楽と向き合いたい時期なので。

maya●音楽って限りある人生をすごく彩ってくれるBGMになったり、自分のことばにできないモヤモヤした気持ちを代弁してくれたりしますよね。そういうものが、世の中にはいっぱいあるんだ、っていうことは知っておいた方が楽しいんじゃないかな。これをきっかけにLM.Cを知って曲を聴いて、ライヴに来てもらったりすれば、そこが音楽への入り口になると思います。そのあとは、どこへ巣立っていってもらってもかまわないんで。

Aiji●できたら、逃したくないけれど（笑）。

maya●そうっすね。ビジネス的に考えたら、逃したくないんですけれど（笑）。でも、まずはそういう入り口になってくれればいいな。ライヴ未経験っていう子はとくに。両親とか、仲の良い友達や恋人を連れてきてくれたら、あなたの人格を疑われないようなライヴします、というか。偏った感じではなく、キャッチーだと思ってやっているんで。LM.Cの世界を楽しんでもらえたら、と思います。

Aiji●本当、音楽が好きっていう人は、偏らないでアンテナ張っていた方がいいですよね。音楽って人生を元気にするすばらしい手段だし、本当にいいビタミン剤だと思う。

——Aijiさんも、今までに音楽に助けられたといった経験は持っていらっしゃいますか？

Aiji●音楽に助けられた、という経験ではないですが、例えば50しか上がらないテンションが80まで上がるという経験はたくさんしているので。だから、自分たちの音楽がだれかのビタミン剤になってくれたらいいな、とは思ってます。

——今回のツアーはラストが長野だということで。

Aiji●そうですね。今回はあえて、東京はやらないというスタイルで。

maya●いろいろ理由はあるけれど、でも、純粋にやりたいからです。

——長野はお二人の生まれ故郷ですよね。

Aiji●そうです。いつも、ファイナルって東京じゃないですか。"皆さん来てください"といった感じで。そうじゃなくて、目的地を決めて"俺たちはそこに行く。君たちも一緒に行こうね"っていうスタイルですね。青臭いんですけど、みんなで目的地を決めて、そこに同じ時間やリスクをしょっていく、っていう気持ちが大事かなと。そういう思いで、今回ファイナルを長野にしました。

——そこでどんな風景が見られるのか楽しみですね！

Aiji●ただクリスマスなので。みんな彼氏彼女を選んじゃって、お客さん誰もいない、みたいなことにならないようにしないとね（笑）。

maya●カップルチケットを売ればいいんですよ。もし連れてきたら、"なんか悔しいから、千円高くしちゃえ"みたいな。

（一同爆笑）

Aiji●それ逆！　何のサービスにもなってないじゃん！（笑）



■LM.C（エルエムシー）■Aiji(g)、maya(vo)のロック・ユニット。06年デビュー。

今は僕が、想像を巡らせながら、彼の本性を歌詞を通し1枚1枚剥がしてるって感じなんですよね（笑）






RUSHMORE

インタビュー＝長澤智典
写真＝中西由華

(⇒P45からの続き)

――心揺さぶるメロウな音楽性は、RUSHMOREを語るうえでも大切な要素になっているわけですよね。

五十嵐●むしろ、そこは狙ってますね。

――「歌謡曲風なメロディ＋80年代音楽的なエッセンスの融合＝演奏陣はメッチャ得意なスタイル」というのは、演奏を聴いててとても理解できました。もちろん西村さんも、曲世界へ綺麗に溶け込んでいますが、最初に楽曲を聴いたときは、どんな印象だったんですか？

西村●最初は、ただただ「格好いいなぁ」という印象でした。

坂本●デモ音源を聴いたときに、「俺が唄うしかねぇ」と思ったんでしょ？（笑）

西村●そりゃあ、楽曲を聴いた瞬間"強く惹きつけられる"ものがありましたからね。

五十嵐●僕がなぜ西村を起用したかと言うと、その"声質"なんですよ。たとえばの話、"唱力や演奏力"というのは、経験次第でいくらでも上手くなっていく。でも、"本質的に持った歌声、声質"というのは絶対に変えようがないもの。僕がRUSHMOREで表現する音楽性を描きあげるうえで、西村の持つ"倍音を活かせる、丸みを帯びたキーの高い声質"は、まさにピッタリだった。とくにRUSHMOREは歌を聴かせるバンドということで、ミディアム、バラード系ナンバーが軸になっているんだけど、その表情を音へ塗り付けるうえで、彼の声は絶対に必要な絵の具だったんですよ。

――ギター陣も、美しくも印象深い、まさに"様式美な旋律"の数々を、楽曲の上へ寄り添わせてますしね。

五十嵐●僕も含め、みんなハードロックが大好きだからね。でもポップスにこだわっているだけあって、2人とも、そのエッセンスの入れ方が絶妙なんですよ。

若井●ハードロックの持っている様式的な要素は、自然と出ちゃいますね（笑）。胸揺さぶる歌が終わったあとに、間奏で（心揺さぶる）美しいドラマティックなリフを組み込んだり。だけど、そこは遠慮せずに表現していこうと言うか。歌を盛り上げてくうえで、いろんな様式美的なエッセンスは、これからもガンガン出していくと思います。

――むしろ、歌とギターの旋律との心地好い想いの交わし合いが、RUSHMOREの楽曲として、気持ち揺さぶるドラマ性を描き出していますからね。

若井●RUSHMOREの場合、ミディアム、バラード系ナンバーが多いとはいえ、歌だけが売り、というわけじゃ決してないですね。その歌声へさらにドラマティックなスパイスを与えてゆくギターのフレーズだって、大切な要素だし。何よりも楽曲自体が、演奏と歌の相乗効果でドラマチックに展開していきますからね。

五十嵐●このRUSHMORE、美味しい要素をたくさん詰め込んでいけるからこそ、むしろ「歌詞に関しては、わかりやすさ」を心がけています。そのほうが、よりストレートに、聞き手の胸にも響いていきますから。

西村●今は、ほとんどの作詞を五十嵐さんが担当しているんですけど。僕の声質を活かして、歌っててスーッと身体の中へメロディが入っていくのは、もちろん、歌詞に関しても、僕自身が過去の経験と照らし合わせながら歌っていけるように、心を捉え、想い揺さぶる詞を綴ってくれるんです。

五十嵐●歌詞に関しては、西村自身が、なかなか深い経験や体験の素性を僕にさらしてくれないんで（笑）。今は僕が、想像を巡らせながら、彼の本性を、歌詞を通し1枚1枚剥がしてるって感じなんですよね（笑）

西村●剥がされてます（笑）

――現在RUSHMOREは、9月より4ヶ月連続配信という形で毎月音源をリリースし続けてますが。

五十嵐●自分たちの楽曲を、手軽に早く聴いてもらう手段としては、やはり今は配信がベストかなと。それに連続と言っても、毎月1曲で、これをパッケージに置き換えれば、4ヶ月で2枚シングルを出すのと同じ感覚。僕らは、その伝える手法として、まずは配信というスタイルを選んだということな

んです。

若井●もちろん、フルサイズのもとPC/MOBILE両方で配信していますが、「着歌」に関しては、ギターソロバージョンもあるんです。それこそ、"歌終わりからギターソロへ突入し、ギターソロ開けで終わる"というパターンなので、ギターフェチはぜひ聴いてください(笑)

――RUSHMOREの場合ギターソロも、楽曲を彩るうえでは大切な、欠かせない要素になっていますからね。

五十嵐●最近って、間奏ソロの無い楽曲が主流じゃないですか。僕ら世代からすると、それが物足りないんですね。だからこそ、「プレイヤーってこんなにテクニカルで、しかも印象深い味を持っているんだぞ」ということを提示したくってね。だからRUSHMOREの楽曲に関しては、全曲ギター・ソロは長いです(笑)。

坂本●僕が8小節弾いて、望ちゃんが8小節弾いて、最後に2人で一緒に8小節弾いてみたいな(笑)。

若井●楽曲構成として必要だからこそ、印象深い旋律を冒頭や間奏へ加えてくわけじゃないですか。そんな、「3分強のコンパクトに収めないといけない」なんて決まりも音楽にはないわけだし。むしろ、そうやって楽曲を彩る大切な美味しい要素を削るくらいなら、僕らは今の流れへ逆行してでも、「楽曲が本来あるべき姿」を形にし続けていきたいですね。

五十嵐●正直、カラオケで唄う人のことはあまり考えてないです(笑)。

坂本●だって、間奏のギター演奏中に、きっちりドリンク追加を注文出来てしまうくらいの時間があるからね(笑)。

――現在RUSHMOREは、9月に『ever yours』、10月に『特別なんていらない』を配信リリース、11月18日には『KAMITSU』、12



月9日には、クリスマス時期へ向けた楽曲を連続で配信中。それぞれの楽曲の魅力を、ぜひ教えてください。

五十嵐●『ever yours』を第一弾に持ってきたのは、"RUSHMORE メンバー 4人の役割分担や個性を一番明瞭に描きあげた楽曲"になったことからでした。

若井●間奏部分では、五十嵐さんのソロ、メロディアスな坂本[illegible]のソロから、俺のアグレッシブな[illegible]、そして最後に、西村[illegible]の切ない歌声へリレーしていく流れも楽しめますからね。

坂本●ホント、全員の個性が、楽曲の中へしっかりと現れたよね。歌詞の面でも、『ever yours』はもちろん、『特別なんていらない』でも、西村が「日常の中にある男女の恋愛感情の揺れや擦れ違う心模様」を、切ない感情満載で伝えてくれてるからね。だから僕らのギターも、泣きのフレーズ全開になっているんです。

西村●僕は、意外とこう見えて(笑)、恋愛に対しては「わがまま」になってしまうんですよ。だから「好き」と思ってても素直にその言葉を口にできず、『ever yours』や『特別なんていらない』のよう、いつしか心が擦れ違い、取り返しのつかない状態に陥り、一人泣き濡れてしまう。だから、この詞に綴られた人の気持ちが、すっごくわかるんです。

――僕ら日本人の場合、「素直に想いを吐き出す」って、とても苦手なことですからね。

西村●そうなんですよね。だから「想い秘めるあまり、すれ違い」も起きてしまうんですけど。

――西村さんって、その「秘めた感情を活かした歌い方」をしていません？

西村●してますね。とくに『特別なんていらない』には、その傾向が強く出てると思います。

五十嵐●『ever yours』と『特別なんていらない』には、まさに"RUSHMORE らしい表情"を描き出したんですけど。僕ら「バラードばかりを唄うバンド」とは思われたくなかったし。僕ら自身も、「違う表情も表現していきたい」欲求が強いものですから。第三弾となる『KAMITSU』では、疾走感あふれるアップテンポ・ナンバーで攻めています。

若井●冒頭ツインリード・ギターから幕を開ける時点で、かなり派手な展開を見せちゃいますからね(笑)。

五十嵐●歌詞の印象も、前2作とはガラッと変え、"禁断かつロマンあふれる文学的な大人の世界観"を描き出しました。

若井●思いきり欧州寄りの文学的エロな世界です(笑)。

坂本●とても隠微で美しい香り漂うようなね(笑)。

五十嵐●『KAMITSU』は、もともと『花蜜』と書いていたよう、隠微さを想像させゆく言葉も、歌詞の随所に登場しますので、ぜひ想像巡らせてください。

若井●冒頭を派手なツインリードで始めたように、RUSHMOREの持つ一番派手な要素を凝縮させた楽曲でもあるしね。

五十嵐●そして第四弾作で、またもバラード・ナンバーを提示。時期的にもクリスマス・シーズンが近いだけに、季節感を意識した内容に仕上がりました。

――噂によると、年内にはアルバムも店頭に並ぶそうじゃないですか。

西村●楽曲は、どんどん誕生してますし。まだまだ魅せきれてない引き出しがたくさんあるので、それをまずはアルバムという形で提示しようと思ってます。

――なんか、今後の展開が楽しみになってきました。

坂本●僕らギタリストなんで、どうしてもギターの魅力を語ってしまうし。事実、美味しいギターのエッセンスは楽曲ごとたっぷり取り入れてるんですけど。でも、僕らが一番聴いて欲しいと思ってるのは、"西村の歌声"なんですよ。西村でないと唄えない歌詞を満載した楽曲たちを、アルバムを通し届けようと思ってますから。もちろん、ギターソロでも泣いてください(笑)

若井●歌詞の数々に綴られた、"男と女の恋愛に対する心模様"。どの歌にも、男女年齢問わず、誰もが経験したり、抱く想いが綴られています。きっと聴いた人も、自分の経験と照らしあわせていけるよう、RUSHMOREは"誰もが体験していく想い"を歌っている。だからこそ、ぜひ心に残る1曲1曲を、西村の歌声を"想い出への案内人"として据えながら、楽しんでください。もちろん、ギターの魅力も、アルバムには満載してますから(笑)

西村●僕自身、自分の生きざまを歌詞と照らしあわせながら唄いあげているよう、少しでもみなさんの想いと重なりあっていけたら嬉しいなと思ってます。

RUSHMOREの楽曲に関しては、全曲ギター・ソロは長いです(笑)



■RUSHMORE(ラッシュモア)■
元Every Little Thingのリーダー兼プロデューサー五十嵐充を中心に2005年結成。
メンバーは五十嵐 充(Keyboard)、西村 生津琉(Vocal)、若井 望(Guitar)、坂本光久(Guitar)。

THE KIDDIE

ファンの存在って偉大だなと…
聴いてくれる人たちがいるからこそ、
自分たちのやりたいこと、そしてやるべきことも
明確になってくる

インタビュー＝八尋みくり

(⇒P48からの続き)

――カップリングの「NEW　WORLD」は、3年目という節目の年にあたって、新たな世界へ踏み出すといった意味なのかな？

ユウダイ●実はこの曲は、バンドの活動が始まる前に、最初に作った曲なんです。THE KIDDIEってバンドをイメージし易く、エネルギーに溢れた曲なので、「BLACK　SIDE」という片寄った楽曲のカップリングにふさわしいんじゃないかと音源化しました。

――そしてもう一曲の「PANORAMA」は佑聖さんの曲ですね。

佑聖●はい。俺、いつもCDが完成してから初めて歌詞を知るんですけど(笑)、この曲はさすがに上がってきてすぐに見ました。揺紗くん本人も気に入ってるように、いい歌詞だな～と。特に『君と歩きたい』『意味のある期待』のとこだっけ？

揺紗●そう、そこ！語呂サイコー！でしょ(笑)

――過去の恋を思い出して、胸がチクッと痛むような情景が浮かびますね。

揺紗●曲の主人公的には解決した過去なんですよ。でも、街の匂いとか、記憶と似た景色とかに触れた瞬間に、突然過去がバーッと蘇るって体験が誰にでもあると思うんです。それがとてもポップなテーマだなと思って、チャレンジしてみました。

そらお●俺は雨の匂いや冷たいきれいな空気で、昔のこと思い出したりする。

――何か思い出があるんですね。

そらお●えー…、はい(笑)。

――第3弾の「ポプラ」ですが、非常にメジャー感があるというか、すごく耳に残る印象的なメロディですね。

揺紗●ありがとうございます。この曲では、THE KIDDIEとして活動してきた中で、ファンの存在って偉大だなと感じたことを表現しました。聴いてくれる人たちがいるからこそ、自分たちのやりたいこと、そしてやるべきことも明確になってくるし、方向性にも影響すると思うんです。俺たち5人、完全にひとつのことをやっているわけじゃないけれど、バンドとして固まるのも聴いてくれる人の存在が大きいんだなと、改めて気づいたんです。

――ひとつの区切りのようなものを感じますね？

ユウダイ●このシングル3作で持てるものを放出して、一度空っぽになるのもいいんじゃな



衣装協力＝ BLACK PEACE NOW

THE KIDDIE





いかなと。一旦リセットして、次に進むという意味では区切りかもしれないですね。

――ちょっと立ち止まって、来た道を振り返るような。

揺紗●まさにそんな感じです。

――浮遊感のある音が揺紗さんのやわらかな声によく合った、気持ちのいいバラードに仕上がっていますね。

佑聖●3か月連続リリースの中でもメリハリをつけたくて、ああいうフワフワとした音色にこだわりました。俺はシンプルなバッキングに徹していて、淳くんが上物を弾いていますが、話し合ったわけじゃなく自然にそうなったよね。

淳●うん。このくらいのテンポの曲って弾いていて感情を込めやすいんです。シンプルなフレーズだけど、一音一音に気を配って演奏しました。

そらお●ベースはイントロのフレーズを指で弾いたり、曲の持つニュアンスを生かすために細かいところに気をつけました。

――歌詞に出てくるポプラの種ってどんなの？

揺紗●綿毛です。タンポポよりももっと綿毛。

――へえ！見たことあるんですか？

揺紗●うん、Wikiで。

ユウダイ●Wikiかよ！(爆笑)

揺紗●曲を聴いたときに何かふわふわしたものを連想して、確かポプラの種って…と思い出して見たんです。そしたらめっちゃ綿毛で、これでいこうと。

――そうなんですね。揺紗さんのもつ雰囲気によく合ってます。

――ところで「BLACK SIDE」にちなんで、メンバーの「BLACK SIDE」があったら教えてください。

揺紗●うーん？みんなボーっとしてるからなあ。ないかな？

ユウダイ●ギャップってことでいいんじゃない？

揺紗●なら、佑聖くんは酔うとめっちゃからんできます！やたらと肩組んできて、ほおずりがすごい！(笑)

佑聖●揺紗くんはチューしてきますよ。

――じゃあ二人でいちゃいちゃしていればいいんじゃ…(笑)。

佑聖●酔うと隣に誰かいないとダメなタイプなんです。淳さんはこう見えても可愛いものが好きなんですよ。パソコンのデスクトップがスヌーピーだったり。

ユウダイ●ああー。そこには触れないようにしてたのに…。

――犬好きなんですか？

淳●ペンギンが好きです。見てて癒されるんですよね。この前も一人で動物園に行ってきました。

揺紗●一人でペンギン見に行くなよー。明日







死んじゃうみたいじゃん！
――みんな誘って行ってくださいよ(笑)。ユウダイさんはどうですか？
淳●この人、酔っぱらうと走って逃げるんです。
ユウダイ●それ、2回だけだから！俺の芸風じゃないし。ていうか、ギャップでもないし。
――なぜ逃げる？(笑)
ユウダイ●なんでだろう？覚えてないですね。飲み過ぎ？でも、そらおくんは酔ったメンバーを送って行ったり、こう見えて面倒見いいんです。
そらお●佑聖くんと淳くんは心配なんです。ホームで寝てたとか聞くし。
淳●帰りの山手線で寝たままグルグル回ってたこともあるよ。
そらお●ね、心配でしょ？ユウダイくんは走ってでも帰れるからいいんだけとね。
ユウダイ●俺には冷たいよね。差別？
――あはは。揺紗さんのギャップは？
そらお●うさぎが好きとか可愛いイメージがあるけど、意外に仏像好きだったりするよね。なんだっけ？般若？
揺紗●般若じゃないよ！阿弥陀如来像。
――それは…意外です(笑)。
揺紗●仏画ってきれいじゃないですか。色づかいとか。般若心経も当たり前のことが当たり前に書いてあって、読むと面白いんですよ。
――曲作りに反映されたりとか？
揺紗●強いメッセージを押しつけがましくなく伝えるのに、参考になるかもしれないですね。鬱陶しくない言い方ってどんなんだろうと思ったときに、読むといいかも。
――では最後に、連続リリースと12月4日赤坂BLITZでのワンマンライブに向けて、ひと言ずつお願いします。
ユウダイ●1枚1枚にバンドとしての強い思いがあるので、ぜひ3枚全部聞いてください。3枚聞くとTHE　KIDDIEがわかります。そして聞くとライブが見たくなると思うので、ぜひ会場に足を運んでください。
佑聖●そう！1枚でイメージを固定させず、3枚ワンセットで聴いて欲しい。
淳●9曲すべてに自信があるので、まずは視聴でもいいから聴いて欲しい。少しでも引っ掛かるものがあればライブに来てください。きっと満足させてみせます！
そらお●ライブはかけあいとか、全員で参加できるものにするから、楽しめますよ。
揺紗●3枚聴くことで、これから俺たちがやりたいこともわかってもらえると思う。新曲が9曲も増えることで、今までとは違ったライブでの見せ方もできるから、是非ワンマンライブに遊びに来てください。

■THE KIDDIE(キディ)■Vocal:揺紗(ユサ)、Guitar:佑聖(ユウセイ)、Guitar:淳(ジュン)、Bass:そらお(ソラオ)、Drums:ユウダイ。2007年結成。

Impression & Review

GACKT



彼は、いつもスタジオに入っていると、共に作品を残すという想いでそこに立ち合う私たち敬意を払い、"よろしくね"と柔らかい笑顔を向けて握手をする。この日もそうだった。ファンの人からしたら、憧れの人との"握手"という行為を、純粋に羨ましく思われるかもしれないが、私はいつもこの握手があたたかくもあり、プレッシャーなのだ。もちろん、いつも全身全霊でインタビューをしているつもりなのだが、この"優しい握手"には何故か緊張が走る。"よろしく頼むね"と、忙しい彼が、私たちに委ねてくれてる貴重な時間。それを無駄には出来ないという、とてつもないプレッシャーに襲われるのだ。彼が真剣であるからこそ、その想いが伝染してくるのだ。彼の周りのスタッフには、彼と同じ気遣いを感じる。彼がいつも、そう接しているからこそ、彼と同じ臭いや温度を感じるようになっていったのだろう。それもあって、毎回、彼の現場ではとても気持ち良く仕事をさせてもらっている。おごる事なく、人に優しく、あたたかく、自分には厳しくストイック。共にモノを作る者には厳しくも、深い理解を示す。生半可じゃ、GACKTという人には付いていけない。それは、ファンも同じ。生半可な気持ちじゃ、この人のファンは勤まらない。この日、改めてそう思った。GACKTとGACKTに出逢った人は、本当に一生懸命生きている人たちだと。この日のインタビューが、多くの人の心に、いつまでも残ってくれますように…。撮影とインタビューが終わり、彼がスタジオを出て行くとき、"ありがとう"と言って再びする握手が、"もっとがんばれよ"の握手じゃなく、"ありがとう。今日も最高だったよ!"の握手に感じられるように。妥協することなく、強く生きれたら。今、本当にそう思う…。この日は特に、日々、彼が話してくれる"常に、今死んでも後悔しないっていう生き方をしていたいんだ"という言葉が胸に染みた。同じ、と言ってはおこがましいが、表現する形が違えど、同じモノを作り出していく人間として、この先も真剣に、目をそらさず、真っ直ぐに生きていけるように、努力していきたいと思う。この想い。どうか届きますように。

武市尚子

DVD
「GACKT VISUALIVE ARENA TOUR 2009 REQUIEM ET REMINISCENCE II FINAL ～鎮魂と再生～」11.18 on sale



3800円(tax in)

CD
「雪月花」「斬～ZAN～」
12.9 on sale



BOOK
「VISUALIVE 2009 DOCUMENTARY BOOK GACKT REQUIEM ET REMINISCENCE II ～鎮魂と再生～」Now on sale



7000円(tax in)

UVERworld

この日の取材に与えられたのは、1時間。挨拶や簡単な説明などの時間を加えたら、取材時間は最大でも55分がいいところ。事実、この日の取材は55分を多少過ぎたところで、その後に何本も取材が控えていたことからストップ。一応3曲への想いをひと通り聴いたとはいえ、もっと会話を繰り広げたかったというのが、正直な気持ち。それくらい5人とも、しっかり膝付き合わせ、想いを吐き出してくれたというわけだ。相変わらず、熱い連中だぜっ!!

長澤智典



Single
「哀しみはきっと」
Now on sale



初回限定盤:1529円(tax in)



通常盤:1223円(tax in)

森山直太朗

森山直太朗さんのニューシングル『涙』についてのインタビュー。"表現者としてよりどころのない作品を聴き手にどう伝えていくか"という森山さんのお話から、『涙』という楽曲のハードルの高さを理解しました。そういう挑戦を果敢に続けていくところが森山さんらしいし、聴いている側としても"自分も成長していかなきゃ"という意識になります。しかし、音楽に対してはとてもストイックな一方、「普段はボサッーとしていますよ」なんていうギャップも素敵な森山さん。今回がっつりインタビューさせていただいて、ますますその人間的なところに共感しました。自分の弱点を見つめるのはしんどいことだけど、そこは避けて通れないし、やっぱり一歩踏み出さないと始まらないんですよね。……と、課題降り積もるわが身についても、振り返ってしまいました。

桂泉晴名



Album「涙」Now on sale



初回盤(CD+DVD):1500円(tax in)



CD:1200円(tax in)

LM.C



意外にも『OUT of MUSIC』初登場のLM.C。ポニーキャニオンご担当の星さんからは「すごく楽しい2人なんですよ」とお話は伺っていたのですが、実際にAijiさん、mayaさんの会話は絶妙なコンビネーション。どんどん話が広がっていって、いつの間にか大爆笑に発展していってしまいます。そんな明るいお二人は、音楽に対する愛情もとても深い。「音楽が好きな人は、偏らないでアンテナを張っておいた方がいい」ということばに、とても重みを感じました。彼らのニューシングル『GHOST†HEART』はミステリアスな雰囲気で、今までのLM.Cとは少し違った一面を見せてくれています。

桂泉晴名

Single『GHOST†HEART』11.4 on sale



初回盤[CD+DVD]
1575円(tax in)



通常盤[CD only]
1050円(tax in)



通常盤(初回生産仕様)
[CD+SPECIAL BOOK+GOODS]
1575円(tax in)

RUSHMORE

と[illegible]あい[illegible]な取材だった…なんて書くと、在り来りになって[illegible]まうが。通常、経験者がリーダーとなり、プロとしての経験浅いメンバーを牽引していく場合[illegible]リーダーが[illegible]の中心となり、他の[illegible]バーは言葉を控えてしまうものだが。このバンドに関しては、違ってました（笑）。原稿では、五十嵐さんの言葉を中心に書いてはいますが、インタヴュー中は、とにかく坂本さんと若井さんが、しゃべりまくるんです。その軽妙なトークぶり、今度はぜひ活かしたいですね。まぁ西村さんは、一番年下ということもあるのか、多少遠慮ぎみでしたけど。でも五十嵐さんも言ってましたが、「彼は草食系な振りしてるだけで…」と言うことですから、その裏側の素顔も、ぜひ暴かせてください（笑） 長澤智典





「ever yours」
配信中



「特別なんていらない」
配信中



「KAMITSU」
11.18配信予定



「Christmas Tears」
12.9配信予定

レコ直
※各曲着うたフルは420円

THE KIDDIE



3か月連続リリースされる3枚のシングル、計9曲を聴いて、ああ、引き出しの多いバンドだなあとつくづく感じさせられました。ヴィジュアル系のルックスに、爽やかで明るくてキャッチーなサウンド。まずそこで軽く意表をつかれたのに、新曲にはパンクあり、デジタル同期モノありで、またもや裏切られたような気分。もちろん、いい意味で。ユウダイさんが語ってくれたように、3年間で作り上げてきたものをここで一旦放出して、アルバム制作を含む次のステップに進みたいというTHE KIDDIEには、きっとまだまだ隠し球がたくさんあるんだろうな。楽しみです。余談ですが、ツアーの移動中に、5人でドラクエ9をやりたおしたそうです。2週間でクリアしたとか。運のいい人はどこかで彼らとすれ違い通信してるかも！？

八尋みくり

Single「BLACK SIDE」
Now on sale
初回盤(CD+DVD)：1890円(tax in)



通常盤(CD)：1575円(tax in)



SOPHIA
LIVE 2009 0919 日比谷野外大音楽堂

個人的にすごく思い出深いSOPHIAのライヴは、彼らにとって初の大規模な野外コンサート、「LIVE1999"獅子に翼"」でした。森のような会場で、さわやかな夏の夜風に吹かれて観たステージ。最後に打ち上げられた花火。それを感慨深く見上げるメンバーの顔……。いまだにそのときの光景が目に焼きついています。あれからなんと、10年！ SOPHIA の温かさは変わらない。でも5人の魅力はずっと、ずーっと幅広く深くなっている。今回のライヴを観て、それらのことをしっかりと感じ取りました。こうやって、一緒に年を重ねていけるのは本当に幸せなことですよね。また来年どんなライヴを見せてくれるのか、待ち遠しいです。 桂泉晴名



w-inds.

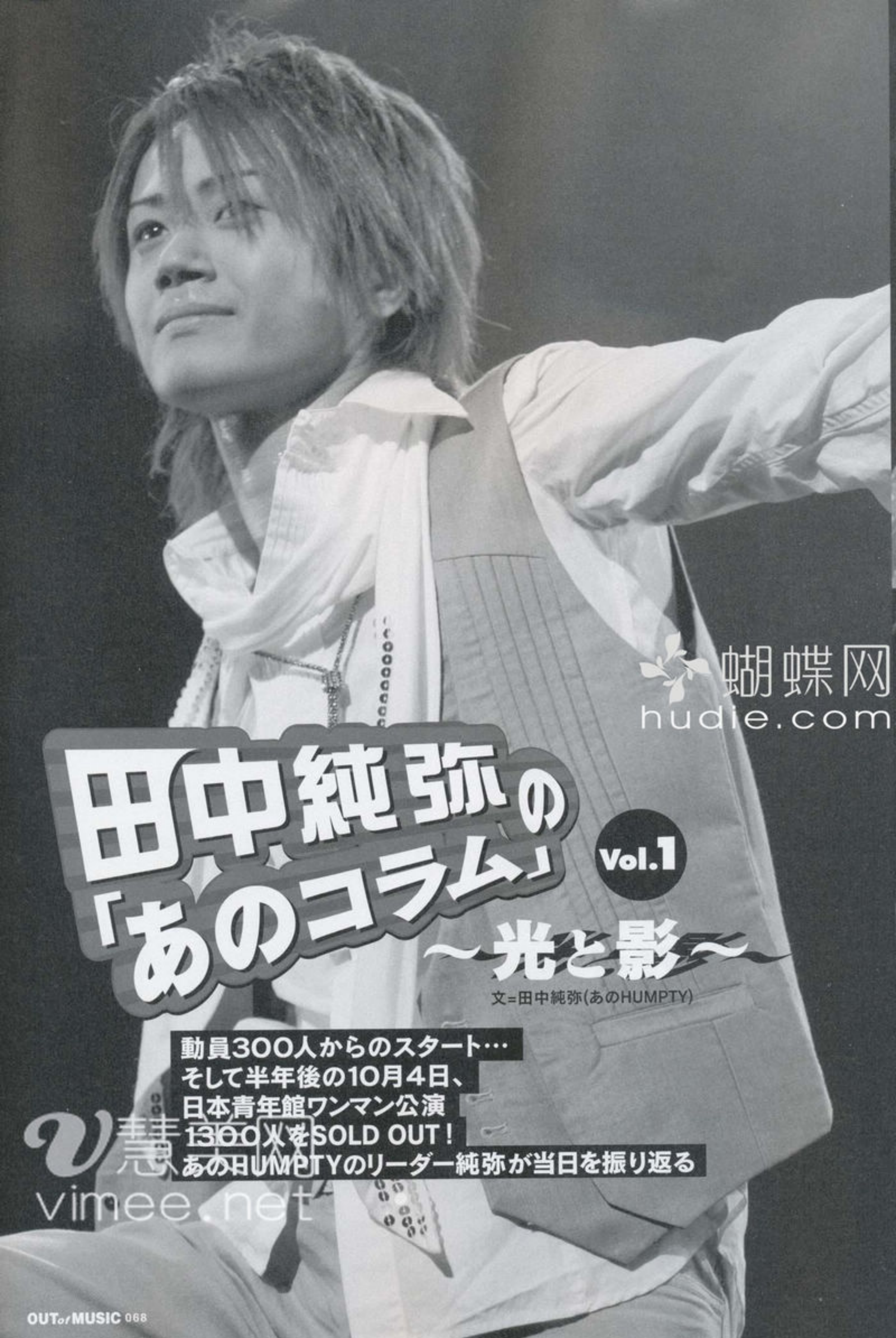
次の仕事を控え、ビシッとしたスーツ姿で登場した3人。皆さんとてもキマっていて、なんだかセレブ感？漂うインタビュー現場。龍一さんは、ただいまサーフィンにハマリ中ということで、取材前には吉田編集長とボードの話などで盛り上がっていました。しかし、普段は言われる立場onlyだと思われる吉田さんが、「だいぶ焼けたんじゃない？」と龍一さんに言っている様子に、妙な違和感が……（笑）。インタビューでは、時おり冗談は混ぜながらも、自分たちの進む方向性についてまっすぐ語る彼ら。毎回、とても刺激を受けます。新曲『New World』は最初からキター！と思うくらいかっこいい。たとえダンスを踊れなくても、自然とリズムにのりたくなってしまう、まさにw-inds.のNew Worldを体感できる曲です。

桂泉晴名





Single「New World/Truth～最後の真実～」
12.9 on sale
初回生産限定盤A：1575円(tax in)
初回生産限定盤B：1575円(tax in)
通常盤：1260円(tax in)



田中純弥の「あのコラム」Vol.1 〜光と影〜

文=田中純弥(あのHUMPTY)

**動員300人からのスタート…
そして半年後の10月4日、
日本青年館ワンマン公演
1300人をSOLD OUT！
あのHUMPTYのリーダー純弥が当日を振り返る**









どうも初めまして。あのHUMPTYというバンドのボーカル＆リーダーをやってる田中純弥です。今回から毎号コラムを書かせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いします。

今回は第一回ということで、まず話したいのが、10月4日に行われた、あのHUMPTYの日本青年館ワンマン LIVE！ファンの皆のおかげでSOLD OUTし、公演も大成功したこと

半年前に今年の目標と決めた日本青年館ワンマンLIVE。当時動員300人の僕らにとって日本青年館1300人はまだまだ 大きな会場で、その高い壁を皆でどう乗り越えるか・・・そんな話でメンバーと何度もぶつかりあった

ただ、会場が広いことや、埋まる埋まらないことよりも「覚悟を決めて皆でひとつの目標に向かっていくこと」「そこに辿り着くまでに何が出来るか、何をしてきたか」が本当は大切なんだということに改めて気づけたんだ。

そして当日、1300人満員に集まったその会場には笑顔と涙、温かな光がいっぱい溢れていました。

うまく言えないけど・・・、心から素直に出てくる言葉は「本当にありがとう。。。」そんなとってもシンプルな言葉だった。

またここから新しいスタート．．．僕らには守っていかなくちゃいけない、一緒に歩いていこうと約束したファンの皆や仲間がいるから絶対にあきらめちゃいけないことがある・・・そんな勇気や希望に似た光を皆からもらえた素敵なLIVEでした。

幼い頃から色んな舞台やステージに立ちタレントやバンド、暴走族。。。そんな"光と影"をたくさん見てきた気がする・・・こんな僕が書けることがあるならば・・・見てきた世界をありのまま次号から少しずつ書いていきたいと思う。

最後までコラムを読んでくれてどうもありがとう。
これからよろしく!!



田中純弥(たなかじゅんや)
Rock Band「あのHUMPTY」のボーカリスト＆リーダーとして活躍中。
※「あのHUMPTY」：純弥（Vocal）、純一（Guitar）、大輔（Guitar）、貴志（Bass）、弘嗣（Drums）、参太(裸)。
●あのHUMPTYオフィシャルブログ
http://ameblo.jp/ano-humpty



【あの】1stアルバムを作ってみた【HUMPTY】
特典DVD：飲み過ぎんなよ
〜Yaaaahババババイ〜
ダンス教則ビデオ＋ビデオクリップ
¥3,500(税込)
※詳しくはオフィシャルホームページまで
http://www.anohumpty.com





エネルギーカウンセラーの
佐藤界飛の
ナ～ダ音を求めて

ナーダ音とは…
魂が奏でる音の事です。
身体浄化が進と体内から聞こえて来ると言われています
ヨガ等でも「ナーダ瞑想」などありますよ。
アーティストさんの数々の作品は
素敵なナーダのかけらなんでしょうね！

文＝エネルギーカウンセラー・佐藤界飛



なぜ人は音楽を聞くと エネルギーをもらえるのか？

初めて、エネルギーカウンセラーの佐藤界飛です。

音楽誌と言うからには音楽とスピリチュアル的な内容など含めて楽しく書ければと思ってますので皆様宜しくお願いします～！

簡単な自己紹介ですが、私も音楽は大好きでして、様々なジャンルを聞きます。じつは吹奏楽を7年位はしていましたので、楽器と楽譜を見る位は少しはできます…本当に少しかじった程度ですが(笑)。

音楽に興味が出たきっかけは母親の影響でしょう。小さい頃から母親と良くテレビを見ては歌ってたらしいです。そんな母親は若い時、演歌歌手でデビュー迄話しが出ていたみたいですが何を迷ったか私の父親と結婚しちゃったんですよね(笑)。結果デビューは無し…でも歌は好きだった母親は、歌番組やラジオ、カセットテープ等で歌を聴いていたので私も影響されたみたいです。

私の小さい頃はアイドル全盛期、中高校時代はバンドブーム。大学になるとglobeや安室(奈美恵)ちゃん等々それぞれの時代に思い出の曲が一杯あります。私はB'z、X JAPAN、SOPHIA、ブルーハーツ、ユニコーン、リンドバーグなど良く聴いていました。今はBUMP OF CHICKENが一番好きかな～。

皆様も思い出の曲有りますよね？

人は音楽からエネルギーを貰って活力にする事ができますもんね！だから音楽大好きです！

と…そろそろ本題に入りますね！
今回は初めてなので音とエネルギーについて話しましょう！

なぜ人は音楽を聞くとエネルギーをもらえるのか？

それは…

人の体にチャクラと言うエネルギーの流れを司るものがあります(アニメやらテレビ番組等で聞いた事があるかもしれませんね)。ほとんどの人には大きなチャクラが7つあり、その各チャクラがそれぞれ反応する色と音があるのです。

そのために音を聞くとチャクラが活性化されエネルギー作られ、エネルギーが流れる仕組みになっているのです。音のバイブレーションがチャクラに影響を与えるのです。

私が自分で簡単な音楽でヒーリングをする時は…

元気が欲しがったら「ベースバリバリ」の曲、仕事に集中したい時は「中音域の幅のあるボーカル主体」の曲、脳を休ませたい時は「高い音域の滑らかなスローテンポの旋律の曲」を聴きます。



コンディションにあった曲をチョイスして楽しく音楽を聴く!これぞ楽しい音楽セラピーですね!

「それじゃあ!チャクラって何処にあるの!わかんない!」
と…突っ込まれ無いようにチャクラの場所と司る音を書きますね。

各部位の調子が悪いとき司る音を聴いてみるのもいかがでしょうか？自然治癒力が上がると思います。

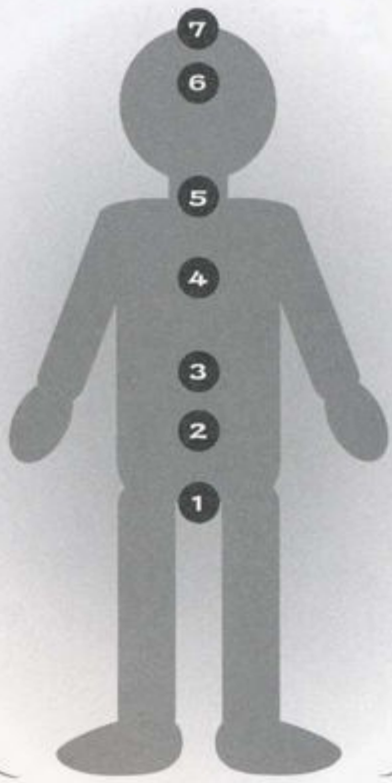
各チャクラの場所と司る音
1のチャクラ→えいんに有ります。肛門と性器の間です。司る音はミの音
2のチャクラ→おへその下の。良くタンデンと言われる場所。司る音はファです。
3のチャクラ→胃の所。司る音はソ。
4のチャクラ→胸。司る音はラ
5のチャクラ→喉。司る音はシ
6のチャクラ→額。司る音はド
7のチャクラ→頭のてっぺん。司る音はレ

7つのチャクラの場所と司る音はわかりましたか？覚えておいて下さいね!

次回はチャクラを活性して開運音楽セラピーなんてお話しいたしましょうか？

各チャクラの場所と司る音

1のチャクラ	えいんに有ります。肛門と性器の間です。司る音はミの音
2のチャクラ	おへその下の。良くタンデンと言われる場所。司る音はファです。
3のチャクラ	胃の所。司る音はソ。
4のチャクラ	胸。司る音はラ
5のチャクラ	喉。司る音はシ
6のチャクラ	額。司る音はド
7のチャクラ	頭のてっぺん。司る音はレ





「なぜかどんどん幸せになれる
恋愛のスピリチュアルルール」
佐藤界飛・著/幻冬舎
480円(本体価格 457円)

■佐藤　界飛(サトウ　カイヒ)■
1974年秋田県生まれ。エネルギー・カウンセラー。日頃から多数のカウンセリングや鑑定、気功の指導などを通して、絶大な信頼を得ている。
著書に「なぜかどんどん幸せになれる　恋愛のスピリチュアルルール　」(幻冬舎刊)がある。
オフィシャルサイト　→　http://www.satokaihi.com

~現代詩の実験~

『ボクの想いはシャボン玉』

言葉にしても　消え逝（ゆ）くなら
シャボン玉に　想いをこめて

原詩・野口雨情

ボクの想い
飛んだ
屋根まで
飛んだ
屋根まで
飛んで
壊れて
消えた…。

ボクの想い
消えた
飛ばずに
消えた
生まれて
すぐに
壊れて
消えた…。



葉山愛次の連載詩篇20

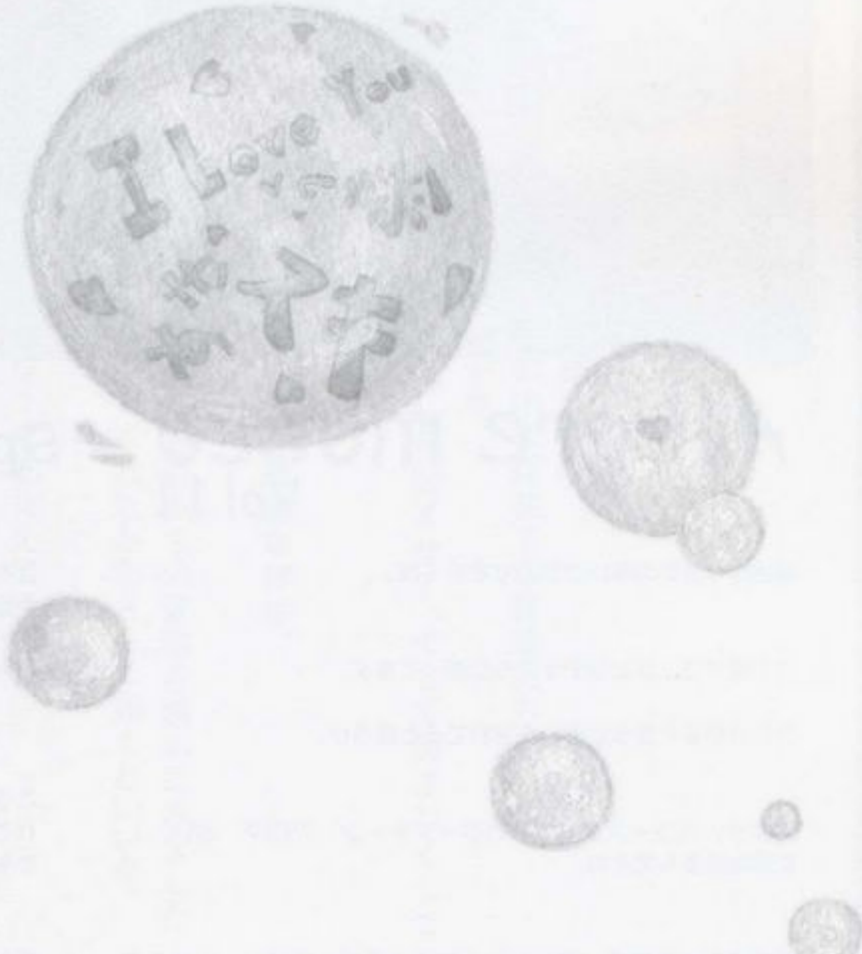
●構成＝生野歩太　●イラスト＝藤本勇也

〜とても、超、ヤバいためになるコラム〜

若者言葉に眉をひそめる大人が多いですが、
言葉も生き物、時代とともに変化していくものです。

例えば「とても」。
今では「非常に、たいへん」という意味で使われて
いますが、明治時代まではそのような使い方はされ
ていませんでした。
本来の用法は今でも使われています。
「あの人にはとてもかなわない」
と否定的に使うのが正しい使い方なんです。
それが、「とてもかなわないすごい人」
と「すごい」と云う肯定的意味とともに使われる
ようになりました。

この「とても」という言葉にも寿命が来たようです。
ちょっと前までは「超＝チョー」にとって代わられ、
今では「ヤバイ」になってしまいました。
本来は「危険な、あぶない」を意味する「やばい」。
大正時代の人が、
「とても素晴らしい」
と書くのを見て、明治時代の人は嘆かわしいと感じ、
昭和中期・平成時代の人が、
「チョーかわいい」
と言っているのを昭和初期の人間は腹立たしく思い、
現代の若者が、
「この新曲、ヤバくね」
と若者が言っているのに対して大人がムカつく。
言葉はまさに生き物。
時代は繰り返され、言葉の意味も変化するのです。

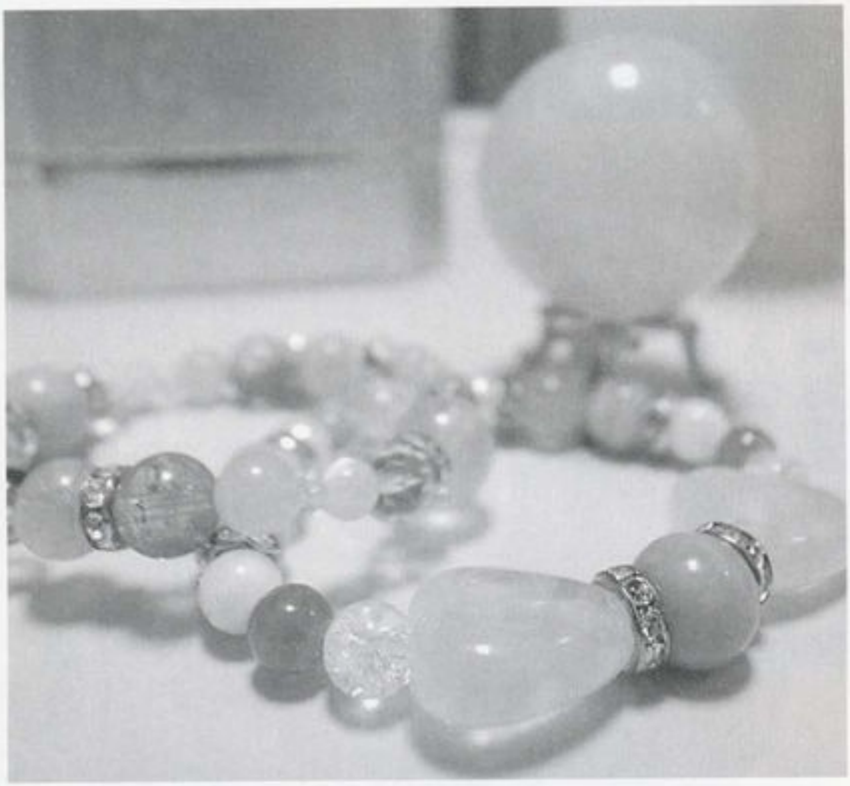


風、風
吹くな
ボクの想い
飛ばそ

風、風
吹いても
ボクの想い
飛ばそ



■はやまあいじ■詩人、作詩家、俳優、モデル、ジュノンボーイ



All are moeco "Spiritual" Vol.11

毎回取り留めのないコラムですが（笑）。

今の萌子は、スピリチュアルに凝ってます。

わかりやすく言うと癒しを求めてると言うか。

前より、パワースポットやパワーストーン、アロマ、占い....
に興味あるんだよね。

男の子なんか特に、信じない人にとっては、偏見だってあるか
もしれないけど、病は気からって言うじゃない？☆（笑）

人と人との繋がりを前より喜べるようになったのは、
スピリチュアルのおかげなんだよ。

占いは、カウンセリングみたいなもの。

例えば、ここをもっとこうしたい！と思った時に、
よりどうしたら良いか教えてもらう道標だったり、
背中を押してもらう力だったり。

何か情報を仕入れたとしても、動くのは自分の力、
自分の勇気なんだもん!!

たかがパワーストーンetc...かもしれないけど、
心と体は繋がってるから、
気持ちが安定してると知らず知らず笑顔になるし
そう言う意味でも運気UP！だよね（^O^）

なので最近は風水やオーラソーマ（カラーテラピー）
手相の本とかも読んじゃってる自分がいます。
（※なんか文字にすると怪しい自分....（笑）
全然怪しくないよぉ～）

こうなるとか、ああなるとか、もちろんたまには嫌なこと言わ
れて気にしたりしちゃうけど、
でも基本は良いことだけを信じてる勝手な自分です。

でもきっとそれが良いと思います。

精神がクリアになって行く自分に気が付くので
特にアロマとか本当オススメですよ！

自分の中に知らないうちに嫌な事は溜まっていったりするので
心掛けてみてね！

text:moeco

■プロフィール：松下萌子 ／ 歌手・女優
・2001年エイベックスから歌手デビュー
・ドラマ「安宅家の人々」レギュラー出演（池田マリ役）
その他、舞台、ドラマなどでも活躍中。
オフィシャルブログ http://moecopage.seesaa.net/

ちかごろ音ごころ

文＝和希沙也

ドキドキ。
ようやく児童小説が完成しまして胸がいっぱいな和希です
児童小説を書くにあたり
いろんな本や映画、そして音楽を聞きました
とても参考になり
そして刺激になりました
本
映画
音楽
その中に存在する言葉たち
いつも
わたしを悩ませて、そして勇ましくしてくれます
とても不思議な存在。
作品にも心からの言葉を積めこみました。
読んでくれたみなさんに届くといいな。
パワーをあたえてくれた
すべての作品に感謝
秋の紅葉に目を奪われるころ、発売です。
んー
ドキドキ。



『占い×探偵』
著者:和希沙也と占い探偵団
1,260円(税込)



■和希沙也(カズキサヤ)■
1983年7月23日生まれ 滋賀県出身。今秋には学研よりミステリー小説を出版予定。現在はテレビ番組のほか、文筆家としても活動している。
ブログ → http://ameblo.jp/sayakazuki/

■インフォメーション■
学研教育出版より「占い×探偵」発売。和希沙也が早稲田大学ミステリーサークルの協力のもと執筆した自身初の児童向けミステリー小説。挿絵(キャラクターデザイン)は、月刊少年ガンガン(スクウェア・エニックス)にて『紅心王子(くれないおうじ)』を連載中の人気まんが家、桑原草太が書き下ろしています。東野圭吾さん、宮部みゆきさんなどの作品に感銘を受け、自ら執筆することを決意。

《雑誌掲載》
●月刊誌「第三文明」対談連載
「和希沙也の今日もいい出会い」スタート!!
6/1(月)発売 「第三文明」7月号
第1回目ゲスト 武田双雲さん(書道家)
●6月23日(火)「Ray」8月号発売(主婦の友社)

《レギュラー番組》
●毎[illegible]曜日19時～19時54分 テレビ東京「ペット大集合!ポチたま」

《広告》
●[illegible]イメージキャラクター
[illegible]ポスターイメージキャラクター

バックナンバー紹介

絶賛発売中!

Back Number



特別付録
Acid Black Cherry
ポスター付き!

表紙・巻頭特集20P!
10,000字インタビュー

Acid Black Cherry

注目のアーティストの「現在」がよくわかる、本誌ならではの詳解ロングインタビュー

東京ドーム10,000字レポ
東方神起

GACKT

w-inds.

加藤和樹

Out Of Music Vol.5 絶賛発売中!

税込定価880円

バックナンバーご購入方法 全国の書店、書籍お取扱の楽器店・CDショップなどでお買い求めいただけます。店頭に無い場合は小売店にお取寄せをお申し出ください。

インターネット・携帯でご購入が出来ます http://www.shinko-music.co.jp 〈￥3,000以上送料・手数料無料!〉

株式会社シンコーミュージック・エンタテイメント 営業部／通販係 TEL：03-3295-4191（電話でのご注文はできません）

携帯でも買えます!

ポスター付き!
表紙・巻頭20P特集!

GACKT

注目のアーティスト・ロングインタビュー
abingdon boys school・INORAN × OLIVIA対談
w-inds・つるの剛士・ナイトメア
Metis・阿部真央

ライヴ密着レポート
UVERworld AwakEVE TOUR'09
the GazettE LIVE09 [7-SEVEN-]

読者の反響

"人の背中を押すことが自分の存在理由"というGACKTさんの言葉が印象的でした。背中をおされ続けてもらっている身としては、いつも与えてもらうだけの感覚でしたが、それがGACKTさんの存在を肯定することになるのがなんだか不思議でした。(神奈川県 MN)

GACKTさんが大好きなので、今回この雑誌買いました。最近、悩みが多くつらい日々が続いていた私にとって今回のGACKTさんの言葉には涙が出ました。またひとつ宝が増えた気持ちです。(神奈川県 OT)

GACKTさんの大ファンです。ロングインタビューめちゃくちゃ良かったです。GACKTさんの言葉は本当に大きいです。途中泣いてしまいました。私もGACKTさんのように生きたいです。(福岡県 IA)

つるの剛士さんの記事がとってもよかったです。初めてOut Of Musicを買いましたが、他の雑誌と構成が違い、楽しめました。(愛知県 HY)

私はGACKTさんの大ファンなので、10,000字インタビューがすごくうれしかったです。私もよく今まで友達だった子がクラスが変わってから悪口を影で言ってたり、中学に来てからすごくみんな変わってしまったように思えたんだけど、その場の状況で流されてるだけなんだなって思えるようになったんです。それはGACKTさんの言葉で"考え方を変えてみる"。すごく勇気づけられました。そして明日からも、GACKTさんが押してくれた背中で一歩、小さくてもいいから前に出ようって、そんな気持ちになれました。本当にこのインタビューで勇気づけられたので、とってもよかったです。(長野県 TK)

GACKTさまが表紙で、めちゃくちゃキレイで買いました。今回GACKTさまが表紙の雑誌がたくさんかりましたが、Out Of Musicがいちばん輝いていましたよ!たくさんの中にもいろんな表情のGACKTさまがいて最高でした。表紙になっているGACKTさんの写真が一番好き。なんかすごく気になったのは、葉山愛次さんの詩。一年くらい前の私の気持ちにすごくダブルんですよ!(東京都 IH)

GACKTさんの表紙・巻頭、さらにポスターまでありがとうございました!久しぶりに雑誌を読んでボロボロに泣きました。(静岡県 TS)

似たような雑誌(GACKTが出ている)をよく買いますが、今回のインタビューが一番良かった。一歩踏み込んでいる質問が多くて、読み応えがありました。(北海道 SY)

他の音楽雑誌と違って、リリース作品のプロモーションのためだけのインタビューではなくてアーティストの内側がよくわかる記事が多く、ここでしか見られないアーティストの表情や言葉に触れられて本当に嬉しいです。(東京都 NY)



Out Of Music Vol.3 絶賛発売中!
税込定価880円

ポスター付き!
表紙・巻頭特集25P!
15,000字インタビュー!

GACKT

注目のアーティスト・ロングインタビュー
w-inds.・BIGBANG・加藤和樹・SUGIZO・清春
Honey L days・玉置成実・城南海・THE KIDDIE

読者の反響

掲載の仕方が面白くてスキです。通常まとめて掲載されていめのに、一度終わってまた別のページに始まるというやり方にとても興味があります。GACKTさんまた特集お願いします。(神奈川県 AR)

私のあこがれているGACKTさんが特集されていたので買いました。最初のうちは、「雑誌のインタビューを読んでいる」というと点だったのですが、いつの間にか、ライターの武市さんと同じように、話の世界に引き込まれGACKTさんの言葉に聞き入っていました。「ああ確かに!」と共感したり、「そういう角度から見てるのか～」と新しい発見ができたり。面白くて考えされられるものでした。そして何より言葉が直接伝わってくる、響いてくる、そんな印象を受けました。読み終わった後、しばらく戻ってくることができなくて、ボーっとしてしまいましたが、「よし頑張れる」って元気をもらいましたし、自分にとって+αとなるものを得られて嬉しかったです。このインタビューは私にとって大切なものになりました。GACKTさん、ライターの武市さん、すばらしい時間を与えてくださってありがとうございました。(高知県　YA)

GACKTさん目当てで買ったらSUGIZOさんまで!ホントにありがとうございます。楽しく、涙しながら読ませていただきました。GACKTさんの「友達がいなくなるのが五年くらい」、悲しいけど自分の周りが同じようになってます。五年以上付き合ってるヤツらは、普段何もなくても、いざというときにすぐ来てくれる…良い友達です。(新潟県　AH)

書店ですごくインパクトのある表紙だなと思ったらGACKTさんの表紙でした。ポスター付でうれしかったです。GACKTさんの言葉のひとつひとつに重みがあって、考えさせられるところもいくつもありました。いろんな雰囲気、表情のGACKTさんの写真もよかったです。ピンクのTシャツ姿がかわいかった。ステキなインタビューありがとうございました。(徳島県 OH)

あまりゴチャゴチャしてなくて、シンプルな編集で、読みや良かったです。ライターさんのコメントも楽しそうで読んでて気持ちいいです。表紙裏のGACKTさんの写真がとてもお気に入りです。目ヂカラの写真はよく見ますが、このやさしい表情にトキメキました。GACKTさんのインタビューも良かったです。「友達」って、私、少ないし、できても本当周期が短くて、私が間違ってるのかな、と悩んだりしましたが、このインタビューを読んで「あー納得!」でした。GACKTさんからのコメントを引き出してくれたライターさんに[illegible](愛知県 HY)

誌面のGACKTさんの表情に魅入ってしまいました。雑誌で左側の写真が多い印象のGACKTさんですが、右半文の表情が、悲しみを抱えているような、背負っているものの重さを感じる表情で誌面を見て涙がでました。左半分は撮られなれているいつもの微笑みの優しい写真。ハガキでは伝えきれない想いがあります。すばらしい写真を撮られたカメラマンの方、この写真を誌面に使われた貴社様に感謝します。GACKTさんへの質問も私たち読者が知りたいことを沢山聞いていただきありがとうございました。(宮城県　HR)

[illegible]とってもステキなGACKTさんの[illegible]と記事でした。[illegible]当にタイトル通りの「アウト・オブ・ミュージック」なインタビューだったと思います。[illegible]て嬉しかったです。[illegible](東京都　OK)

10年ぶりくらいに音楽誌買いました。GACKTさん目当てです。下に「P50[illegible]」とあるのは読んでてとても新鮮でした!(岡山県　YS)

GACKTさんのインタビューにものすごく感動してしまいました。読んでいて涙が出ました。こんなすばらしいインタビューをしてくれた武市さんに感謝します。GACKTさんがこれだけやっているんだから、自分も立ち止まらず、歩かなきゃって、思わせてもらえました。ありがとうございました。(神奈川県 AA)

BIGBANGのロングインタビュー、楽しみにしていました。メンバーひとりひとりのことや、日本での生活など、知れてよかったです。やっぱりBIGBANGは個性的で魅力がありますね。これからの活動も楽しみです。またBIGBANG特集などお願いします。もっともっと読みたいです。(京都府　SM)

表紙の写真を見て"欲しい"って思いました。さらにインタビューではロクロをまわしてたって初めて知りましたし、私だったらこんなこと質問しているっていう内容を聞いてくれていたので、私自身がインタビューしているような感覚でした。(兵庫県 ST)



Out Of Music Vol.4 絶賛発売中!
税込定価880円

すごくシャレた雑誌だなぁ、と、まず、思いました。記事が先のページに飛んでいたり、読んでいる方は読みやすいです(息抜きができるので・笑)。ページ数はそれほど多くありませんが、とても内容の濃い雑誌だと思います。満足です。(北海道 SK)

GACKTさんの私たちファンや仲間に対する想いがすごい伝わってきて、とても感動しました。また、友達に対する考え方、とても深いと思いました。私には五年以上のつきあいの人はひとりしかいません。(14年になる友達)彼女が私にとって本当の親友だと感じました。(広島県 SY)

GACKTさんのロングインタビュー、とってもよかったです。それとよくぞGACKT様に"ピンク"を着せてくださいました!意外とよく似合ってらっしゃって、新しい発見です!　ありがとうございました。(東京都　SH)

バックナンバー紹介



Out Of Music Vol.1 絶賛発売中!
税込定価880円

表紙・巻頭20P特集!

w-inds.

KCB特集

東方神起・INORAN・FTIsland・SUPER JUNIOR-T×モエヤン Honey L Days・町田俊行

w-inds.大好きです!MUSIQ?はよく購入させていただいていますが、写真も記事もすごく専門的な感じが好きです。これぞ音楽雑誌の代表ですね。表紙の3人からめちゃくちゃカッコよかったです!3ショットも各ソロショットもどれも最高でした。記事のテーマも、今、ファンが一番聞きたい内容とかで楽しめました。P23の後ろ姿もステキ~。(静岡県 IA)

FTIslandを特集してくいただいてありがとうございます。FTが出ているだけで最高です。(北海道 NH)

店頭にこの雑誌が並んでいるのを見て、即購入してしまいました(笑)。それもw-inds.の特集が組まれていたのでキッカケであり、読んでみても、メンバー一人ひとりのインタビューがあり、写真もたくさんあり、大満足でした!特にメンバーに対する質問でそれぞれメンバーに対する思いが違っていたのが読んでいてとても面白かったです。(北海道 HY)

読者の反響

w-inds.表紙・巻頭サイコーでした!写真の目線のはずし方。メンバーに対する思いも聞けましたし、思う存分楽しめました。(大阪府 YS)

FTIsland、SUPER JUNIOR、東方神起を掲載していただいて本当にありがとうございます。最高の一冊です。本当によい内容でした。(埼玉県 FY)

w-inds.めちゃかっこイイです。本屋で見つけた瞬間レジ行きました。写真の雰囲気もメチャ好みでした!(三重県 OC)

w-inds.特集20P最高でした!　何冊でも欲しいくらいです。(熊本県 HC)

w-inds.表紙・巻頭サイコーでした!写真の目線のはずし方。メンバーに対する思いも聞けましたし、思う存分楽しめました。(大阪府 YS)

w-inds.のインタビュー、写真、全部素敵でした。三人の仲良しさを感じられ、写真に見とれ…また w-inds.を好きになりました!(宮城県 KA)

w-inds.は歌もダンスも実力あるし、TVにあまり出られないのがとっても残念。もっともっとたくさんの人に聴いてほしいし、知って欲しい。MUSIQ?ではたくさん取り上げてくれてとてもうれしい。(香川県 HT)



Out Of Music Vol.2 絶賛発売中!
税込定価880円

表紙・巻頭20P特集!

UVERworld

加藤和樹

特集インタビュー&フォトセッション

注目のアーティスト・ロングインタビュー
SoulJa・INORAN・w-inds.
光岡昌美・ヴィドール・森翼
ライヴ密着レポート **Gackt・黒夢**

読者の反響

とりあえず表紙から素敵過ぎて、中身もヤバくて最高すぎました。気に入っちゃって二冊購入しました。きっとUVERworldファン全員が納得する内容です。(東京都 YM)

めっちゃいっぱいUVERworld載っててびっくりしました!カラーのページだけかと思ったら、また後ろに白黒の記事が!って(笑)。すごい満足しました!(大阪府 TM)

書店で大好きなUVERworldが表紙に書いてある(写っている)ので、即買いました。UVERworldがしかも25Pも、インタビューがたくさんで夢のような雑誌でひとりで感動してました。本当に買ってよかったーって思えました。ひとりひとりの写真もかっこよくて、しかもインタビューの内容もしっかりしていて、見ていて温かい気持ちになる内容でもありました。これからもUVERworldをたくさん、できれば毎回出して欲しいです。偶然目にとまりたまたま買った雑誌ですが、この一冊であえてよかったです!(山形県 YK)

UVERworldの巻頭特集ありがとうございました!メンバーひとりひとりの私生活や思いがいっぱいつまっていて、読んでめちゃくちゃ楽しかったです!いろんな雑誌読んでても、けっこう内容がかぶっていたりするんですけどOut Of Musicは音楽的なことだけでなく、メンバーの思いや現状、考えていることをセキララに書いてくれていたので、読んでいて全然飽きなかったし、また、読みたいな、という気持ちになりました(ライター武市さん)。みんなのアングル(写真)もめちゃくちゃかっこよすぎです。カメラマンさん(草刈さん)よくわかってらっしゃる。またUVERworldが載ることを楽しみにしています。(山口県 SK)

音楽誌が低迷するなか、こうして発刊、さらに内容「良」なのがすごくうれしかったです。インタビューのよさ(うわべだけでなくちゃんと人をわかって聞いてる気がしました)が購入の決め手でした。ありがとうございます!(神奈川県 TW)

加藤和樹さんケイサイということで、初めて購入させていただきました。裏表紙だし、ページも多いし、すごく嬉しかったです。グラビアが他にないスタイルで、ぜひこれからも期待していますので、よろしくお願いします。(神奈川県 OK)

加藤和樹くんの巻頭特集よかったです。写真もきれいてせ何よりインタビューが読み応えがあってよかった。こぼれ話的なところにもありましたが、和樹くんて、魅力的な人間だなって思います。本当にたくさんの表情をもっていて、ギャップがすごい!(愛知県 TM)

UVERworlのインタビューが読みたくて買ったんですけど、インタビューの質問の内容がすごく独特で、UVERworldが出てる雑誌は基本買うんですけど、ありきたりな質問でなくて、メンバーのいろんなところを知れる様な質問ばかりで見ていて楽しめました。買ってよかったです。(長野県 SR)

MUSIQ?

MUSIQ? Vol.1
税込定価890円



DVD収録&ロングインタビュー
w-inds.・Kimeru
玉置成実×LIP SERVICE
SOPHIA・川嶋あい

ロングインタビュー
WaT・EXILE・中ノ森BAND 他

MUSIQ? Vol.4
税込定価890円



DVD収録&ロングインタビュー
キリト・雅・須藤元気
sifow・MICRON'STUFF
Kimeru

ロングインタビュー
SID・SEAMO 他

MUSIQ? Vol.5
税込定価890円



DVD収録&ロングインタビュー
the GazettE・ムック
ALvino・DuelJewel
AcQuA EP

ロングインタビュー
橘 慶太 他

MUSIQ? Vol.7
税込定価980円



DVD収録&ロングインタビュー
ナイトメア・アリス九號.
ET-KING・Kimeru
the GazettE・PENGIN

ロングインタビュー
sunny-side up・谷村南奈 他

MUSIQ? Vol.8
税込定価980円



DVD収録&ロングインタビュー
アリス九號.・INORAN
雅-miyavi-・D
Mother Ninja

ロングインタビュー
w-inds.・清木場俊介 他

MUSIQ? Vol.9
税込定価980円



DVD収録&ロングインタビュー
東方神起・清春・ナイトメア
アリス九號.・ムック
ET-KING・玉置成実
ワタシメスラッグ 他

MUSIQ? Vol.10
税込定価980円



DVD収録&ロングインタビュー
アリス九號.・INORAN・河口恭吾
Kagrra,・YVE・光岡昌美・alan

ロングインタビュー
MUSIQ?×YBSラジオ
「Dig The Music」コラボ企画
w-inds. 他

MUSIQ? Vol.11
税込定価980円



DVD収録&ロングインタビュー
the GazettE
INORAN×森山直太朗 対談!
ナイトメア・加藤和樹
ALvino・エイジアエンジニア

MUSIQ? Vol.12
税込定価980円



DVD収録&ロングインタビュー
ナイトメア
INORAN×寺岡呼人 対談
アリス九號.・D・玉置成実・P's

ロングインタビュー&レポート
X JAPAN・w-inds. 他

MUSIQ? Vol.13
税込定価980円



DVD収録&ロングインタビュー
葵・the GazettE
INORAN×葉山拓亮(Tourbillon)対談
12012・伴 都美子・PureBOYS
DuelJewel・Mizrock
BLUE MAN GROUP Report

MUSIQ? Vol.14
税込定価980円



DVD収録&ロングインタビュー
ナイトメア・仙台貨物・超新星
INORAN×須藤元気
D'espairsRay・あのHUMPTY
DJ MAYUMI・光岡昌美

レポート
河村隆一・森山直太朗 他

MUSIQ? Vol.15
税込定価980円



DVD収録&ロングインタビュー
the GazettE・INORAN・仙台貨物・小柳ゆき
SUPER JUNIOR-T×モエヤン・12012

ロングインタビュー
INORAN×橘慶太(w-inds.) 対談
SPITZ JAMBOREE TOUR 2007-2008
"さざなみOTR"【後半】
w-inds. Live Tour 2008・"Seventh Ave." 他

バックナンバーご購入方法 全国の書店、書籍お取扱の楽器店・CDショップなどでお買い求めいただけます。店頭に無い場合は小売店にお取寄せをお申し出ください。

インターネット・携帯でご購入が出来ます **http://www.shinko-music.co.jp** <¥3,000以上送料・手数料無料!>

㈱シンコーミュージック・エンタテイメント 営業部/通販係 TEL：03-3295-4191（電話でのご注文はできません） 携帯でも買えます!

※2,3,6号は完売となっております。ご了承ください



読者のみなさんからのおたより



yasu様メッチャかっこいいです。「Q.E.D」も毎日聞いてます。歌のなかに引き込まれるっていうか、同じ気持ちになって聴いてしまいます。声も聞きほれてしまういい声やし、あかん所がひとつもないです。めっちゃ大好きです。父も母もyasu様のこと大好きなんです。うちでは、家のなかでも、車のなかでも、yasu様の曲をかけています。いろんな表情を見せてくれたyasu様、アウト・オブ・ミュージックの編集部のみなさん、ありがとうございます。天才です。(大阪府　HK)

Acid Black Cherryさんの特集＆表紙というとでインターネットですぐ注文しました。そして中身の濃さにとても驚きました。インタビューも私たちが知りたいことをきいてくれていてとても楽しめました。そして写真もすごく自然体で、新しいyasuさんが見れた気がします。ぜひまたAcid Black Cherryさん特集やってください。ポスターもとてもかっこよかったです。ありがとうございました。(愛知県　AY)

yasuさんが表紙でポスターもついていたので、買いました。ニューアルバムのこと以外にも、yasuさんの音楽性を知ることができるような質問がたくさんあってすごくうれしかったです。ほかの雑誌とは違う構成もとてもよいなと思いました。またyasuさんの特集をぜひお願いします。(富山県　KR)

Acid Black Cherryの特集、とってもよかったです。インタビューの内容も幅広く、かつ、突っ込んだものまであって、大変満足しました。また、Acid Black Cherryを取り上げてもらえたらうれしいです。(福島県　AN)

ひとりひとりのアーティストのページが長くてとても読みやすかったです。yasuが本当にかっこよくて、とろけました。(東京都　MH)

表紙・巻頭・ポスター・写真・インタビューどれも最高でした。Acid Black Cherryめっちゃかっこいい。なんかいつものyasuさんとは違い、大人っぽい感じでドキドキしました。(沖縄県　HM)

表紙のAcid Black Cherryさんに魅入られて気づいたら買っていました。表紙はもちろん、他の写真、ポスターもかっこよかったし、インタビューでは、yasu様らしさや、yasu様の本質が見られてよかったです。(愛知県　TK)

Acid Black Cherryの特集がすごく嬉しかったです。1万字インタビューというすごい記事を作るのが大変だったと思いますが、うまく言葉がまとめてあって、すごく読み応えのある記事になっていました。ありがとうございます。おつかれさまでした。(福井県　YS)

yasu様かっこよすぎですー！　萌えー！(兵庫県　TA)

表紙を見て買いました。Acid Black Cherryのポスター付にはとても感動しました。内容もとても楽しく読むことができました。知らなかったアーティストさんを知るきっかけになりました。これからもずっと応援し続けますので、よい写真、よい記事をお願いします。Acid Black Cherryの写真、色使いといい、最高です。いいインタビューをしてくださって、この雑誌を読んでいる瞬間がとても幸せです。飛ばしている記事なんて最初びっくりしました。あたらめてすごい雑誌だなと思いました。OUT of MUSICを買ってよかったと心から思いました。(高知県　SY)

Acid Black Cherry様が表紙ということで、購入させていただきました。とてもクールなyasu様の写真がとても印象的で素敵でした。また、インタビューでも日常のことから、Newアルバム「Q.E.D」のことまで、さまざまな角度から、yasu様の言葉を聞けたので、うれしかったです。「Q.E.D」は間違いなく、yasu様の言葉・音・声がそろわなければ、生まれなかったと思います。大好きです。これからもyasu様を追いかけてください。OUT of MUSICさん、ありがとう。(静岡県　SM)

大好きなAcid Black Cherryさんの表紙に惹かれて購入しました。インタビューの内容も深くとても楽しんで読むことができました。写真もたくさんありすごくうれしかったです。黒背景のyasuくんの写真は格好良くて、見入ってしまいました。ポスターも大切にします。またAcid Black Cherryの特集をやって濃いインタビュー内容で、読者が知りたいyasuくんのコメントを引き出していただきたいです。期待しております。ありがとうございました。(福島県　HE)

次号は12月下旬に発売予定です



ethnos





「Day of The Dead」
1,500円　2009/11/11発売

プロデューサー兼DJのDJ MOZとMCのROBINAESを中心としたミクスチャーユニット「ethnos」。R&Bサウンドを主体としたグループを通じて知り合い意気投合し2007年に結成。様々なジャンルの音楽に触れてきたDJ MOZの、独自の視点から描かれるトラック、深層心理を突くROBINAESの強烈なラップが融合[illegible]従来のHIP HOPのSTYLEに囚われないジャンルレスなサウンドと型破りな[illegible]のライブを中心に活動。

MUSIQ? SPECIAL Out Of Music 6 プレゼント応募券

SOPHIA LIVE 2009
0919 日比谷野外大音楽堂

取材・文＝桂泉晴名



Mitsuru Matsuoka(VOCAL)

2009年はSOPHIA結成15周年。彼らは6月24日にニューアルバム『BAND AGE』をリリース、6月28日には両国国技館で結成15周年記念公演を行い、7月10日からは全国ツアーSOPHIA TOUR 2009"楽園"-BAND AGE meets a new world-と怒涛の活動を展開した。そして、メモリアルイヤーの東京ラストライヴは、2009年9月19日の日比谷野外大音楽堂だった。

実は、SOPHIAのライヴに足を運ぶのは数年ぶりだった。会場に向かう電車の中で、さっそくひまわりの花をかばんに挿した女性を見かける。昔から彼らのデビューシングル『ヒマワリ』にちなんで、オーディエンスがライヴにひまわりの花を持っていくのは今も変わらない。この日の天気はあいにく曇りだったが、ひとつ、またひとつとひまわりがたくさん集まってくると、夏が再び戻ってきたような感覚になる。

17時30分。彼らのライヴではおなじみのSE、フランスのシャンソン歌手エディット·ピアフの『愛の讃歌』が流れる。ひまわりの花もそうだが、この曲が流れてくると"ああ、SOPHIAのライヴに来たなあ"と、頭のスイッチが自然に切り替わっていく。

最初の曲は何か？と待ち構えていると、ボーカル松岡充以外の4人のメンバーがステージに登場する。はじまったのは『Kiss the Future』。1996年リリースのアルバム『Kiss the Future』からの曲だが、彼らが日比谷野外大音楽堂のライヴを行ったのが、『TOUR '96 Kiss the Future ～未来にKISSを～』だった。今回のライヴはその当時とリンクして創られていたのだ。豊田和貴のギター、都啓一のキーボード、赤松芳朋のドラムと黒柳能生のベース。それぞれ個性が際立った音がググッと伝わってくる。

そして『one summer day』でボーカル松岡充が登場。爽やかなメロディに誘われるように、さっきまで曇っていた空がいつの間にか夕焼けの淡いオレンジに染まっている。まるで夏の終わりのライヴを優しく見守っているようだった。

続く彼らの2ndシングル『Early summer rain』では銀テープがパンっと小気味よく弾け、会場は一気にヒートアップ。"Early summer rain～"とサビをオーディエンスが大合唱する。この曲はライヴで大勢の人と分かち合うと、さらに輝いていく。

「みんなよく来たなー！　会いたかったぜ！」松岡充の元気な声が響き渡った。「めちゃめちゃ久しぶりの野音です」。"激動の2009年、楽園ツアーの打ち上げライヴだと思ってやりたい"と今日のステージへの意気込みを語る。

ライヴではインディーズ時代からおなじみの『KURU KURU』へ。会場のオーディエンスは、皆曲に合わせて手をクルクル回し、踊りまくる。キーボードの都も片手をブンブン振り上げながらも、見事な鍵盤さばきを見せる。そして"チュルルル、チュルルル～"という松岡の声が聴こえたと思ったら、なんと『Early summer rain』のカップリング『ブラウンカンライフ』がはじまった。今回は、アルバム『Kiss the Future』に収録されている『Dear my crescent moon』など、96年のツアー以降あまりライヴで演奏されていない、メンバーも"久しぶり"という曲もセットリストに組まれていた。そのためオーディエンスも一瞬驚いた様子で、何の曲なのかわかると、喜びの声があちこちから起こる。『Dear my crescent moon』の演奏の時には、すっかり辺りも暗くなり、歌詞の世界観が見事にこの会場で表現されていた。

軽快な都のキーボードソロに続いての曲は、アルバム『EVERBLUE』から『hello, goodbye』。ボーカルとキーボードとギターのみ。メロディに合わせて体を揺らす人も、一緒に歌う人もいない。会場は静かになって、3人の音に聴き入る。決し

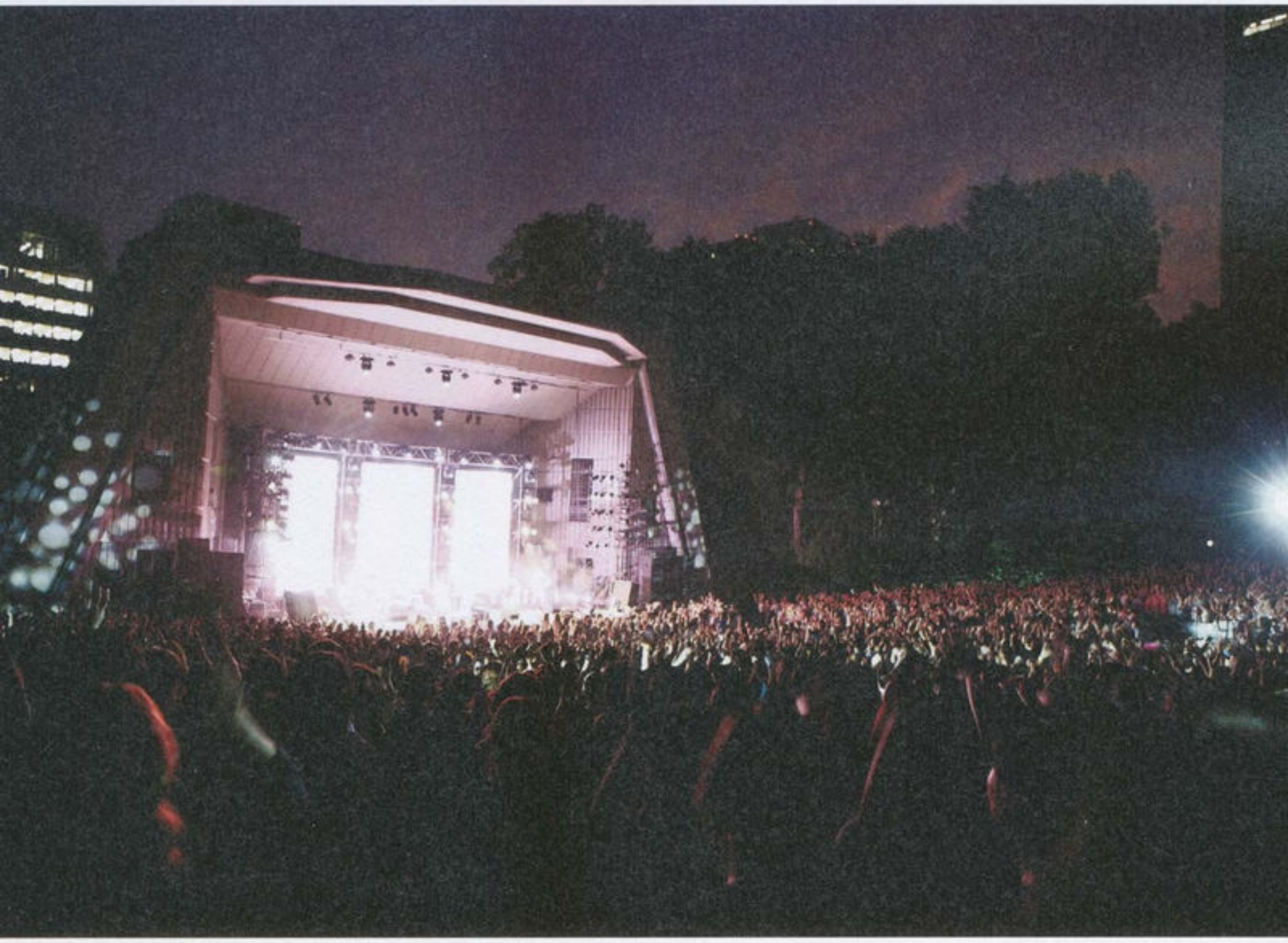



SOPHIA LIVE 2009
0919 日比谷野外大音楽堂
Kazutaka Toyota(GUITAR)



Yoshio Kuroyanagi (BASS)

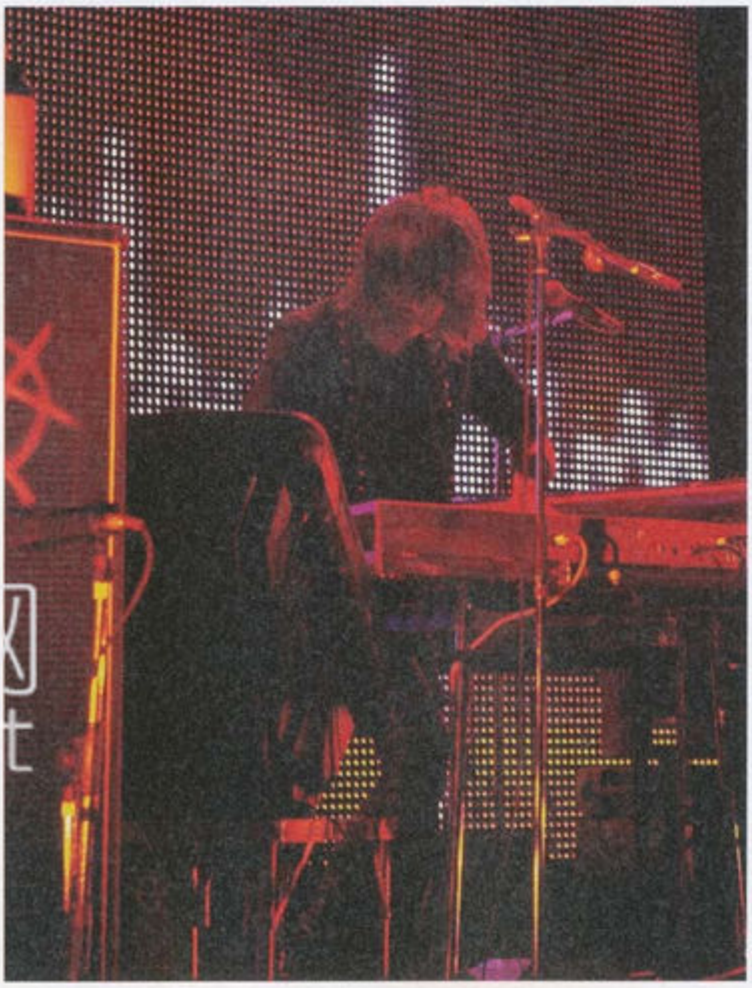
きれいごとが言われないようになったら、終わりやん！
俺はSOPHIAというバンドで、きれいごとと言われることを歌っていきたい



て息を飲む、という感じではない。彼らの演奏に身を任せると、自然に聴くことに集中してしまうのだ。

続いてニューアルバム『BAND AGE』から『やめたりできない』。"僕はどうしても僕のままさやめたりできない"というフレーズが心に刻まれる。SOPHIAの曲はシンプルな言葉で語っていても、その意味について思いを巡らせていくと、本当にいろいろな受け取り方ができることがわかるだろう。そして、この曲は自分たちのスタイルを貫き続けているSOPHIAの在り方を示していて、今回のライヴでも特に印象に残った。

1997年にリリースされ、アルバム『BAND AGE』では特典CDとしてセルフカヴァーも収録されているロマンティックなメロディの『君と揺れていたい』。今日はセルフカヴァーヴァージョンを披露。前奏のギターの音から、雄大な情景が目に浮かぶようだ。澄んだキーボードの音色とベースの低音が柔らかく絡む。会場にいるオーディエンスは、野外の風に吹かれながら、その優しい音に包まれていった。



SOPHIA LIVE 2009
0919 日比谷野外大音楽堂



Yoshitomo Akamatsu(DRUMS)

抒情的な演奏から一転、これもSOPHIAのライヴの楽しみのひとつであるMCタイムへ。関西出身4人＋愛知出身1人のメンバーのトークは、いつ聞いても思わず笑ってしまう。最初はギターのジル（豊田）とベースのクロ（黒柳）のコンビ。ジル「今日はバタバタしていてねー」。クロ「通しリハーサルを一度もやっていないんですけれど」と2人が思わず告白すると、会場からは「ええー！」と驚きの声があがった。その後、段取り以外の行動をとるジルにクロは振り回されっぱなし(笑)。最後は、ジルがいきなりギターソロを披露し、大きな声援が起きた。

続いてキーボードの都とドラムのトモ（赤松）が登場。都は「気持ちいいなあ。心地よい風が途中で吹いて、気持ちいい～って、そのままうしろ倒れるんじゃないかと思った」と野外の開放感を楽しんでいる様子。途中、野音のステージは13年ぶりという話の時に、"そのライヴに来ていた人！"とトモが質問すると、会場からは何人かの手が挙がった。

そしてトモに促されてボーカル松岡もステージ上へ現れ、2人の会話に加わる。松岡はミュージカル『タイタニック』出演時に共演者の大澄賢也氏に影響されて、リハーサル前には小一時間、ストレッチと筋肉トレーニングをしているという。それなのにメンバーはまったく興味を示さず……。「お前らに向上心はないのか！？」と嘆く松岡。野音のリハーサルの時にようやく都が『松ちゃん、俺もやるわ』と言ったそうだが、彼が持ってきたのはなんとWiiのマット！ 「ヨガマットくらい買えよ！」とさらに松岡は嘆くという、この日も終始笑いが絶えないトークを披露してくれた。

ライヴ後半は1997年リリースシングルの『little cloud』からはじまる。こんなまっすぐな恋をしていたこともあったな、と甘酸っぱい思いが沸き起こる曲だ。最後、ステージ中央でしゃがんだ松岡が一言。「今年、最後のツクツクボウシが、僕の前におりてきました」。彼がゆっくりと手のひらを見せると、そこには一匹の蝉がとまっていた。

イントロからオーディエンスが一斉に飛び跳ねたのは、『ゴキゲン鳥 ～crawler is crazy～』。リリース当時、この曲を聴いた時の衝撃を思い出す。だって、いきなり"6畳1間の鳥カゴで まずいメシ喰ってフンをして"と、はじまるのだから。この歌詞は、11年経った今聴いても新鮮だ。でも、自分の状態を皮肉に描いても納得してしまうのは、彼らの視点の温かさ故なのだろう。

そして、オーディエンスがリズムに合わせて拳を振り上げる『age』、『BANDAGE』と最新曲が続く。何年も慣れ親しんだ曲はもちろん嬉しいものだが、今、まさに現在進行形でSOPHIAが伝えたい、という思いは、やはりニューアルバムの曲たちに凝縮されている。それは、彼らの熱のこもったタイトな演奏で伝わってきた。結成以来15年、毎年欠かさずライヴを続けているSOPHIAは、その根っこの部分は変わっていなくても、表現方法は鋭く磨かれ、多様に進化していることをステージで見せてくれた。

松岡充は語る。「自分たちは仲間に恵まれている、オーディエンスに恵まれている。それは、自分たちもオーディエンスのみんなも本気だから」と。彼らはMCで感謝をするだけでなく、自分たちの思いをさまざまな形であらわしている。たとえば、昨年秋のツアーは"BAND AGE"という名前だった。それは"BAND"がSOPHIAで、"AGE"がオーディエンスを意味していたという。そして"BANDAGE"はその二つを結ぶ



絆という意味の包帯の役割だった。「僕らを育てたのは皆さんです。そういう皆さんを育てたのは僕らかもしれません」。ここまで言い切れるのは、彼らがずっとファンと正直に向き合ってきたからだろう。

「ちょっとでも、笑顔を送り返せることを願います。『Baby Smile』」。SOPHIAの音楽とともに成長してきているファンに対して、"So, I stand by your smile. 君を連れていく"と歌い上げる松岡。彼らはファンとアーティストという関係を飛び越えて、人と人の絆がそこにはあることを、歌を通して伝えてくれた。

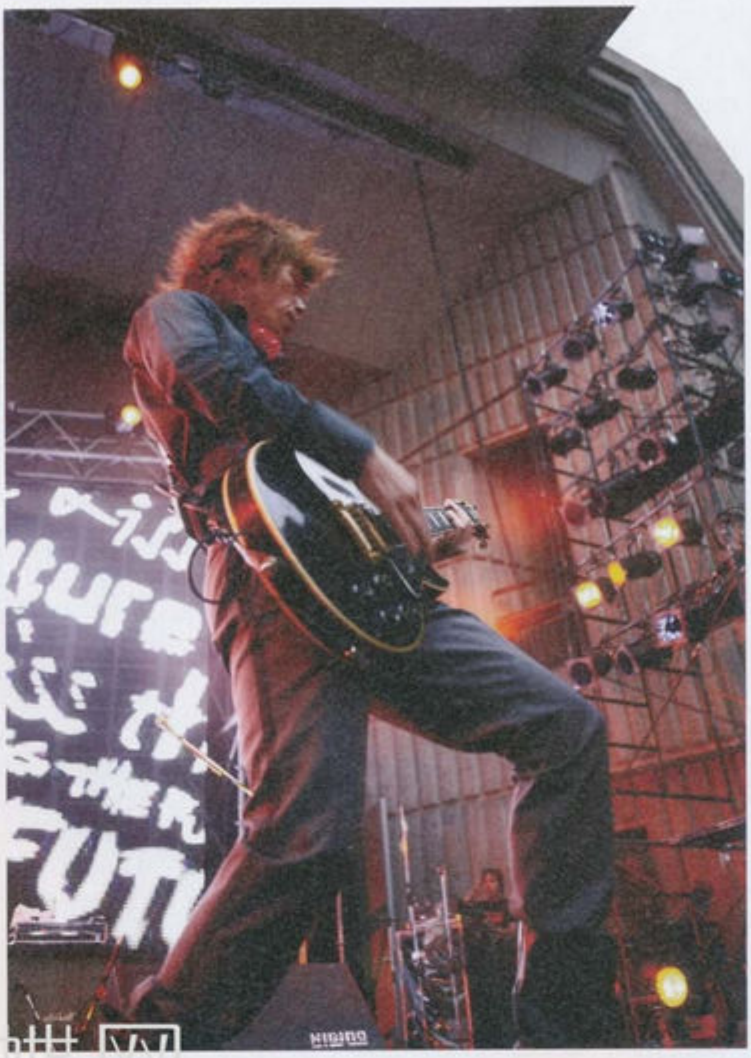
SOPHIAの曲のメッセージは決して派手ではないと思う。でも、等身大の日常を生きる中で、私たちが忘れてしまっている大切なことを、軽やかに歌にのせていく。「きれいごとが言われないようになったら、終わりやん! 俺はSOPHIAというバンドで、きれいごとと言われることを歌っていきたい」という松岡充の言葉。年齢を重ねていくほど、いろいろなことが見えてきて、まっすぐなメッセージを言いづらくなる。だからこそ昔以上にSOPHIAの伝えてくるものの重みが増していく。今年のツアータイトルにもなっていた『楽園』では、彼らが"SOPHIAで歌いたいこと"がつまっていることが、ひしひしと伝わってきた。



そして皆が待ちかねていた『ヒマワリ』。オーディエンスの頭上に伸びるひまわりの花たち。何度観ても、心が温まり、元気になる光景だ。もしこの先迷った時も、この花畑が心のどこかに存在している限り、前に進んでいける……。そんな思いがした。

「1996年7月20日ここに立っていました」松岡は13年前のライヴについて語る。彼はその当時の自分に向かって、「お前らそのままでいいぞー。迷うな、突っ走れ!と言いたい」と話した。その言葉を聞いて、もし自分のその当時を振り返った時、果たしてどう思うかな?と自問自答した。彼のように、過去の自分をあるがままに受け止められるだろうか?と。正直に言って、変えたいことはたくさんある。"もっと、こうしたらいいのに"と、言いたくなることばかりだ。しかし、今、こうやって生きているのは、あの頃の







SOPHIA LIVE 2009
0919 日比谷野外大音楽堂

Keiichi Miyako (KEYBOARD)

SOPHIA LIVE 2009
0919 日比谷野外大音楽堂



自分がいたからこそ。たどってきた道を振り返ると、そこには愛おしい思い出の欠片がたくさん落ちている。SOPHIAは、そのことを思い出させてくれたのだ。

「最後の曲です。ここから未来に進む仲間たちに贈ります。『in the future』」。タイトルどおり、未来へ進む力を与えてくれる曲で終わらせてくれたところに、彼らの優しさを感じた。

メンバー最後の挨拶では、豊田は「俺、本当、泣きそう」とつぶやいた。SOPHIAに対していつも感じる安心感。それは何年続けていても、こうやって素直に自分たちの思いを伝えてくれるところだ。「来年、また会いましょう」。「約束できる相手がいることは幸せです」そう言ってメンバーは皆、次のステージで逢うことを約束してくれた。

久しぶりに見たSOPHIAのライヴ。懐かしさがこみあげてくるかと思っていたが、それよりも、彼らのSOPHIAとしてのスタンスがまったくブレず、自然体でいる姿に惹き込まれていった。それはきっと、最前線でずっと進化し続けているからこそ、だと思う。SOPHIAはこれからも私たちの心の中に、たくさんのきれいな花を咲かせてくれるだろう。



SOPHIA
2009年9月19日 日比谷野外大音楽堂

【SET LIST】
～愛の讃歌～
1. Kiss the Future
2. one summer day
3. Early summer rain
4. KURU KURU
5. ブラウンカンライフ
6. State of love
7. Dear my crescent moon
8. hello, goodbye
9. やめたりできない
10. 君と揺れていたい
11. little cloud
12. ゴキゲン鳥
～crawler is crazy～
13. age
14. BANDAGE
15. Baby Smile
16. エンドロール
17. 街
18. 楽園
19. ヒマワリ
20. in the future

■SOPHIA■1994年結成。松岡充(Vo)、豊田和貴(Gt)、黒柳能生(Ba)、赤松芳朋(Dr)、都 啓一(Key)。

Live Tour 2009 "SWEET FANTASY"を経て、さらにダンスミュージックを追求するw-inds.。
12月9日リリースのニューシングル『New World』は、現在の彼らならではの、
クールなかっこよさとホットな情熱が混在した曲に仕上がっている。
今回の制作において、3人が感じた自分たちの変化とは？



w-inds.

ダンスナンバーを軸に楽曲選びをしてきたのですが、ようやくそれが実を結びつつある実感があります

インタビュー＝桂泉晴名

Keita Tachibana



──今年のLive Tour 2009 "SWEET FANTASY" はいかがでしたか？

龍一●かなり勉強になりましたね。

涼平●楽しかった。

慶太●うん。すごく楽しかったよね。

龍一●僕の中ではなんとか80点以上を常に出そうというのが目標だったんですけれど、結構、高いポテンシャルをずっと保っていました。

慶太●今までで、一番高い位置をずーっと持続していない？　それまでは、浮き沈みが結構あったけれど。

龍一●大変なときもあったんですけれど、それを乗り越えて、後半はずっとポテンシャルが高かったですね。"もっと、こうしたらいいんじゃないか"って、いろいろ考えて。さらに良くしていきたい面がたくさんあるので、それを今後生かせるようにしていきたい、というのが、今の気持ちです。

──今回のツアーはニューアルバムのリリースがなかったため、皆さんがよく知っている曲が中心だったということについてはいかがですか？

涼平●今回はダンスナンバー系がすごく多いんですけど、ただいろいろ過去の楽曲を入れたのではなく、今後も"こういうことをやっていきます"ということを伝える構成にしたかったんです。だから過去より多く"歌って踊る"ことが中心となっている楽曲を多めにしました。あと、今回は演出面で、ダンスが照明とかセットでよりよくなるような、ステージングになっているんじゃないかな。LEDをガーッとたくさん使っていたり、床に電飾が入っていたりとか。

慶太●でも、体力的には今年はきつかったよね！

涼平●相当きつかった……。

慶太●マジできつかったです。

龍一●最後の曲で『Rain Is Fallin'』はやめようよ〜。

（一同爆笑）

慶太●やばいよね（笑）。

龍一●自分の中では100％やっているんですけれど……。ビデオを観ると、"これだけしか動いていないの？　俺？"っていうのが、最後の曲です。

涼平●今回は、考えてやるようになりましたね。ダンスナンバーが多いんで、全部100％だと、最後までもたないんです。全体的に見


Ryuichi Ogata
Ryohei Chiba

たときに、後半のペースが落ちると、やっぱりバランスが悪いから。初日にやって、"だめだな。これは"ってわかったし（苦笑）。体力的に、"歌えないな、これは"というのもあったので。だからペース配分は、かなり変えました。例えてみると、ただ、走るんじゃなくて"考えてやるサッカー"というようなイメージです。

──なるほど。ほかに、今年のライヴで今までと特にどんなところを変えましたか？

龍一●僕は今年、音のとり方とかちょっとスタイルを変えてみました。なんか、こう……ずっと踊っている、みたいな感じですね。

──たとえば、休むときとかも？

龍一●はい。休むときも踊っている、というのを意識したりしています。

──大きくゆっくり動く？

龍一●そういうときもあります。

──慶太さんもブログで"最近のこだわりは、顔も躍ること"と書かれていましたね。

慶太●そうです。顔は重要です。表情も曲、振り、角度、ポーズによって変わらないと。

龍一●それが逆に大変だよね。

慶太●うん。表情がついているのとついていないのでは、全然違います。踊りは手の指の先、頭の先、足のつま先まで全部が決まると、すごくかっこいいんです。

──今回、特に意識したきっかけというのは何でしょうか？

慶太●それは経験というか、人のライヴを観て、自分とも見比べて、ですね。

──なるほど。そして、これからは11月6日に香港、11月14日には台湾と、海外公演が控えています。

龍一●お客さんのライヴでのエネルギーは強いと思います。たまにしか会えないという喜びもあるかもしれないけれど、みんなすごく盛り上がってくれます。音楽に対して素直ですよね。

涼平●海外でのお客さんは、周りは関係なくまず自分が楽しまないと、というスタンスがありますね。とりあえずMCについてはことばが通じないので、逆に僕としては、それがよかったりして（笑）。もともとトークが苦手なのでいろいろ気を遣ってどうしてもMCでエネルギーを使ってしまうんです。でも、そういったことを考える変わりにより音楽とパフォーマンスで一体になれるというか。そういう音楽のみでの一体感は、また日本と









は違った楽しみ方がありますね。

——日本のライヴと内容は変わりますか？

慶太●シングル曲が少し増えると思います。海外だとコンサートで来る機会が少ないのでそこは考慮したいと考えています。

——さて、12月9日にニューシングル『New World』が発売されますが、この曲は本当にかっこいい曲で、ダンスの場面が浮かびますね！

慶太●最近は海外の作家さんに頼む事が多かったのですが、今回は日本人の作家である今井了介さんと一緒にやらせていただいて。結果としてこういう作品ができたことは、個人的にすごくうれしかったですね。

涼平●制作の仕方がいつもと根本的に違うので、そういう新しさだったり、楽しさだったりがありました。

——今までとはどんな風に違ったのでしょうか？

涼平●いつもはわりとでき上がった状態で、"これでいこう"という感じなのですが。でも、今回はたくさん時間を費やしてみんなで話して作った感じがあります。

——やはり日本人の方だからコミュニケーションが取りやすかった？

涼平●それもありますけれど、今井さんはすごくコミュニケーションを取ってくれる方なので。

慶太●逆に僕たちの考えを気にしてくれます。

龍一●"これでいいの？"って。

——制作の途中の段階で、ですか？

龍一●そうですね。

——皆さんからの要望をいろいろと聞いてくださるんですね。

慶太●言うと、なんでもやってくださいます。

龍一●"OK！"って。

慶太●とりあえずやってみて、だめだったら止めればいいし、みたいな。歌い方とかも、"ちょっと、こういうのをやってみたいんですけど"とパターンか違うものをやらせてもらって。

——今回、慶太さんのキーも高いです。

慶太●いろいろな歌い方をして、あの形に落ち着いたんです。"もっとエアーを混ぜて、かすれた声の方がかっこいいんじゃないか？""もうちょっとメロディアスな方がいいんじゃないか？""もっと投げて歌った方がいいんじゃないか？"とか。すごく細かいことまでやってみました。一つ一つのパターンに対して、今井さんはレスポンスを返してくれるので、作りやすかったし、勉強にもなりました。

龍一●うん。ようやくスタート地点に立てた気がします。昨年あたりからダンスナンバーを軸にコンサートでも映える楽曲選びをし

写真はニューシングル『New World』ジャケット撮影現場風景です

てきたのですが、ようやくそれが実を結びつつある実感があります。だからこそ、"自分で振り付けたい"という気持ちになりました。

——それは作り方が変わって、より感じることですか。

龍一●自分たちの気持ちを大切にしてくれる人なので。今井さんは年齢も近いんですよ。といっても、ちょっとは離れているけど(笑)。

慶太●考え方は一緒だよね。

龍一●そう。感性も、若いですね。でも、偉大な人なんです。尊敬できるし、信頼できる。そういう人と一緒に仕事ができることがうれしいです。だからこそ、"いいPV作らなきゃ。その人に申し訳ない"って。曲というのは、その人の子どもだから。それをやっぱりちゃんと表現してあげたいな、と思いました。そういう気持ちになれたっていうのは、一つの変化ですね。

——ＰＶ撮影はこれからですか？

龍一●そうですね。

——どんなダンスパフォーマンスが観られるのか、とても楽しみです。

龍一●ぜひ、レペゼン(represent：ヒップ-ホップのアーティストが、どこかの地域を代表する意思、さらにはその地域を愛する意思を表明する際に用いる)したいというか、曲が国内だから、日本人らしさが出るようにしたいです。野球とかサッカーのようなスポーツと同様、観た人が地元のチームを応援するような気持ちになれればいいですね。

——そういえば、昨年韓国で行われたアジアソングフェスティバル2008のw-inds.のステージ映像を観たときに、日本のオリンピック選手を応援するときと同じような気持ちになりました。世界になればなるほど、逆に日本を意識しますね。

龍一●特に韓国のダンスミュージックは常に新しいものを求めている風潮を肌で感じました。前作のG-DRAGON(BIGBANG)さんとのコラボレーションもそうですが日本でももっともっとダンスミュージックが盛り上がってくれれば僕たちも励みになります。

慶太●僕は、自分がプライベートで"この曲、聴きたい！"って思って聴ける曲を作りたいと思っています。そういう意味では、今回の『New World』はその曲の一つになりましたね。家や車で何度も聴いているんですよ。

——本当に『NEW World』は、"うわ！ この曲、かっこいいな！"と惹きつける曲だと思います。

慶太●そう思ってもらえるとうれしいですね。そういう音楽を作っていかないと、結局作った意味がなくなっちゃう。音楽は聴かれてなんぼなので。人が聴いてくれる曲をつくりたいですね。

——街角で流れていて、思わず立ち止まってしまう曲ってありますよね。

慶太●ありますね。最近はiPhoneで、こうやって(iPhoneを片手で持ち上げる仕草をする)すぐ、テテテテーッて街角で聴いた曲をね。

涼平●そうそう。検索ができるから。iPhoneのみですけど。

——今は、そういうことができるんだ～。持っていないと時代に取り残されちゃいますね。

慶太●(笑)。(涼平を見る)

——え？ 涼平さんは？

涼平●僕はdocomoっ子なので。だけど、山梨の山の中でも電波はちゃんと入りますよ(笑)。

(一同笑)

——でも、w-inds.が"日本でダンスミュージックを広めたい"という意思で活動している影響で、関心を持ってくれる人も増えてきていると思います。

慶太●どうなんでしょうか。それは自分たちではわからないですけど。でも、僕らやダンスミュージックをやっている人たちを媒体として、日本でも好きになってくれる人が増えてくれたらうれしいな、と思います。まだまだ勉強することがいっぱいあって、それも楽しいです。パフォーマンスも音楽の一つですから、音だけでは伝えきれないものを、もっと表現していきたいですね。

お客さんのライヴでのエネルギーは強いと思います



モバイル原宿*表参道

MobaHara

おしゃれ大好きピープルのための情報サイト!

月額262円

評! MOBAHARA×OUT of MUSICコラボ企画

話題のアーティスト直撃取材!

OUT of MUSICに登場している注目のアーティストに
MOBAHARAが突撃取材をする人気コーナー!

今回は「この冬の一押しファッションアイテム」「セレブ」「モテ飯」「学園際」などなど について、聞いてみた!


GACKT

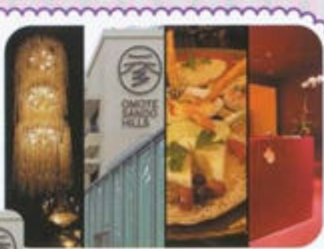

w-inds.


THE KIDDE


LM.C

SHOP情報!

原宿・表参道最新情報!
おしゃれな街原宿・表参道の
いろんなことがワカっちゃう♪





その他にも
しいコンテンツが
いっぱい!!

ケータイ小説『ハラジュク迷路』

大人気連載中!
カリスマ作家「エンドケイプ」
書き下ろしの『ハラジュク迷路』
モバ原限定配信!





3キャリア公式

MobaHara
モバイル原宿*表参道

MobaHaraShop

モバ原shopは女の子のキレイの限界に挑戦!ダイエット、
カラコン、バストアップなどの必須アイテム盛りだくさん♪

モバ原ショップ売れ筋商品!
<ダイエット&バストアップ部門>

【売れてます!】
ローズウォーター プレミアム



藤原○香サン、は○な愛サンもハマッタらしい?!芸能人・モデル・スタイリストはもちろん、業界人やセレブもTVやブログで愛用を告白♪飲み続けると体からバラの香りがするんです☆通り過ぎた瞬間あなたの香りにみんなが酔いしれます

【緊急入荷!】
ジュエリーラッシュ(医薬部外品)



道端アンジェリカちゃん愛用!大人気のまつげ用美容液を緊急入荷!今まで別のまつげ美容液を使用していた芸能人も、続々とコレに乗り換えています!!まつげぐんぐん!人気モデル並みに目ジカラ強力UP☆今タレントやモデルの間で大流行のまつ毛専用育毛剤

【大ヒット実績】
マジェスティックプエラリア



ナント愛用者は50万人!!脱ぐとがっかりなんてもう言わせない!尽きないバストの悩み本気で解消したい方にオススメ☆高品質プエラリアがぎっしり詰まったカプセル。思わずアナタの谷間に彼の手が伸びてきちゃう♪

【問合せ殺到】
F・CUPキッス



ガサガサなくちびるじゃモテません!塗って寝るだけ!くちびるがプルルン☆「F」カップ!ふっくらセクシーくちびるでキス力UP☆ポインな悩殺くちびるに彼のキッスが止まりません!くちびる専用スペシャルケアトリートメント

【入手困難!】
LOVEクリーム フレグランス



2009年「婚活」必須アイテム!!草食系男子さえも肉食に変えてしまうフェロモンクリーム!一度塗りでお風呂で洗い流すまで1日中フェロモン炸裂!マンネリカップルもコレで付き合いたてみたいにまたラブラブに☆

【クチコミで爆発】
スリムディナイトEX



特許認可で一般流通から消える前にお急ぎください!年齢/性別/体重/体質/個人差/生活習慣…全て気にする必要はありません!寝る前に飲むだけ!最新良質睡眠式痩身法で脂肪が消えた!この波紋はすでモデル・芸能界でドンドン拡大しています!!

【売れすぎ】
ブライダルレッドドロップ



大切な日の直前にニキビが!!こんな緊急事態に直面したことはありませんか?日本の某ブライダル企業と専門皮膚科医によって共同開発された花嫁のための高濃度ニキビケアローション☆就寝前のたった数秒であなたの肌を救います!

そのほか、ムダ毛処理、フェロモン系、カラコンなど、
女の子のお助けアイテムたくさん!会員特別価格あります☆ →

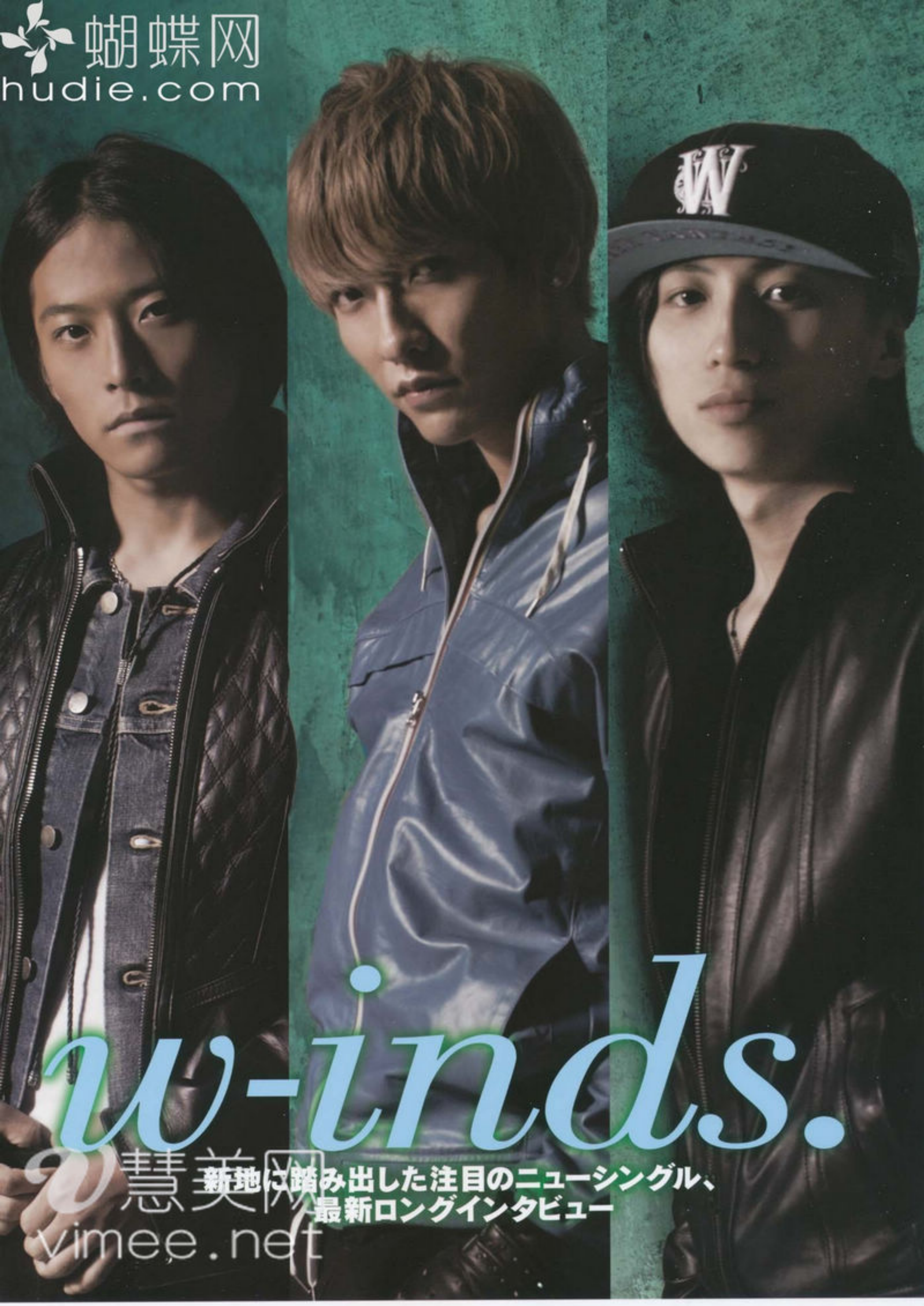
モバイル原宿*表参道はこちら!

URL(PC) http://mhara.jp/

ドコモ iMENU → メニュー/検索 → ファッション/コスメ → ファッション情報へ → モバイル原宿*表参道

au トップメニュー → カテゴリで探す → 住宅・健康・暮らし → ファッション・コスメ → モバイル原宿*表参道

ソフトバンク メニューリスト → 地域メニュー → 関東 → 交通・グルメ・旅行 → イベントタウン情報 → モバイル原宿*表参道



雑誌05292-12

4910052921290
00838

Ⓛ-2009/12/28 定価880円 本体838円

© Out Of Music Inc., Printed in Japa